

產政塾

XII

產政塾

この編は、三十歳前後の前途有為な若者が
溢れる心の叫びを綴ったものである。

目次

●産政塾Ⅷの発刊によせて

(財)中部産業・労働政策研究会

植本俊一

●働くママの自分探し

豊田市役所

内田幸代

●つれづれなるままに

名古屋鉄道株式会社

江尾国博

●産政塾の効用

中部電力株式会社

梶川拓也

●自分の殻を打ち破る

豊田合成株式会社

柏谷幸彦

●「やっぱり“殻”の中だけど…」

トヨタ車体労働組合

加藤秀人

●3つの殻

丸栄労働組合

後藤泰司

37

29

25

17

9

1

● 外は広がった 43

株式会社 豊田自動織機 近藤 雅人
● 産政塾を終えて思うこと 51

デンソー労働組合 高橋 正典
● 「そうだ！チーズを探しに行こう！」 57

トヨタ自動車労働組合 武田 純康
● 『自分探しの旅』 65

松坂屋労働組合 竹中 隆志
● すばらしきスポーツとすばらしき人との出会い！ 71

～これまでの人生を振り返って～
アイシン労働組合 鶴見 実男

● 人生、約半分を生きて 77

東邦ガス(株) 寺西 知雄

● 最近感じること～決意 83

株式会社 UFJ銀行 中里 浩一

● 健康の大切さ 91

中部電力労働組合 中村 明史

● 言葉を越えた愛もあるはず 99

トヨタ車体株式会社 芳賀 章弘

● 大切なもの		107
● 祭り と 私		115
● 無線に対してはパワフルになれる自分		123
● 美しいもの		131
● 今考えること		137
● リーダー達の言葉		141
● 殻をはみ出る		149
● 時の彩り		157

フタバ産業株式会社	長谷部 知英
アラコ株式会社	羽根 章人
アイシン精機株式会社	本田 隆英
株式会社デンソー	松尾 正樹
全トヨタ労働組合連合会	水野 勝博
トヨタ自動車株式会社	村瀬 政彦
全ユニー労働組合	若松 真理
中部産政研 主任研究員	安井 孝一

産政塾Ⅻの発刊によせて

（財）中部産業・労働政策研究会が主催している若手セミナー「産政塾」が、このたび第十二期を終えました。

産政塾は、異業種の若者二十名あまりにご参加をいただき、約一年間に渡って行うセミナーであります。セミナーといつても、あらかじめテーマやスケジュールを決めて講師の指導を受けるといった通常のスタイルではなく、参加したメンバーが自らの企画でテーマや講師を選び、現地に出向いて体験や教えを請うといったプログラムを組み、その中で学ぼうとするものであります。また、産政塾は異業種の若者の集まりですから、多様性を取り入れた論争の場でもあります。企業や仕事の枠を越えて、お互いが夢を語り、天下国家を論じ、講師を交えて論争をし、論争の中から新しいエネルギーが生み出されもします。この活動を通して、参加者は自らの考えを検証し、自分自身の存在や役割を自覚することができることとなり、産政塾は言わば自らを磨く道場というようなものであります。

今回、産政塾への参加者は三十才前後の若者二十二名であり、意欲においても能力においても次代を担うにふさわしい人材の集まりとなりました。人間形成の基本の時期は青春期であると言われておりますが、仕事や家庭における人間としての枠を形成するのは三十才前後からの十年ぐらいと言えるでしょう。一応仕事にも慣れ、自分で判断できる能力も備えつつあり、精神的にも肉体的にも充実し、仕事面でも家庭面でも先頭に立って活躍する時期であります。このような若者の集まりとなった産政塾は、互いに夢を語りあい、自らの企画によってその実践に情熱を注ぎ、そしてこのたび修了いたしました。

振り返ってみると、景気の低迷、米国同時多発テロ、その報復としてのアフガン攻撃、そして中東

情勢の悪化など、二〇〇一年は暗い話題に包まれた年でしたが、そんな中で塾生は各企画を本当に実のあるものにしてくれました。「ユニバーサルデザイン」「健康」「マーケティング」「自然との共生」「グローバル感覚」といった二十一世紀最初の年にふさわしいテーマが企画、実施されたこのセミナーを通して、参加者一人一人が新しい時代に対応するパラダイム、ものの考え方を築くための「何か」を得ることができたものと確信しております。

この冊子は、第十二期生が産政塾での様々な体験をふまえて、自らの想いを「若者のロマンと叫び」として綴ったものであります。ぜひご一読をお願い申し上げます。また、産政塾は極めて小規模の催しであり、参加対象も限定されたものではありませんが、こうした冊子を通して一人でも多くの方の共感を呼ぶことができればと思つて発刊をした次第であります。塾生と同世代の方々の糧となることはもとより、指導的立場にある方々にとつても参考になることが多いと思います。

最後に、産政塾の運営に対して格別の理解と協力を賜りました講師の方々をはじめ、関係各位の皆様にご感謝を申し上げるとともに、産政塾および塾生に対して今後ともご指導、ご声援を賜ることができれば誠に幸いであります。

働くママの自分探し



豊田市役所 本地保育園

内 田 幸 代

〔プロフィール〕

- うちだ さちよ (28歳)
- 1973年 豊田市生まれ
 - 1994年 豊田市役所児童家庭課（現・子ども課）配属
豊田市立堤保育園勤務
 - 1997年 豊田市立本地保育園へ異動
現在に至る
- <家族> 夫、息子（3歳）
- <趣味> ボウリング、エアホッケー（特技ではない）

未知の世界「産政塾」

「産政塾という研修があるのですが、参加しませんか？」ある日突然、市役所の人事課より電話が入った。何の事やらさっぱりわからず、電話を直接受けた上司に尋ねてみるものの、「企業の人達との異業種交流らしいよ。よくわからんけど、今すぐ返事がほしいって。」内容も何も理解できないまま返事をしてしまったのだが、保育職を参加させるのは初の試みだということや、ほとんどが男性で労働組合関係の人が多いという事を後から知らされた。さすがにこの時点で、「異業種中の異業種」という事だけは十分理解できた。

第一回目の開塾式に出席し、部屋に入った瞬間の心情を今でもはっきり覚えている。なんともいえない居心地の悪さ（ゴメンナサイ）。なぜなら、短大を出て保育職に就いた私が、男性がほとんどという場に入り込んだのはかれこれ十年ぶりの事なのだから、無理はない（と思う）。自己紹介を聞いていても、仕事関係の単語が理解できない。これはもう、私の出る幕ではない、場違いな所にきてしまった・・・と、正直思ったものだ。こうして私は、ただでさえ狭い世界で生きているのに、更に自分で殻を造っていったのだった。

ところが、人間というものは（というより私は）柔軟な生き物であるようで、グループ毎に分かれテーマ決めに入った辺りから、固まっていた心も少しずつ溶けだし、普通に話せるようになってきた。思うに、これは同じグループの方々のおかげと、ポツリと出した意見をテーマにして頂いた事が大きいと思う。bグループの皆さん、どうも有り難う……。こうしてこの1日は、自分の殻をかちかち

にさせたり、少しだけひびを入れたり、変化が大きい一日だったのだ。

ちなみに、ここでのいう私の「殻」とは、勝手な解釈だが私が自分の中で無意識に造っている基準であり限界である。まあ、これくらいやれていればいいだろう、これさえ理解していれば何とかなる、という妥協。対人関係においても、この年でも人見知りをして、自分から他の世界へは関わろうとしない為に出来てしまった狭い視野。食欲に学びたいと思うことのない精神。・・・こんなところだろうか。

とにかくこの第一回目からすでに自分の中の少々の変化に気づき、第二回目からは、産政塾に参加する事が大変楽しみであった。今まで自分の知らなかった事、考え方に触れられるのが何よりも新鮮であったし、自分の生きてきた世界の狭さに改めて気づかされたのである。それともうひとつ。私は子育て真っ最中の主婦である。そんな私が仕事関連以外の研修にでるということは、大変貴重な機会であり、もうこんなチャンスは二度とないだろう・・・という思いも後の出席率に影響しているのである。もちろん市役所からの派遣なので優先的に出られるということもあるが・・・。

ある働く主婦のぼやき

ここで、私と同じ立場にある働く主婦の午後五時からの動きを紹介しよう。

五時を過ぎた頃より時計を気にしながら長引く会議に参加し、終わったと同時に帰り支度をし、一

番に職場を出る。車に乗り込んでまず考えるのは、夕食のメニューとその作る手順。保育園に子どもを迎えにいき、家に着くなりすぐ食事の支度にとりかかる。おなかすいたー、ママだっこ、ブロックつくつてとぐずる子どもの相手を片手間にしながら、出来たものから食卓に並べ、食事をする。その間も食べさせたり、こぼした食べ物を片付けたりとよく動く。洗い物をし、風呂の掃除をしてお湯を入れて、新聞でも読もうと座れば、すかさず膝に入ってくる息子。帰宅をした主人が食事をして、いる間に子どもとお風呂に入り、出るとやっと一息。でも一家の朝は早いので、嫌がる子どもの歯を磨き、布団に入れる。絵本を読んだり昔話をしたりしても、寝かせる側が眠る気にならないとなかなか寝ないものである。そしてやはり一緒に寝入ってしまい、夜中に目を覚ますと慌てて洗濯機のタイマーをかけたなり持ち帰った仕事をするのだった。

Sさんは疲れた表情でこう言った。「家事と仕事と子育て、自分が選んだ道なのだからしつかりやらなければいけないのは分かっている。夫も協力してくれている方だと思う。でもストレスを発散する場もほとんどないから疲れちゃう・・・」と。ちなみにSさんのストレス発散法は友人とおしゃべりしながらおいしいものを食べたり飲んだりすることらしい。じゃあ、もつとそれをしなよ、たとえば、「そんなこと言っただけで子どもも小さいし、気兼ねするじゃない！たとえそういう機会に恵まれたって、家に帰れば旦那が機嫌悪いし・・・楽しい気分ぶち壊しなんだから！」とすごい剣幕で返ってきた。

そうなのだ。このように思っている働く主婦は、実際山ほどいる。私は保育園に勤めているが、子

どもの事を話していたはずが、いつのまにやら仕事の愚痴と旦那の悪口を聞かされる羽目になることも多々ある。しかしこれも、今や保育士の立派な仕事なのだ。子どもと一緒にその母親を丸ごと受け止め、何でも話してもらえような信頼関係を作っていく。そして、仕事と家事育児に疲れた母親の心が少しでも軽くなるように、話しかけたり、ゆつくりと聞いてあげるのである。小さな事のように思いかもしれないが、これは虐待防止にもつながる重要な事だ。目尻ががり上がった険しい表情で迎えて来た母親が、話を聞いてもらった事で穏やかになり、笑顔で子どもと帰っていく。そんな場面を何度も目にする。その度に、人と人との触れ合いの大切さを再認識し、子ども達の為にも働く母親の黄色信号を察知する努力をしているのだ。

おや、でもそうなると、私のような働く主婦のストレスはどう解消していけばいいのだろう……。職場では受け止める側で、心境はSさんだし……。この問題は今、模索中である。

子どもをみれば家庭がみえる!?

自分の置かれている立場や職業柄、福祉や子育て環境などへの関心は強くある。特に自分の子をベビーカーに乗せて外出するようになると、不便さを感じるようになったし、そこから、バリアフリー、ユニバーサルデザインといった単語を意識するようになった。また、保育士という仕事に就いてから、“子は親の鏡”という言葉が自分の中で存在感を大きくしていった。

例えば、ゴミをその場に捨てて知らん顔、話を聞こうとしない、提出物を出さない、靴の脱ぎ方等

・・・親子そっくり、まさに子どもは親と同じ行動をとるのだ。これは笑い事ではない。

それと気になるのは、最近世間を賑わすよくキレる子どもたち。カッとなると箇止めが効かなかったり、安易に犯罪を犯してしまう原因はどこにあるのだろうかという事。確かに17歳頃の精神状態は不安定だ。しかしその苛立ちを何か形にするかどうかの分かれ目は、育ってきた環境も大きく関わるのではないだろうか。親や周りの大人たちから学んだ社会のルールや道徳、判断力、そして自分以外に愛情を注いでくれる人がいるという安心感。これらがだんだん薄れてきているようにも思える。

子どもは親の背を見て育つ。心のバリアフリーを広げていける世の中にするためにも、子に恥じない生き方をしたいと最近強く思っている。保育園でも今は家庭と同じような役割をもち、子どもの人格形成に関わることも少なくない。職場でも家庭でも子どもとゆっくり向き合っていく姿勢を大事にしていかなければならない。それが自分自身を成長させる事だと確信している。

最後　に

思いつくままに書いてしまったので、まとまりのない文章になってしまった・・・。最後は産政塾に参加しての感想で終わりたいと思う。

毎回、様々な分野で活躍されている方に出会い、その方の生き方や考えを自分の中に取り込んでみようとする中で、自分はなんてちっぽけなんだろうと感じてきた。また、職が違えば目に留まるものも違うようで一つ発想を変えれば何通りもの考え方が出来るのだと、今更ながら身をもって学んだ。

仕事、家事、育児に追われた生活に、様々な刺激や感動を毎回与えてもらったことは、とても新鮮な、有り難い時間だった。忙しいから・・・と背中を丸めて歩いていた自分の殻にひびは入ったであろう。自分の周りに、殻を破りたいと願いつつ、日々働いている仲間がたくさんいる事が分かっただけでも貴重なそして幸運なことだった。このような貴重な経験をさせて頂いたのだから、これからは今までよりも視野を広げ、自分自身を成長させるアンテナを常にはつていたいと思う。

このような前向きな考えを持てたのも、安井さんをはじめ事務局の皆様、塾生のみなさん、講師の方々のおかげと感謝しています。がんばるぞ！ワーキングマザー！！

つれづれなるままに



名古屋鉄道株式会社 人事部

江 尾 国 博

〔プロフィール〕

えび くにひろ (31歳)

- 1970年 岐阜県生まれ
- 1993年 名古屋鉄道(株)入社
現場実習および関連会社への派遣
研修
- 1996年 人事部配属
- 1997年 名古屋観光自動車(株) (現名古屋観光日急(株)) へ出向
- 1999年 教育センター配属
- 2001年 人事部配属
現在に至る

<家族> 妻、長男(2歳)

<趣味> カメラ、読書

《はじめに》

一昔前「話し方」や「挨拶・スピーチの」なる講座や教室、書籍は、巷に溢れていたが、最近の流行は、「聞き方」や「傾聴の」なる「聴く」にまつわるあれこれだそう。確かに、テレビや新聞を見ていても、書店に足を運んでみても、なるほどと思う。皆さんの目にも、一度や二度、触れたことはないだろうか。また、会社で、教育担当者として、仕事をさせて頂いていると、教育団体からそれに関する研修や通信教育のご提案は少なくない。カウンセリングにメンタリング、コーチングに積極的傾聴など、皆、「聴く」ことに主眼を置いたものばかりだ。それだけ、企業の中にもニーズがあるということなのであろう。何でも、メンタルヘルスに代表される精神的な部分での諸問題が、今、企業や組織の悩みの種になりつつあるそう。幸い、私のまわりにはそのような方はいらつしやらないが、テレビや新聞に取り上げられるニュース・記事を見ても、こうした問題が要因ではないかと思われる出来事が多いのは、皆さんご存知のとおりである。確かに世は、変革の時代である。考えてみれば、個々人が、いろいろな思いを持って、仕事をしている。上手くいくことばかりではないし、複雑な社会構成になるにしたがつて、ストレスは増幅する一方であらう。結果的に、表面化（爆発）する前に手を打たなければ手後れとなってしまう。うーん、特效薬はなさそうだが、対処法として、やはり、まず話しを聴くことから始まるのだろうか。

少し視点を広げてみても同じ事がいえるようだ。島国「ニッポン」も本格的に国際社会の一員になろうとしている？ いや、ならざるをえないというのが真相か。グローバルスタンダードという言葉に

象徴される幾つかの荒波を乗り切って行けるのだろうか。ニッポンの理論、習慣、慣習、掟、常識、エゴなんかは通じない。言うばかりでは、聞き入れられず、そして孤立するだけである。うーん、やはり、ここでも真摯に、国際社会に耳を傾ける時期なのかもしれない。

《コミュニケーションって》

「コミュニケーション (communication)」という英語があるが、これを日本語にするのはとても難しい。ちなみに、辞書を引いてみると、「伝達、伝染、通信」と出てくる。(私が学生の頃は、よく「文通」と訳していたことを思い出す。実に懐かしい。) いずれにしても、今一つピンとこない。ここで一つ質問。皆さんは幼い頃、「しつかり人の話を聞きなさい」と注意されたことはないだろうか？ 私も含めて、多くの日本人は、「人の話を聞く」ということは、幼い頃から、大切なこととして言い聞かされてきた。何故だろうか？ 多分、それは、話を聞くこと以上に、聞かせることが大切(目的)だったのではないかと私は思う。親が子に、先生が生徒に、先輩が後輩にという、図式を見てみるとうなずける。自分の意見を絶対だとして押し付ける上司、子供が学校での出来事を話そうとしているのに、忙しいからと相手にしなくせに、自分の思い通りにならないと、言うことを聞きなさいとヒステリックに叫ぶ母親、子供の教育については母親の責任だといって無関心を装う反面、仕事の愚痴を言う父親。挙げればきりがなし。こうした事柄は、どうして起こるのだろうか。私は、日本人のコミュニケーションに対する認識の違いが働いているからではないかと考える。コミュニケーション

ンの主体を「話す」ことに中心を置く考え方と「聞く」ことに中心を置く考え方。コミュニケーションの持つ効力に対する理解の仕方。実は、この認識のズレが、非常に大きいのだ。今では少なくなつたと思うが、職場で、コミュニケーションを図るといつて、旅行を計画したりするところもあつたが、多くは、若者に反対もしくはいい顔をされずにお流れとなるのである。また、上司の指示を受け、取り組んだ仕事に関して、折角精度の高いものであつても、いわゆる報連相不足のためが故、頓挫してしまうこともある。つまり、多くの日本人は、コミュニケーションの大切さは認識していて、あらゆる場面で訴えてはいるものの、その本質について、共通認識していないのである。雰囲気でおぼろげながら捉えてはいるものの、それは人それぞれによつて違ふことである。蛇足だが、コミュニケーションをもじつて、よくノミニケーションという言葉に耳にする。今の時代、この言葉を職場で声高らかに唱える上司がもし皆さんの職場にいたら、危険信号だそうだ。(一部の優良企業を除いてだが・・・) 注意されたい。

職場でのコミュニケーションについては、皆さん、ご苦労も多いかと思うが、特に我々のように、上司、部下に挟まれるいわゆる中間層に当る者にとつて、切実な問題なのかもしれない。人の話を全く聞かない頑固オヤジ系の上司もいれば、濡れ落ち葉のようにたたずむ上司もいる。片や、全く何を考えているか掴めない宇宙人のような部下がいると思えば、バリバリ仕事をこなし、どんどん突き上げてくる部下もいる。このようなメンバーに囲まれ、溜め息の連続で、唯一の息抜きがアフター5の時間だという方もいらっしゃるだろう。それに加えて、こんな時代である。リストラの名の下に、能力主義・成果主義といわれ、人減らしと給与減らし。気づくといつも終電車の毎日。いやはや、災難

である。

こうして見てくると、コミュニケーションの善し悪しが、我々の生活において、如何に重要であるかが分かる。というよりは、如何に難しい代物かということになるかもしれない。かといって、避けて通る訳にもいかず、無しで済ませることもできないため、人は皆、独自のコミュニケーションを採ろうとするのである。これが、また問題を複雑にするのだが……。しかしながら、幾つもの荷物を背負った多くのビジネスパーソン達は、歯を食いしばりながら、困難に立ち向かい、何とか乗り越えていくのである。或る者は、仕事と割り切り、また、或る者は、運命と定め、自分の中で消化しなから。

《男と女、話すと聴く》

さて、会社と並んで我々の生活の大部分を占める家庭ではどうか。ここでも、コミュニケーションの問題は、大きく立ちはだかる。むしろ、家庭生活でお悩みの方が意外と多いのではないと思う。世の夫婦は、皆、それぞれ愛し合い一生共に歩むことを誓って夫婦の契りを交わす。そんな遠い記憶のことと言われるかもしれないが、戦国時代の政略結婚でもないかぎり、多かれ少なかれ当てはまる筈だ。しかし、年月が過ぎるにしたがって、行き違いが生じ、不仲と言われる状態になってしまふ夫婦もある。どうして、そうなってしまうのか。さまざま要因の中で、最も多くを占めるのが、ここでも、コミュニケーションに纏わる類である。夫婦は、男女で1対である以上、これが問

題の始まるとなる。一般的に男は、話を聞くことが下手である。下手というよりは正確に言うと言かないのである。というのは、男は、女の話に対して、ただ聞くだけでなく、頼まれもしないのに、勝手に問題解決を図ろうとし、自分の意見を述べ、結論づけようとするのである。加えて、不器用だから、何か他のことをしながら話を聞くということができない。例えば、テレビを見ながら、話を聞いていると、だんだんテレビに夢中になってしまつて、知らず知らずに生返事をしてしまう。一方、女は、話をする事で共感を得たい、理解されたい、という欲求を満たそうとする。決して、意見を求めている訳でも、アドバイスをされたい訳でもない。さらに、器用な面も持ち合わせているため、他事をしながらでも、十分に会話を成立させうる。こうした違いは、その筋の専門家に言わせると、脳の作りに起因するそうだ。神様は、なんと罪作りのことをしてくれたのだろう。

こうして見てくると、冒頭の話进行を思い出す。人との関わりにおいて、コミュニケーションの重要性は言うまでもないが、今は、その自身が問われる時代なのである。「話す」ことは、確かに大切である。自分の意見を主張することで、自分のことを分かつてもらったり、距離が縮まつたりもする。しかし、別の言い方をすれば、自らの価値観、パラダイムといったものを「殻」に閉じ込め、それを「話す」ことで守っているのかもしれない。「攻撃は最大の防御なり」とは、よく言ったもので、人は、話すことで、自分の「殻」に頑なに閉じこもっているのかもしれない。

では、「聞く」こととは、どんなことだろう。キクには、「聞く」と「聴く」が存在する。最近、よく使われるのは、「聴く」の方である。調べてみると、「聴く」を「聴す」と書くと、「ゆるす」と読むそうだ。そうだ、「聴く」とは、ただ人の話すことキクだけでなく、心の扉を開いて、相手のこと

を受け入れる、受け止めるということ、そして、相手の立場で考え、行動することではないだろうか。本当に、人という関係を築きたいと思えば、それには、自らの「殻」に、閉じこもっていないで、自らの「殻」を打ち破って、いろいろなものに耳を傾けなければならない。そこから、すべてが始まるような気がする。

《最後》

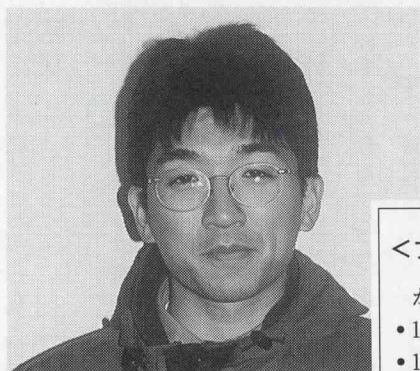
「殻の外へ踏み出そう」のテーマで始まった、今回の産政塾。各回の企画に何とかすべて参加することができ、自分なりに刺激にもなったり、新しい発見もした。ここで学んだことを、一層活かしていくためにも、「聴く」ということを意識して、これからの人生を歩んでいきたい。今まで以上に、厳しい道程かもしれないが、産政塾での体験が、大きく一步を踏み出す、良いきっかけを与えてくれたような気がする。

自分が最近思っていることを、率直に取り止めもなく書かせていただきました。久しぶりにペンを執り、思い巡らせてみました。意味不明な文章に、最後までお付き合いいただきましてありがとうございます。

最後に、産政塾という機会を与えて下さった会社や上司、ならびに中部産政研に感謝します。また、短い期間ではありましたが、楽しく有意義な時間を過ごせたことに對し、塾生のメンバーならびに事

務局の安井さん、本当にありがとうございました。次回、お会いできる日を楽しみにしております。

産政塾の効用



中部電力株式会社

梶川 拓也

<プロフィール>

かじかわ たくや (32歳)

- 1969年 8 月 愛知県名古屋市生まれ
- 1993年 4 月 中部電力株式会社入社
三重支店鈴鹿営業所配属
- 1995年 8 月 静岡支店静岡営業所配属
- 1997年 8 月 本店配電部配属
現在に至る

<家族> 妻, 長男 (2歳), 次男 (0歳)

<趣味> アンデス音楽の演奏, 旅行

△産政塾生としての私▽

残業して帰宅したある晩のこと、産政塾誌の原稿のネタ探しをきつかけに、最近の自分自身のことについてあれこれと考えていた。そのうち「自分って客観的にどう見えるのだろう？」という、すぐには答えがでないことまで考えはじめてしまい、はたと止まってしまった。「よし、困ったときはインターネットで解決するのが現代のソリューション術だ（確かビル・ゲイツも言っていた）」と、実に安易で横着な方法であるが、検索サイトで自分の名前を入力しホームページを検索してみた。

検索エンジン「Google」で検索した結果、全部で二二件のヒットがあった。思ったより多い。その中身は・・・仕事関係（会社、研究論文など）がほとんど、そして趣味関係（アンデス地方の民族音楽：フォルクローレ）が少々、同姓同名の別人のページが数件・・・と続き、その中に堂々（？）「第十二期産政塾生」のホームページがあり、私の名前も産政塾生として掲載されていた。

仕事関係や趣味関係がヒットするのは、自分もある程度想定していたが、産政塾のホームページがヒットしたことは驚きだった。タイミング的にもバッチリで、何か因縁めいたものすら感じた。そして、産政塾生としての自分をこんなカタチで「世界へ発信」している事実、身の引き締まる（？）思いがした。

私と産政塾の出会い、その他大勢の塾生と同じく、まったくの受動的要因からであったが、約一年にわたる産政塾は、今振り返っても、本当に有意義なものであった。ひょっとしたら、ヒットしたホームページの割合くらい（二二分の一）は自分の心の中に、今もしっかりと根ざしている（かもし

れない?」。

△産政塾での出来事▽

産政塾での出来事について、手元に残っていたメモを手がかりに整理してみたので、紹介したい。

◇清水茜氏：「ユニバーサル・デザインについて」

産政塾の最初の講演であり、私にとっても最も得ることの多いものとなった。この講演により、その後の産政塾への取り組みも前向きになり、後で述べるが私の人生における大きなチャンスに結びつきもした。

自らも障害を持つ彼女は、「ユニバーサル・デザイン」という考え方や、マイノリティの視点を分かちやすく教えてくれた。法制度の動向、業界動向に関する話は、近い将来、この考えが様々の分野でスタンダードになる時代の到来を予感させるものであった。

この考え方は、自分にまったく新たな価値観をもたらした。講演の後も私なりに勉強し、仕事や日常生活など、私が関わる様々なことに、この考え方をあてはめてみた。

私は今電力用機器の技術開発部署にいるが、電力用機器は一般の家電製品とは違い、その性能もそれを扱う人も「特別なもの」「難しいもの」である。ところが、開発のコンセプトの最上位に「誰でも」「容易に」というユニバーサル・デザインのコンセプトをもつてくると、アラ不思議、形状や配

色など、まだまだ工夫の余地があることが浮き彫りになってきたのである。（塾長の声がする「殻の外からでは当たり前の中でも、殻の中からは分からない。」）。これらの新しい視点から、様々のことを見つめ直すという作業は大変楽しいものであった。

その後、社内で四ヶ月の海外への調査研修（テーマ自由）の募集があり、ユニバーサル・デザインをテーマに応募したところ採用となり、平成十三年十月から米国へ行くこととなったのである。結局、九月の米国同時多発テロとその後の混乱により、海外渡航そのものが延期になってしまい、今のところ実現していないが、「ユニバーサル・デザイン」の発祥の地で、様々なモノたち、人々に触れることは今から私の大きな楽しみの一つである。

◇ノーマン・エルダー氏：「USJのマーケティング手法について」

かつては東京ディズニーランド、今はユニバーサル・スタジオ・ジャパンを成功に導いたノーマン・エルダー氏は、実践的体験をもとに、マーケティングにおける「成功者」のひとつの姿を提示してくれた。

彼は、産政塾の他の講師と違い、我々と同じくビジネスマンである。しかし、競争相手を出し抜いて顧客を獲得するという機会の少ない公益事業に携わる私にとっては、研ぎ澄まされた戦略・戦術や、彼らの顧客獲得への執念は、新鮮で興味深いものであった。

しかし、ひょっとしたらこれは普通の会社では普通に抱えている感覚なのかもしれない（？）という心配もでてきた。もしそうだとすれば、このままではいけない、普通の会社になるよう努力せねば

と思うのであった。

◇林正道氏：「二十一世紀における自然との共生―スナメリの棲む海からの声―」

この人物は、あまりにも圧倒的であつた。徹底的で凄絶な生きざまを背景に、専門の海洋生物だけでなく森羅万象すべてに對し、続々とあふれ出る愛情を押さえきれずに熱く語る姿は、今も私に強く突き刺さっている。

今はヘドロだらけであるが、つい数十年前までは世界有数のきれいな海であつた名古屋の海・日本の海を少しでも本来の姿に戻していくことが我々の義務である、残された月日をひたむきに生きる林氏のように、我々もいかなるものからも逃げず、目を閉じず、ただ前向きにすすんでいくことが、自然の一員としての我々のなすべきことではないか、などといふ私も力んでしまうくらい、印象に残る講演であつた。

◇木下尊淳氏：「世界の中の日本―人と人を結ぶ音楽の力―」

木下氏は前述の林氏に比べると、強い情熱、鋭い感性を持ちながらも、芸術家らしく（？）繊細さ、一種の自己本位、という要素を持った人物であつた。しかし、講演の間に挿入曲として、彼の指先から発せられるアンデス地方の民族音楽（フォルクローレ）は、紛れもなく我々を圧倒した。

十代で単身ボリビアへ渡り、一流アーティストとして活躍する木下氏の迫力あるギターに「音楽は、こつとも簡単に国境や言葉の壁を突き抜ける力を持っているのか」と、震えがくる思いがした。

フォルクローレについては私も学生時代からTakuya & Yoshioというアマチュアグループで演奏活動が続けており、もう十年以上になる。そこで私と組んでいる溝口祥夫氏は、木下氏が講演中にも触れられたとおり、この業界では知らない人のない有名人であり、演奏スタイルはちよつとハードだが楽しい。いつか第十二期産政塾生の集まりがあれば、ぜひ披露させていただきたいと思っている。

△産政塾の効用▽

さて、あらためて産政塾の効用について考えてみたい。

以前と比べ産政塾後、自分の中で重視するようになったのは「実践」と「循環」である。

「実践」は異なる価値観の受認に役に立つ。

世の中には様々な価値観がある。当然である。しかし、残念ながら頭の中で「こんなことアホくさい」と思っている価値観も山ほどある。この中には自覚していないが、「偏見」もたくさんあるだろう。

おそらく産政塾講師の方々のような生き方、考え方の中には以前の私ではとうてい受認できなかったものもあると思う。多分私の場合、自覚していない「偏見」の多くは実践でしか完全に払拭できないであろう。産政塾で、今まで私が否定的であった価値観を持った人々と出会い、その人々に触れてはじめてその意味が理解できた。そのたびに恥ずかしい思いをした。自分の至らぬ点である。今後

は「実践」を師に、常に謙虚であろうと思つてゐる。

「循環」は殻を破るのに役に立つ。

最近、「自分のこういう点が嫌い」とか「自分の会社のこんなところを変えたい」とか自己批判することが多くなつた。その根底にあるものを考えると、自分を殻に閉じこめるモノに対する嫌悪感が強くなつたようである。「停滞」「拘束」「マンネリ」「守旧」「拘泥」、これらも同義語であるが、こういう状態から脱し、新しい風を「循環」させたい、新鮮な空気に触れていたいと思うようになったのである。

それ以外の変化として、「恥」をいくぶんか気にしなくなつたことが挙げられる。短い人生なりふりかまつていられない、恥ずかしがつてゐる暇があつたら、多少とも精進しよう、という考えが芽生えてきたからであろう。進歩なのか、単に歳をとつただけなのか、判断に迷うところであるが。

△「一人産政塾」のはじまり▽

産政塾での活動では、多くの感動や気づきがあり、それらは今も私の中で生き続けている。

今後は、「一人産政塾」のはじまりであるが、産政塾生としてその名に恥じぬよう、自覚をもつて行動していきたいものである。何せ、自分が産政塾生であることは世界に発信されているのだから。

最後に。事務局の安井さん、産政塾生の皆さん、一年間、本当にありがとうございました。また、

いずれお会いする日を楽しみにしております。

自分の殻を打ち破る



豊田合成株式会社
人事部ライフサービス室
柏谷 幸彦

<プロフィール>

かしわや ゆきひこ (37歳)

- 1964.12.19 東京都杉並区にて出生
- 1987.04.01 豊田合成株式会社に入社
- 1987.10.01 豊田合成株式会社
情報システム部に配属
- 1992.11.01 尾西工場工務課に異動
- 1993.11.01 人事部厚生課に異動
- 2002.01.01 メイホーサービス株式会社に出向
現在に至る

<家族構成> 妻・子供2名(長男・次男)

<趣味> 子供と遊ぶこと

私は中学二年から大学四年までの殆どをバレーボール中心の生活を送り、そのバレーボールが縁で進学もしてきた。しかしながら、大学四年時の就職においては私なりに、いろいろと悩んだ。

というのも、今日まで頑張ってきたバレーボールを続けるか、そのバレーボールを趣味のものに切り替えるかについてだ。最終的な結論としては、バレーボールを続けようということに収まった。

その理由としては、

- 今までバレーボールを通じて両親はもとより周りの方々のご尽力・ご指導・ご支援があつて今の私がいるということ。

- バレーボールについては半人前であり、まだまだ上達したいという気持ちが強いうこと。

- そして、この様な私に対して、声を掛けてくださる企業があるということ。

である。

現在の厳しい社会情勢においては、まさに羨ましいというか贅沢な考え方であつたと多少反省はしているが、22才の若者が出した結論である。

このような理由で現在の豊田合成（株）に入社と至った訳であるが、現在では会社をあげて全面的に強化支援を頂いているクラブであるが、私の入社時は強化クラブの駆け出しの時期であり、業務も通常どおりに遂行し、勤務後にクラブ活動をする。そしてクラブ後にまた業務に戻るという環境で五年間頑張ってきた。

今のバレー部は会社のご理解を頂き、午前中業務をし、午後はバレーの練習という環境を整えて頂

いている。私の入社時の環境と現在の環境のどちらが良いかとよく聞かれるが、正直なところわからない。

話は変わるが、私にとってこの「産政塾」に参加させて頂き、テーマである「殻を打ち破る」について考えさせられた。先程の件から、現在ではグループリーダーとして福利厚生業務を遂行しているがこの塾に参加するまで、「私はバレーが縁で入社してきたが、一般で入社してきた者には絶対負けたくない」という気持ちがあまりにも強かった。一見、負けず嫌いに思えるのであるが、裏を返せば多少言い過ぎであるが劣等感に近いものがあつたのであろう。

当たり前であるが、年々業務の負荷であつたり、その内容というか責任の度合いは高くなり、数年前までの様に一担当ではなくなり、部下もできプレッシャーもある。

現在も自他共に認めるが、まだまだ半人前であり、勉強することが山積しているが、私自身の中で、一般で入社してきた者に負けたくないという気持ちが強すぎ、時に空回りし、自分を見失うことが多々生じた。

この塾に参加し、「殻を打ち破る」とはどういう事だろうと考えるきっかけになった。勿論、いろいろな方の体験談や塾生の方々との対話の中で勉強になることがあつたが、私の中の「殻」というものに気が付いたということが、とにかく成果である。

その「殻」は、他人と比較して勝ち負けに拘るのではなく、私自身にこだわるということである。先ず、私自身の色をつくることではないかと思う。

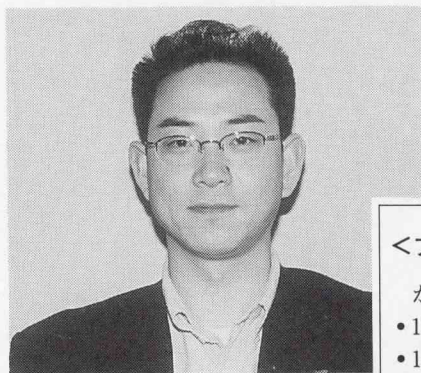
今後の取り組みとしては、

- 基本に忠実（当たり前前のことを当たり前前に実施する）
- 何事にも食欲に取り組む姿勢

多分、何を当たり前のことをいまさら言うのだと笑われると思うが、私は基本事項については、今一度原点に戻って取り組み、目標については目線を高く取り組みたい。

一度しかない人生である、とにかく一生懸命頑張っていきたい。そして、その親父の姿を見て、我が子に何かを感じて貰えれば良いと思う。

「やっぱり“殻”の中だけど…」



トヨタ車体労働組合

加 藤 秀 人

<プロフィール>

かとう ひでと (32歳)

- 1969年 愛知県瀬戸市生まれ
- 1992年 トヨタ車体(株)入社
第1機能設計課に配属
- 2000年 トヨタ車体労働組合(BW)の執行委員となる
現在に至る

<家族> 妻、長男(0歳)

<趣味> 読書

はじめに

産政塾のテーマ「自分の殻を破る」を通じた半年を越えるさまざまな活動は、自分にとって大変有意義で価値のあるものだった。「自分の殻を破る」。こういう機会がないと、日々に追われ、そんな発想自体が浮かばない。日増しに厚くなっていく「自分の殻」は、知らぬ間に「それが自分のいるべき空間だ」という既成概念を同時に形成していく。そして自分が住んでいるのは「自分で作った殻の中なのだ」という自覚をも麻痺させていく。「自分を囲む殻」というものは生きていく限り、形成され続ける。その存在に如何に早く気づき、それをどれだけ破りながら生きていけるのかということが「自分を知り、育てる」ことになると思う。「今まで自分の殻が如何にして形成されてきたのか」という意味で、この機会に、これまでの自分の歩んできた道を振り返ってみようと思う。

幼年期

昭和44年3月26日、愛知県瀬戸市で生まれた。父と母、上には3歳年の離れた兄がおり、以降30年、この4人で家族として暮らしていくこととなる。今思い出してみると、この頃に今現在の自分の「人格」と言うか「性格」が形成されていたようだ。簡単に言ってしまうと「最初人見知りをするが、慣れるととことん馴れ馴れしい」。ある時とはとことん大人しく、ある時は尋常ではないくらいやかましいという、裏表のある自分でもあまり好きではない自分の「性格」だ。この性格の「内向的」な部

分が、後々まで「自分の殻」を作る要因になっているようだ。

少年期

小学生になって自分の周りにいる人が増えてくると、「内向的」「外向的」という両極端な二面性によりはつきりと形作られるようになった。その「内向的」な部分の産物として「自分の世界を守りたい」という自己防衛本能からか、まず「第一の殻」が作られる事になる。そして、その殻の中に閉じこもって、「本を読む」ことや「絵を画く」ことに没頭し始めた。同時に空想癖が生まれ、現実逃避をするようになる。本を読んでいるときや、絵を画いているときは全てを忘れることが出来た。これが非常に心地よく、多くの時間を費やすようになる。しかし一方では「外向的」な部分も確かに存在していた。その証拠として、仲の良い複数の友人と毎日のように遊んでいたし、クラスの中でも、「おしゃべり」と言う分野では、特に目立っていたように記憶している。「外向的」と結びつくかどうかはわからないが、「長」のつく役もやったこともある。

中学に入ると、「第一の殻」を破る、大げさに言えば、人生のひとつの転換点を迎えることになる。それがスポーツとの出会いだ。それまでは資質的に恵まれていなかったというせいもあり、遊び以上のスポーツをやるうとは思わなかった。本を読む事のほうが好きだった。しかし、学校の方針で部活動というものに所属せざるを得ず、当時の友人の誘いもあって、「バレーボール」という初めて体験するスポーツを選んだ。そう感じる人が多いかもしれないが、ここで初めて「人間社会とは何ぞや」

というものを学ぶことになる。上には「先輩」がいて、横には「同級生」つまり「同僚」が、下には「後輩」がいる。「先輩」は「お兄ちゃん」ではなく、いわゆる「上官」で、顧問の先生は「司令官」だ。意味を持たない抑圧や強要を受けることにより「忍耐」を覚え、「勝利」という課題を与えられ、遂行もしくは挫折することにより、「達成感」や「虚脱感」を知る。また同じ目標を目指し、「チームメイト」とともに苦楽を共にすることにより「共生」という生き方を学ぶ。今まで、保護者の擁護のもとに生きてきた子供が、自分の殻を破り「大人」の一端を垣間見た初めての機会といえるだろう。

＼青年期・学生編＼

第一の殻を破り青春時代と言えるであろう中学時代、一転して義務教育の延長のような無気力な高校生活を送り、成人が近づくにつれ、他人からは比べれば、かなり遅ればせながら「独立」という概念が頭をもたげてきた。家族から離れ、自分ひとりで生きることには無性に憧れをいだくようになった。「一人暮らしがしたい」。そんな理由から、地元から遠く離れた県外の学校に進学し、念願の「自由」を手に入れた。抜け出したつもりでただ見えないだけの、さらに厚くなった「親の擁護」という殻に守られながらも、自分ひとりで生きていく為に、新たな殻を作った。これが人生の中の「第二の殻」であり、「大人」としての最初の殻と言えるものだろう。これが第一の殻と違う点は、ポジティブな意思のもと形成されたということだ。第一の殻が無意識の内に自ら形成した言わば「外壁」だっ

たのに対し、この殻は自ら身にまとう「鎧」と言ったところか。この「鎧」は「鎧」と呼べるほどの代物ではなかったが、一人の大人として生きていく為の「社交術」と言い換えられるかもしれない。この殻は学生時代を過ごすには非常に都合の良い殻ではあったが、あくまで「学生だから」という前置きがっているから通用するといった程度のものでしかなかった。

＼青年期・社会人編＼

居心地の良かった学生時代もあつという間に過ぎ、いよいよ社会人として生きて行くことになった。ＴシャツをＹシャツに着替え、ジーンズをスラックスに履き替えて、「なり」だけは一丁前でも、実際やっていることや精神年齢は子供の頃に思い描いていた「大人」のイメージとは大きくかけ離れたものだった。まさに日々の会社生活に「翻弄される」といった毎日が続いた。自分の能力の無さや努力を怠ることを棚に上げて、ただただ不平不満を口にし、周りや自分の置かれている立場や持つ責任を認識しようとしてもしないで、現状を嘆いた。社会人の１年目にして既に、一部の社会人というか会社人間特有の「被害者意識」に取り憑かれてしまっていた。これが人生最大且つ最強の「第三の殻」だ。（この殻は破ったつもりでもなかなか破ることのできないやつかいな殻であり、これを克服できるか否かが、人生を豊かなものにできるか否かにつながると思っている。）そして、この殻が徐々に確固としたものとなりつつある時に、自分の人生を大きく左右するであろう出来事というか状況に相對することになる。それが「労働組合」という組織との出会いと係わり合いだ。一つの考え方として「会

社人でありながら、その会社人である自分を客観的に眺めることができる。」というのが労働組合に携わる者の、ある意味特権だと思う。自分の場合、社会人になってから、自分の求めるものが何なのかはつきりしないが、いつも「何か違うんじゃないか」と心の片隅で思いつづけてきた。と言つてもあくまでそれはただ単なる不平・不満でしかなかったが、いつも漠然と「もつと良くなりたい」という気持ちを持っていた。関係者の方にはお叱りを受けるかもしれないが、それが労働組合の活動の理念と少なからず合致していた為、組合の役員を引き受けるきっかけにもなった。「今を変えたい、何とかしたい」という気持ちは、程度の多少はあるにしても、会社人となつてから10年間常に持ち続けてきた。と言つても、「では自分で何かアクションを起こしてきたのか」と問われれば、答えに窮してしまうが。

ゝ現在（いま）ゝ

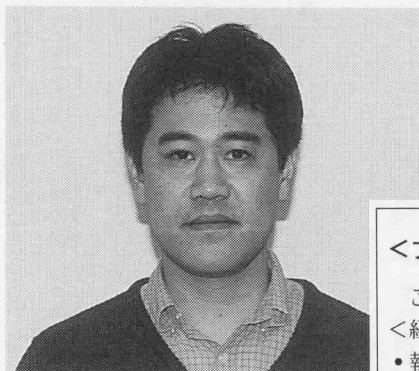
そして今は労働組合の執行委員という立場になっている。「今を変えたい」という思いを実現しやすい立場にあると言えるかもしれない。では「今現在の自分を包み込んでいる殻はどうなっているのか」と考えたら、「未だ今までの殻の中」と言わざるをえないだろう。やはり、現実はあるものでない。と言うか、自分を変えることは容易ではない。労働組合の役員であるにも関わらず、相変わらず「内向的で外向的」だし、精神年齢は成長していないし、被害者意識を振り払えないし。でも「殻を破る」ことは「自分を変えること」ではない。少しでも「自分を変えようとする」ことだ。自

分を変えるためには、まずは自分を知る。そういう意味で、時間的には極めて短い経験であったが、産政塾への参加は「自分を省みる」きっかけであったと同時に、「今後どうしていくべきか」、と言うことを考えさせてくれるいいきっかけであった。これからも様々な「殻」が自分を包み込んでいくだろう。そして殻を破って抜け出すことは出来ないかもしれない。しかしその幾多の「殻」の中にいる自分自身から目を背けずに直視し、どうあるべきかを追求し、破ろうとする心は常に持ち続けている。

ゝ最後にゝ

訳のわからないことを取りとめも無く書きなぐってしまったことをお許し願いたい。また、とって付けたようになってしまい心苦しいが、この産政塾は、活動自体も、参加した仲間達も、事務局の安井氏も本当に素晴らしかった。こういう経験や仲間巡りに出会えたこと自体が、今後の自分にとって、本当に貴重な財産になると確信している。この財産をいつまでも大切に持ち続け、思い出しながら「また新しい殻に取り込まれていないか」と、常に自分に問い掛け続けていきたいと思う。

3 つ の 殻



丸栄労働組合

中央執行委員

後 藤 泰 司

<プロフィール>

ごとう やすし (36歳)

<経 歴>

・執行委員暦 10年目

<家族構成> 父・母・妹との4人家族（本人独身）

<趣 味> パソコンいじり、ギター弾き、お酒の会。

<モットー> ①やる気と根性で難関を乗り切る！ ②子供と女性と動物にやさしく、強い人には逆らわず。

会社に入社して15年、労働組合の執行委員として9年。その間、社会人として多くの人に会い、様々なことを学んできたが、「産政塾」での経験は自分にとって通常では得られない大変有意義なものとなった。組織の先輩から塾への参加を勧められたときは、塾の趣旨等を十分に認識していなかったこともあり、また仕事も山積している状態であり、正直言うと同僚な気持ちがあった。しかし、そんな気持ちはそんなに長く続かず、第1回、第2回と出席するうちに、すっかり開塾が楽しみになった。日頃なかなか接することができない他業種に働く人たちと出会い、交流を深められたことは特にありがたかった。自分の見識の範囲が意外と狭いことや、考え方の未熟さを改めて知ることができた。

塾のテーマ「自分の殻を破ろう」について。今まで自分は「殻」というものを意識したことがなかった。仕事もプライベートにおいても、比較的何でも挑戦したい性質であり、得意なもの、誇れるものはそれなりにあると思っていた。それらはささやかな自信につながり、「今のままの生き方で十分」という傲りになっていた。ところがそれが「殻」であった。以下に、産政塾での経験に感化されて自作した「3つの殻」①非常識な常識の殻、②苦手意識の殻、③知らなくていいの殻 について考えてみた。

① 非常識な常識の殻

家庭、学校、会社。子供の頃から現在まで、自分のおかれた小さな環境の中で培われてきた「常

識」には、おかしいものも混じっているようである。

小学生の頃、クラスのリーダー的存在であった同級生がある女の子を指して、「彼女と話をしたら仲間はずれだ」と触れ回った。(何故なのかはとうとう分からず仕舞いだったが、今から考えれば、彼はこの女の子を好きだったのかもしれない。．．．がこれは余談) その日から、彼女に会うと皆で無視をしたり、よそよそしくした。自分としては子供心にもこれが大変不思議に思い、どうしても納得できなかったので、数日後その「掟」を破った。その日から、自分も無視攻撃の対象となった。当時は「いじめ」という社会問題はなく、それらしいものがあつたとしても、今のような陰湿なものではなかったはずである。この時も攻撃は一時的なもので、一週間も続かなかつたと記憶している。それでもかなりのショックを受けた。ずいぶんと寂しかった。以後この種の「掟」を破らないよう注意しようという教訓となった。

くだらない例だが、このようなおかしい「掟」は大人になつてからも意外にたくさん見つけることができる。誰が決めたのかは知らないが、納得できない、世間で通用しない理屈が、小さな限られた環境下で「非常識な常識」となつて大切にされている。そして相変わらず子供の頃の教訓に縛られた自分にはなかなか破れない大きな「殻」となっている。

② 苦手意識の殻

自分は仕事や趣味でパソコンをやる。表計算やワープロ、少々のグラフィック、インターネット。

素人の域としてはまあまあやれるほうだと思う。しかし底が浅い。ある程度のところまで行くと「もうこれくらいでいいや」という気になる。とことん掘り下げることができずに、結局中途半端な知識・技術しか身につかない。これはパソコンに限ったことでなく、いろいろな分野で同じ言い訳が出てくる。苦手意識という「殻」を破ればもっと良い人生になるはずだが。

実は最近やっとパソコンのプログラムというものをやろうと決心した。36歳になってから勉強をはじめるのはあまりに無謀だと思われるが、その思いを「殻」と捉えて破ることにした。まだ勉強をはじめて数日であり、いつものように中途半端で終わるかもしれないが、できるだけ諦めずにやり遂げるため、自分自身のプレッシャーとしてここに書き記すことにした。

③ 知らなくていいの殻

産政塾のプログラムのひとつに、名古屋港に住む「スメナリ」というイルカを通して環境問題を考える機会があった。講義中、ビデオに登場したスメナリは本当に可愛らしかった。また名古屋港にイルカが生息していることに純粋な驚きを感じ、その生命力に感動した。ビデオの後半、スメナリの親子がお腹にゴミをいっぱいためて死んでいるシーンがあった。実に切なく、やり切れない思いをした。世界で起きている多くの不幸な事件や、ますます深刻になる「環境問題」について、対岸の火事として捉らえていなかった自分に最近やっと気付いた。海を汚染する大きな原因のひとつが家庭排水であることは有名であり、もちろん自分もそれを知っている。しかし海が汚染されるとどのような事態を

引き起こすかについて、深く認識しようとは考えなかった。また、今も飢えや戦争で多くの人が命を失っていることを知っているが、なぜそうなるのかの本質に関心を持たなかった。知っていても何もできないから、知らなくていいと思っていた。最近このことが人間として如何にいけないことに気付き、心から反省している。これからは「知らなければならぬこと」について常に意識していきたい。自分で何ができるのかはわからないが、やれることで努力を続けたい。

自分の「殻」とは何か。「殻」を破るにはどうしたらよいか。漠然としつつも重要なテーマであり、塾を卒業してもいまだ気付いていないことの方が多いと思われる。これからも少しずつ探求しながら、自分の未熟さを矯正していきたい。

自分のことを書くのは小学校の作文以来であり、自慢できることがあまりなく、反省点ばかりで正直うんざりしている。これが産政塾の塾誌として残されるのは決して気持ちの良いものではなく、かなり恥ずかしく思う。しかし、できる限り「殻」を破りつつけて、数年後にこれを読み返したとき、自分は少なくとも成長したと思えるような生き方をするよう努力したい。これくらいの強がりをおかないと、自分が席をおいた産政塾に申し訳がない。

外は広かった



株式会社 豊田自動織機

近 藤 雅 人

〔プロフィール〕

こんどう まさと (37歳)

- 1964年12月 愛知県生まれ
- 1987年 4 月 (株)豊田自動織機製作所 入社
- 1991年 7 月 CATV「KATCH」 出向
- 1994年 7 月 共和工場総務室 勤務
- 1998年10月 ドイツの生産子会社「TDDK」
出張
- 2000年 7 月 人事部人事室 勤務
現在に至る

<家族> 妻、双子の娘1組(9歳)

<趣味> 麻雀、台付きテニス

〔はじめに〕

このたびは、産政塾に参加させていただきありがとうございました。各会合では、講師の方々の生きざまや思いを聴かせていただき、人生そのものを考えさせられる場面もありました。

会場見学や講話も良い経験でしたが、一番の収穫は、塾生の皆さんをはじめとする多くの方々との出会いではなかったかと思います。同期塾生、中部産政研・講師の皆さん、これからもよろしく願っています。

今回のテーマ「殻の外へ踏み出そう」については、自分のわずかな経験（国内出向・海外長期出張）を通したエピソードとそこで得たこと感じたことを思いつくまに書かせていただきます。

〔ローカル編〕

外に出た。入社四年目で出向。出向先は、刈谷・安城・高浜・知立・碧南をサービスエリアとするケーブルテレビ局「KATCH（キャッチ）」。

各市の頭文字をとってK・A・T・C・Hである。平成三年六月に設立され、出向社員十一名でスタート。出向社員の出身は、デンソー二名、アイシン精機二名、豊田工機一名、CBC一名、中電工事一名、東海銀行一名、刈谷商工会議所一名、弊社豊田自動織機二名。少人数なだけにネットワークが要求された。

豊田自動織機の従業員は約一万人。KATCHの従業員はその千分の一であり、当然ながら仕事の

幅は広がった。責任と権限は、いい意味で強く与えられた。配属は営業部で、営業企画を担当したが、実際には何でもやったというのが率直な感想である。

未体験ゾーンの仕事の連続だった。まずは、広告宣伝を担当し、企業や一般向けに社名とロゴ、ケーブルテレビとはどんなものを印象づける活動を行った。このとき上司から、営業のいろはとしてAIDMA作戦があり、広告宣伝はこれからの事業に大きなウエートを占めることを熱っぽく教えられ、今でも心に染み込んでいる。私はこの上司を尊敬しており、彼から学んだことは多いので、その代表的なことをまとめておく。

- ・物事に一貫した信念を持つ

- ・三識（意識、知識、胆識）を持つて事にあたる 「胆識」が特に重要

- ・人に頼らない働き方（自立型の労働）

- ・人のいいところを見つけて誉め、伸ばす（育成の方法）

広告宣伝では、行政の市民便りへの掲載、新聞チラシ、ラジオCM、セスナ機を使った宣伝、スーパーやデパートの広場へのマルチビジョンの設置、タクシーへのステッカー設置、この他にもいくつが展開した。効果がどの程度あったかはわからないが、日常の営業活動との相乗効果により、結果として開局時には予想を上回るお客様の注文を頂戴できた。

営業活動を展開する上で、営業部員だけでは物理的な限界があり、サポーターを必要とした。地元で知名度と影響力を持つ人物、かつ家計を握る奥さんの心を捉まえられる人物を考えてみた。答えは「主婦」となり、早速「キャッチレディ」を募集した。予想以上の応募があり、何人かと契約した。

この主婦パワーは期待どおりで、地域の人を次々に加入へと結びつけてくれた。

さらなる営業力強化が急務だった。そこで町の家電店の代理店化を推進した。当初は家電店より「地上波アンテナが売れなくなるし、アンテナの修理依頼も来なくなる」とか「パラボラアンテナが売れなくなる」などの反発もあつたが、理解活動をすすめ、最終的に電器商組合加盟の家電店すべてと代理店契約を締結できた。代理店に対する加入促進策として、奥様懇談会や販促キャンペーン（インセンティブ）などを展開し、お客様獲得に協力していただいた。

これら一連の取り組みを通じて学んだことは、次のとおりである。

- やればできる（できない、難しいと考えた瞬間に不可能になる）
- 組織をつくって仕事をすれば、アウトプットは大きくなる
- 仕事を楽しくするのも自分、つまらなくするのも自分

• お客様に喜んでももらえない仕事は、仕事ではない

この三年間の出向中には、豊田自動織機では知り合うことのできない方々と出会い、刺激を受け、世の中を違った視点からみることができた。自分の出向に関係した方、それを受け入れてくれた当時の上司、キャッチで共に汗を流した仲間に感謝したい。

〔グローバル編〕

外に出た。一九九八年十月から約二年間海外へ出張した。出張先は、ドイツのドレスデン。人口約

五十万人の都市で、ザクセン州（旧東独）の首都である。ドイツの奈良京都とも呼ばれ、エルベ川を中心に歴史的な建造物が建ち並ぶ美しい都市である。出張の目的は、「TDDK」というカーエアコン用コンプレッサーの生産会社の立ち上げで、担当は人事総務関係だった。

出張前は、ドイツ語はまったく知らなかったし、英語も苦手だった。「事務所（工場建設までの仮事務所）と電話だけは用意しておくから行って来い」と言われて、自分でもよく覚えていないが何故か引き受けてしまった。家族と別れ、単身赴任生活が始まった。

ドイツはヨーロッパの中心国であり、相手は外人だから下手な英語でも何とかなるだろうと思って町のレストランに入ったらひどい目にあつた。ここは旧東独で、町の人々のほとんどが英語を話せなかった。適当に注文して、出てくる食事を待つことにした。腹が減っていたので、肉系を注文したつもりだったが、出てきたのは山盛り野菜（サラダとは言えない）だった。どうやらベジタリアン料理を注文してしまったらしい。おいしかったのはコーラだけだった。

事務所の従業員は私一人だけで、あとは電話が一台あるのみ。人事総務とは名ばかりで、ほとんど何でも屋。ここで最も困つたのは電話の応対だった。ドイツ語でかかってくるので、話しの意味がわからない。その前に相手が誰なのかもわからない。随分失礼なことをしたと思う。

そこで、ドイツ語学校に通い始めた。先生はドイツ人で、ドイツ語でドイツ語を教えられ、悪戦苦闘の毎日だった。また先生は厳格なドイツ人の代表選手のような人で、私と仲良くなったエジプト人とボリビア人のクラスメイトは、お国柄もあるのだろうか宿題をよく忘れるものだから・・・気の毒だった。

それでも事務所の電話応対までは無理だったので、ドイツ語の話せる日本人か、日本語の話せるドイツ人を探すことにした。ドレスデンに住む日本人の推定人口は約五十人で、日本語の話せるドイツ人なんかほとんどいないから、該当者を探すのは至難の業かと思われた。しかし何とかなるものである。日本人二人を確保することができた。一人はドレスデンで翻訳業をしている日本人の紹介で、バイオリニストのご主人を持つ日本人女性（ピアノリスト）であった。もう一人は日本食レストラン（ドレスデンで一軒しかない日本食レストラン）でたまたま夫婦で食事をしているところを声をかけてみたら、奥様が引き受けてくれた。この方のご主人は、ドレスデンフィルハーモニーのチェリストで、奥様は日本人で東京芸大卒の地元音楽学校の助教授だった。ご主人と私は同じ年でよく気が合い、共に卓球が好きで週末にはよくラリーを楽しんだ。私は、クラシック音楽に少し関心があり、彼の所属するドレスデンフィルのコンサートにはよく通った。偶然にも私が初めてクラシック音楽にふれたのは、高校生の時に地元安城にドレスデンフィルが来たのがきっかけであり、何か運命的なものを感じた。

さて、前述の二人の女性には、随分助けられた。電話応対や郵便物の処理はもちろん、後程赴任してくる出向者や出張者のための生活マニュアル作成や通訳等いろいろ協力してもらった。わからないことはすべてこの二人の協力を得て乗り切ったといっても過言ではない。

数ヵ月後、ドレスデンにTDDKの社長が赴任され、事務所のOA化は一気に進みオフィスらしくなった。ドイツ人の採用も行い、徐々に従業員が増えた。待望の新工場が完成し、生産ラインも滞りなく設置された。従業員の教育も順調で、赴任から一年六ヵ月後には本格的な生産がスタートした。

この間いろいろなエピソードがあったが、枚挙にいとまがないので割愛させていただく。苦勞した分ラインオフの時の喜びはひとしおだった。

多くの人に支えられた二年間だったが、この経験を通じて感じたことをまとめておく。

- 忙しく、追い込まれたときほどいい知恵が出る
- ねらいや目的のはっきりしない仕事は、世界では通用しない
- 変化の激しい時代における日本の経営は強い

（日本人には特有のフレキシビリティがあり、ドイツ人は急激な変化に弱い）

〔最後に〕

外は広がった。自分の小ささと世界の大きさが骨身に染みた。しかし、このことをわかったことが自分にとつての大きな財産である。外の空気は速く、冷たく、厳しかったが、自分次第で風向きは変わってくる。今思えば、一瞬のそよ風を感じたいために励んできたような気がする。

最後に弊社社祖豊田佐吉翁の言葉で締めくくりたい。

障子を開けてみよ　外は広いぞ

産政塾を終えて思うこと



デンソー労働組合

高橋 正典

〔プロフィール〕

- たかはし まさのり (32歳)
- 1969年12月 名古屋市生まれ
 - 1992年4月 日本電装㈱入社
(現在㈱デンソー)
福岡支店配属
 - 1999年8月 トヨタ部へ異動
 - 2000年9月 デンソー労働組合執行委員
現在に至る
- ＜家族＞ 独身
- ＜趣味＞ ゴルフ、お酒

△はじめに▽

私たちは21世紀最初の産政塾の塾生として集い、約半年の間ともに活動をしてきた訳ですが、今回の産政塾に参加してくれと言われた時は、組合の執行委員として四ヶ月がたった所で、まだ組合の活動が右も左も分からず四苦八苦しているのに、更にもうひとつ『仕事』が増えるのか・・・と仕事のひとつと捉えていて、消極的な気持ちで応募をさせて頂いた様に記憶している。

ところが、第一回目の会合に参加してみると、この産政塾には流通・電力・ガス・銀行・更には幼稚園の保母さんといった様々な業種から集まってきた個性豊かなツワモノがそろっており、単に異業種の人と話ができるぐらいの軽い気持ちで参加しに来ていた私としては、このメンバーの中で埋もれないよう積極的に、多くのものを吸収しないともったいないという気持ちに切り替わって、二回目からは、本当に楽しく参加させて頂いた。

しかしながら、今振り返ってみると、様々なジャンルの講師から、我々サラリーマンが感じることはない、新鮮な価値観や貴重な体験談を折角、講演頂いているのに、毎回、必ず講演中に居眠りをしてしまい講師の方には申し訳ないことをしてしまったと今となって後悔している。

（次に参加される産政塾の方は、私のように居眠りしないよう真剣に参加して下さい。）

△21世紀を迎えて▽

二〇〇一年は、21世紀最初の年なのにアメリカの同時多発テロもあり、相変わらず平和な世の中に

なっておらず、世界のどこかで戦時下の国があるといった状況である。また日本も物価の下落と不況の悪循環、いわゆるデフレスパイラルに陥っていて、経済はどん底で景気はいつこうに上向く気配もなく、失業率が過去最悪の数字を記録するなど、企業の倒産やリストラといった雇用不安を感じながら生活をしている。

また不良債権の処理も遅々として進まず金融不安の中、低金利で銀行に預けていてもほとんど利息がつかないのに、二〇〇二年四月からのペイオフ解禁により自分の預けている預金の心配もしなければいけない。

将来に目を移しても、製造業においては中国の台頭など、日本は生産の空洞化になるのではといった不安を抱えており、また年金や健康保険財政の悪化から負担は増え続ける一方で、自分達がお世話になる頃には、恩恵を受けられるのかといった不安もある。

いずれにしても将来どころか、数ヶ月先でさえ見えない時代になっていて、しかも聞こえてくる話は益々暗くなるばかりである。

私が子供の頃、21世紀になれば、『ドラえもん』みたいなロボットが出てきて、タイムマシンやどこでもドアみたいなアイテムや、宇宙旅行も日常的といった夢のような世界になっているのではないかと、またそうなって欲しいと漠然と思っていたような気がする。

もちろん21世紀は一〇〇年あるわけだから、まだまだこの先どうなるか分からないのはあるが21世紀という響きからなのか、二〇〇一年には劇的に世の中が変化するのではと子供心に期待もしていた。現実には目を移すと、ある部分道具は飛躍的に進化しており、今原稿を自宅で作成しているが、まさ

かこれほどパソコンが普及して、自分でも所有し、更にパソコンがないと仕事ができない時代になっているとは、私が入社した時は全く予想すらしていなかった。

もつとすごいのが、携帯電話の普及であり、私が営業のとき、この携帯電話を販売していたのだが、確か九四年の自由化でそれまでのレンタル電話から売り切りの電話に変わったとき、加入権（今ではなくなったが）と機器を合わせると十数万円もしていた。しかも基本料金が月々一万円もしたため、販売していても、こんなのもつのは商売で必要なく一部の人しかいないと思っていたものが、あっという間に広がって、これは最近、甥っ子に聞いた話であるが、小学生でも友達とコミュニケーションを取るために必要な時代になっているそうである。

この話を聞いて私は、非常にショックを覚えた。なぜ小学生で携帯電話が必要なのか？しかも親が安全のために持たせたというなら、なんとなく分かるような気がするが（それでも未だ独身の私からすると過保護のように思うが）友達とのコミュニケーションに何故、携帯電話が必要なのか理解できなかった。当然私の中では、小学生ぐらいの交友関係であれば、同じ小学校に通っていて、毎日顔を合わすわけだし、しかも学区があつて家が近所なのだから、必要であれば会いに行けばいいと思うのだが。

これらの疑問を親である姉にたずねてみると、最初は姉と共用で使用していたのだが、女の子からのメールが頻繁に入るため、親でもその内容をチェックすると子供に申し訳ないから、持たせたということらしい。

確かに私も仕事やプライベートでメールを頻繁に使用しており、メールは相手の都合を考える必要

もなく、また気軽に他愛もないことが情報伝達できるツールとして重宝している。しかしながら、デンソー労働組合でもメールによる情報のまる投げが会社内で横行しているのではないかと、いつて昨年会社でメールの罪悪について問題を提言してきた。コミュニケーションの基本は『face or face』であり、そのサポートとしてメールを使うならおおいに活用してもらって結構であるが、子供の頃はその罪悪も分からず、ただ相手の反応を気にしないでいいからなどと安易に使用していると将来、会話でのコミュニケーションがとれずに、会社で隣の席に座っているのに、その人にメールを打つだけでコミュニケーションをとろうとする人間ばかりになってしまわないか、非常に心配である。

△産政塾を終えて▽

『自分の殻をやぶる』をテーマに産政塾はスタートしたわけであるが、産政塾を終えた今、正直いって、自分の殻をやぶれたという自信はない。そもそも、殻が何なのかも正直いってよく理解できていない。ただ知らず知らずのうちに、人生の中で身につけてしまった、自分の価値観であるとか固定概念みたいなものが殻だとは思っているのであるが、それすらも本人のポリシーであれば、どれが正しくて、また間違っているというのもおかしなものだと思う。

そもそも産政塾で出会った人の話で変わる価値観であるのなら、それも人生の中のひとつの過程であり、また変わらない確固たるものが、すでにできているのなら、それはそれでいいのではないかとも思う。

こんなことを書くと産政塾のテーマを無視しているようであるが、私が思うことは、いろいろな人

生を人は歩んできて、それぞれの文化、価値観をそれぞれの人が持っているわけであるからそれを否定するのではなく、尊重できる人間でありたいと思う。

特に今回の産政塾に参加して一番印象に残っているのは、第二回の清水茜さんのユニバーサルデザイン講演であった。大学生であり、しかも身体が不自由な中で、しっかりとユーモアのある講演をされ、障害をもつ方の考えや目線を教えてもらったのは、新しいものの見方を身につける上で非常に勉強になった。

へやぐうくくく

自分の殻がなんなのかも分からず、しかも講演中、居眠りばかりしていたためか、結果としてあまり変わっていない私であるが、事務局の安井さんと参加した塾生の方は魅力的な人ばかりで、本当に出会えてよかったと思う。

私の好きな言葉に『一期一会』というのがあるが、人生の中での様々な出会いを大切にしたいと考えている。産政塾を通して、あらためて人と人とのふれあいの大切さを感じることができ、貴重な体験ができたことを感謝したい。

最後に第八回の産政塾が開催されることを、楽しみにしながら連絡を待っています。

「そうだ！チーズを探しに行こう！」



トヨタ自動車労働組合

武田 純 康

〔プロフィール〕

たけだ すみやす (34歳)

- 1967年 豊田市生まれ
- 1991年 トヨタ自動車株式会社入社
- 2000年 労働組合専従 現在に至る

＜家族＞ 妻

＜趣味＞ 車、單車、アウトドア

お 約 束

提出期限・・・二〇〇一年十月三十一日（水） 中部産政研必着

何度この文章を読み返しただろう？

締め切り間近な最後の土日。今日手を付けねば何時できる？ こう言い聞かせて机に向かう。

さて、何を書こう？ とりあえず過去の産政塾誌を手に取り・・・

皆様のこんな風景が目に見えびます（つて私だけ？）

序 文

さて、この書き出しをしたのには訳があります。

産政塾のテーマは「殻の外へ踏み出そう」です。「殻」の解釈は幾とおりもありそうですが、

その一つに「既成概念」があるとしたら、過去の事例を手にとつて参考にしてもいけないのでは・

・ そうです。敢えて塾誌を閉じることにしました。

問題提起

皆さんは「チーズはどこへ消えた？」という本を読まれたでしょうか？

「殻の外へ踏み出そう」を考えていたら、ふと思ひ出し、再度読み返していました。

物語の内容は単純です。

二匹のネズミと二人の小人がチーズを求めて迷路の中を探しまわります。

ある日二匹と二人はチーズのある場所を発見し、日参することとなります。

しかし、ある朝チーズがなくなっています。

二匹は毎日何か変化していないかチェックしていたので、チーズが減少していることに気付いており、躊躇せず新しいチーズを求めて出かけます。

二人はそこにチーズがあるものと慢心していたので、チーズが消えたことが信じられません。

何日も同じ場所に日参するのですが、やはりチーズはありません。

一人はチーズのあった場所に固執し、行動を起こそうとしません。

もう一人は居心地の良かったなじみのテリトリーに後ろ髪を引かれつつ、漸く行動を起こす決心をします。

その結果、紆余曲折はあったものの、大量のチーズがある場所を発見します。

そこには二匹のネズミもいました。かなり前からこの場所を発見していたようです。

物語はこんな感じですが、場面場面に格言めいたことが記載されています。

いくつかを書き出すと、

◇つねにチーズの匂いをかいでみることにそうすれば古くなったのに気が付く

◇新しい方向に進めば新しいチーズがみつかる

◇まだ新しいチーズがみつかっていなくても、そのチーズを楽しんでいる自分を想像すればそれが実現する

◇古いチーズに早く見切りをつければ、それだけ早く新しいチーズがみつかる

◇新しいチーズをみつけることができ、それを楽しむことができるかわかれれば、人は進路を変える

「チーズ」とは私たちが人生で求めるもの、つまり仕事・家族・財産・健康・精神的安定等の象徴で、「迷路」とはチーズを追いかける場所、つまり会社・地域社会・家庭等の象徴だそうです。

考えさせられます。

ある場所に長居をすると、はじめの緊張感がなくなっていく、居場所ができ、安住したくなります。安泰・慢心・居心地・・・麻薬のようなものなのでしょうか？当たり前前の状態になってしまうことが危険という意味では。

今回、産政塾に参加させて頂くにあたり、申込書には「自社の常識が他社の非常識と聞いたことがある」「他社のメンバーとの交流により自身の価値観の幅を広げたい」と書きました。（私を指名してくれた上司から「指名されたから仕方なくとか書くなよ」と釘をさされたことは秘密です）

「殻の外へ踏み出そう」との言葉に触発され書いた言葉ですが、産政塾に参加させて頂き、自分の世界を広げるチャンスは確実に増えたものと感謝しております。講師の方・塾長はもとより、塾生の皆様・事務局の安井さんも自分の世界を持っている一角の人物であり、皆様からも得るものが多かった半年でした。

回想

思い返してみれば、今までの自分の世界から外の世界を垣間見ることになったことがいくつあった

だろう？

中学校に入る時、今までの自分の世界（豊田市）を離れ、外の世界（名古屋市）に行った。大学に入る時、今までの自分の世界（愛知県）を離れ、外の世界（東京都）に行った。

就職する時、今までの自分の世界（学生）を離れ、外の世界（社会人）に行った。

それぞれの場面で視野は広くなったんだらうか？

書いていて（打っていて？）思い出した。

昔から乗り物と機械が好きで、小さい頃はネジが付いているものを全てバラバラに分解するのが楽しく、何であれ分解していた。自転車に乗るようになったら、パーツの交換が楽しい。ハンドルに始まり、ホイールまでも交換して乗っていた。次に単車に乗るようになったら、さすがに分解するのが心配。横浜の單車屋に入り浸り、店長・店員の分解を見て、手伝って、徐々に覚えていく。その單車屋は暴○族・ロー○ング族からベースの軍人、はては寄港した英語もたどたどしい外人まで、普通に学生をしているのでは出会えないようなお客が沢山来店して来た。毎日が新鮮で、毎日横浜に通った。限定解除の免許も持っていないのに排気量の大きい單車を買って、あとで免許を取りに行った。（今は大型自動二輪の免許が教習所でとれるが、当時は試験場でないと取れない免許で貴重だった）

試験場で免許が取れることを知っていたので、車の免許も試験場で取った。おかげで免許取得費用は、原付・中免・限定解除・自動車の全て合わせても二〜三万円程度しかかかっていない。就職して車を買った。小学生の頃、好きだった車。今でもまだ持っている。ショップにも見てもらうが、自分で触れる所は自分で触る。寮にいた頃は、仕事から帰って、短い睡眠時間を削ってジェットセッティ

ングをしていた。今でも頻度こそ減ったが、時間を見つけ、クリスマスツリーのグリーン点灯から短時間の遊びに傾注している。

何のことか分からない？わかった人は住所・氏名・年齢・職業と番組の感想を書いて、中部産政研事務局まで・・・送っても何も貰えません。悪しからず。

少なくとも乗り物という趣味の「チーズ」にかけては日々「迷路」の中で新しいものを見つけに走り回っている自分に気付く。

学生時代に出会った友人・先輩・後輩もそうか？

小さい時はブルースリー・空手バカ一代・あしたのジョーが好きだった。要は格闘技、それも殴って蹴っての格闘技が好きだった。それが昂じて大学生の時は格闘技のサークルに入って楽しんでた。新人生で初めてサークルの練習に参加した時に肋骨が折れた。暫くして先輩の指を脱臼させた。親指はあんな方向に曲がってしまうことを確認した。鼻骨を骨折した先輩もいる。合宿で救急車を呼んだ話は伝説となっている。空手・ボクシング・テコンドー・截拳道・跆拳道・中国拳法・柔道・剣道・・・色々な経験者がいた。今、彼等は検事・会計士・ベンチャー社長・不動産業等自営からメーカー社員・公務員・新聞社社員・損保会社社員・先生等様々な世界で活躍している。そうだ、華僑の先輩もいる。東京でホテル等の経営をしているのだから相当のものであろう。この先輩とは仲がよく、よく一緒に遊んでいた。色々な世界の人も合わせてくれた。様々な国の人はもとより日本人でもめったなことではお話できないような業界の人。何ページにも渡る名刺の持ち主に合わせてくれたこともあった。

友人・先輩・後輩には恵まれていた。こちらが望んでいる訳でもないのに、どんどん世界を広げて行ってくれた。この面での「チーズ」では「迷路」の中に居るだけで、色々な「チーズ」を彼等が与えてくれたことに気付く。

これら、「チーズ」を探す・或いは「チーズ」を与えられる「迷路」の中で、所謂普通の学生・サラリーマンをしては出会うことのない色々な人々と出会ってきたことにも気付かされる。

自問自答

最近はどうだろう？と言うより仕事という「チーズ」ではどうだろう？

忙しさ（と睡眠時間を削る気力・体力の低下）・家での居心地の良さに感じて、会社・・・じゃなかった・・・労働組合と家の往復の毎日になっていないか？自分の行動範囲が広がっていないのではないか？少し自身に危機感を醸成させなければならないのではないか？

もう社会人としても中堅と呼ばれる層に入ってきた。特に今は労働組合の執行委員の業務に従事させて頂いている。自分だけの価値観で物事を推し進めてばかりはいられない。この会社の中だけでも様々な価値観があることを痛感させられた。いわんや社外をば！

自己暗示をかけている訳ではないが、新しい世界へ飛び込み、結果視野を広げるということにかまけているのではないか？

どうすれば良い？

久しぶりに学生時代の友人・先輩・後輩に会って、触発されてこようか？彼等も社会人として中堅

どころ。学生時代と違い、社会人としての経験値もプラスされ、当時の彼等でなく、より世界の広がった彼等となっているのではないか？

まず行動を起こしてみよう。強権発動して皆を集合させようか・・・

(こんな行動では、何も変化していない自分を露呈することになってしまいか？)

他にはできないか？

そうだ。産政塾で出会った面々がいてくれる。尊敬すべき彼等の話を拝聴し、社会人として「迷路」の大きさを再確認させて貰おう。

跋文

先般の閉塾式。「閉塾」とは寂しい言葉。「終わり」ではなく、「始まり」にすべく、勝手に「中締め式」だった事にしよう。同じ年代の彼等、同じ世代である彼等、これから同時代を過ごす彼等と一緒に、様々な「チーズ」を探しに大きな「迷路」を走り回ろう！

『自分探しの旅』



松坂屋労働組合

竹 中 隆 志

〔プロフィール〕

たけなか たかし (29歳)

- 1972年 岐阜県生まれ
- 1995年 (株)松坂屋入社
名古屋駅店和洋酒・缶詰売場に配属
その後、ハンドバッグ・化粧品売場
に異動
- 1998年 松坂屋労働組合名古屋駅支部書記次
長 (専従)
- 2000年 松坂屋労働組合中央執行委員(専従)
現在に至る

<家 族> 独身

<モットー> 明るく・厳しく・前向きに

<趣 味> 映画・音楽鑑賞、歩くこと

この一年間、産政塾に参加し、卒業論文を書く時期になった。「何を書こうか？」と悩み考えながら、ふと「自分はどんな人間なのか？」と改めて自問自答してみた。

『寂しがり屋』、『好き嫌いがハッキリしている』、『涙もろい』、『めんどくさがり屋』、『大雑把』、『でも凝り性』、『好奇心旺盛』、『でも飽きっぽい』、『自然・旅が好き』……

そして自分を取り巻く知人・友人、同僚が思う自分の姿、等々

これらすべてが自分なのだと思う。あえて否定もしないし、無理に直そうとも思わない。約三十年生きてきて、今さら無理だと思うから。ただ否定しないものの、「周囲が思うような人間じゃないのに」と思うこともある。『自分が思う自分』と『周囲が思う自分（＝演じている自分）』という、そんなギャップを楽しんでいる自分がいるのも、また自分自身なんだと思う。特に無理したり、肩肘はろうとは思わないが、「どうせなら格好良く演じよう」なんて考えていたりする。

私は94年夏、友人と二人でイギリス・ドイツへ約一ヶ月間の卒業旅行へ行った。二人ともこれだけの期間の旅行、しかも海外旅行することは初めてであった。そしてその旅は豪華な旅であるはずがなく、いわゆるバックパッカーの旅で、事前に準備したのは往復の航空チケット（しかも往路は南回り空路）と、『地球の歩き方』、『トーマス・クック鉄道時刻表』、そしてアルバイトで貯めた僅かな小遣いだけであった。この旅行を計画したのは、「学生時代にしかできないことを、とりあえず経

験しよう」という、ごく短絡的な発想からであった。

まず訪れたのはイギリス。イギリスは私が希望した国だった。その理由は、イギリス北部のいわゆる湖水地方を訪れてみたいということと、イギリスをぐるっと一周してみたいという思いがあった。空路ロンドンに着き、まずは中部地方のヨークへ鉄道で移動する予定であったが、いきなり鉄道ストライキに巻き込まれ、持参した鉄道時刻表が役立たずになった。片言の英語で何とかヨーク行きの列車を探し、無事初日を終えた。翌日はヨークからエジンバラへ移動したが、エジンバラはフェスティバル開催中でホテルが満室。「いきなり野宿か?」と思ったが、夏休み中のエジンバラ大学の学生寮（しかも安い）に泊まることになった。数日後、いよいよ湖水地方のウインダムニアを訪れた。ここは「ピーターラビットの故郷」と言われるだけあり、牧草地と湖が一面に広がっていた。あまりの自然の豊かさに、心から感動した。自然を満喫したくなり、普通の人は歩かないらしいが約二時間（バスに乗れば二十分で移動できる距離）湖水地方を歩き続けた。そこではバスに乗っては見ることもできない湖の美しさや、牛や羊の鳴き声、自然の香りなどを満喫することができた。普段ビルだらけの都会で、機械・電子音の喧騒に囲まれた生活から、絵本の中の世界に飛び込んだ感じがした。「こんな場所ですら暮らせたらいいな」と正直感じた。その後は「ロビンフッド発祥の地」ノッティンガム、そしてロンドンに滞在し、ドーバー海峡をフェリーで渡り、ベルギーを経由してドイツ・ベルリンを訪れた。

当時のベルリンは、すでにベルリンの壁が崩壊してから数年経過していたこともあり、パッと見る限りでは、東西に分断されていた事など想像できない街並みであったが、旧東ベルリンの街中を歩き

路地裏を覗き込むと、荒廃した雰囲気が漂っており、当時の暗い歴史を垣間見たような気がした。数日後、ベルリンからミュンヘンへ夜行列車（旧東ドイツ製のボロ列車）で移動したが、途中深夜に無表情な態度で二回も検札で起こされ、不機嫌顔でミュンヘンに降り立った。この街は旧西ドイツの主要都市であり賑やかなイメージを抱いていたが、旧東欧各国からの移民・難民が多数流入していたのか、ドイツ人気質でもある実直さと混ざり合って、何となく殺伐とした雰囲気だった。その後郊外のダッハウ・ユダヤ人強制収容所を訪れた。収容施設、ガス室、そしてこの場で殺されたユダヤ人の子供たちの笑顔の写真。そしてそこには客観的にそれらを見ている自分がいた。ヨーロッパでの出来事だから客観的でいられたのか、中国・韓国で同様のものを見たら主観的に見ることができたのか。戦後生まれの「戦争を知らない世代」だから客観的に見ることができたのか。これは今でも分からないが、日本人として、忘れてはいけないう過去があることを、再認識する良い機会になった。

その後ドイツ最大の目的地であるフュッセンへ向かった。有名なノイシュヴァンシュタイン城を訪れるためである。この城への行き方として、普通は街の中心地からバスもしくは馬車で行くらしいが、宿の親父の「せっかくだから山道を歩いて行け。そんなに時間はかからないぞ」という言葉を信じて歩き始めた。しかし約一時間山道を歩く羽目になった。しかも途中には『熊に注意！』という標示や朽ち果て、真下にぶら下がった役立たずの『This Way』の矢印。最初は「親父に騙された」と思ったが、山中の透き通る湖や冷たい湧き水、写真にはない角度から見る城等、普通に旅をしていれば見ることがなかった光景を見て体感でき、自由気ままな旅の良さを満喫した。その後は同じロマンティック街道沿いにあるローテンブルグという中世時代そのままの趣を残す街を訪れ、フランクフル

トを最後に旅行を終えた。この旅行で歩いた総距離は約四〇〇キロメートル。いろいろな場所へ寄り道したり、時には遠回りもしたが、多くの貴重な体験をしたとともに、「やろうと思えば、道は開ける」ということを体感できたように思った。

翌95年秋、入社後初めての長期連休を利用して、一人でスペイン・ポルトガルへ十日間旅した。この旅ももちろん貧乏旅である。さらに日本国内でも一人旅などしたことがないが、前年の経験もあり「何とかなるさ」と旅立った。

最初の訪問国スペインは、太陽と笑顔・笑い声の溢れる、そして原色でできた自然に包まれた土地だった。「いろんな場所をこの目で見て、この手で触れ、この足で踏みしめたい」という衝動に駆られ、スペイン南部のアルヘirasという港町からジブラルタル海峡を渡り、アフリカ大陸モロッコに日帰り旅行へ出掛けた。往復のチケットを購入し、出入国審査も無事終わり、「なんて簡単なんだ」と思い、アラビア語の街を歩き回り、帰りの船に乗船しようとした時、「お前は乗れない」と係員に遮られた。復路のチケットを搭乗券に切り換えていなかったからだ。言葉も分からず、地図もない、しかもアフリカ大陸でこんな目に遭うとは。日本に帰れなかったら、会社クビかな。」と途方に暮れていたところ、偶然同じ境遇の日本人に出会った。しかもその人はスペインに語学留学しており、その夜の宿泊場所はもちろん、翌日一緒にスペインに戻り、行く予定であったグラナダまで車で送っていただくことになった。太陽と海面が輝く海岸沿いから赤土の荒野が広がる山脈地帯を走る、直線距離にして約二〇〇キロのドライブだった。その方には感謝感謝であるが、もしも昨日普通にス

ペインへ戻っていたら味わえなかったうれしいハプニングであり、昨日途方に暮れていたことも忘れ、自由気ままな旅の良さを味わい、「人生何とかなる！」と勝手に思っていた。その後グラナダ、マドリードを経て、ポルトガルへ移動した。

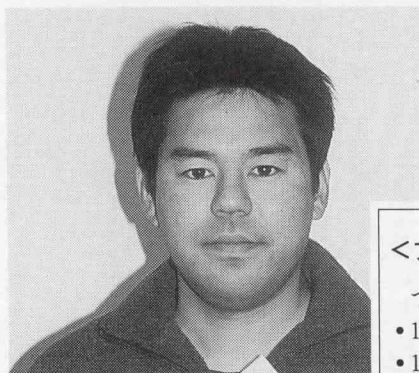
ポルトガル訪問の目的はユーラシア大陸最西端のロカ岬を訪れることだった。この岬には、『ここに地果て、海始まる』と刻まれた石碑が建っていた。海からの激しい風に吹かれながら岬に立ち、目の前には遠くアメリカ大陸まで続く大西洋を眺め、自然の偉大さ・雄大さを感じながら、「ここまで来た」という達成感とともに、「ここから何かが始まるんだ」という希望に満ちている自分がいたのを覚えている。

この他にも楽しかった旅の経験はあるが、これらの出会いや体験・経験を経て今の自分が形成され存在するのだと思う。そして一つの旅を終える度に、一步（もしかしたら半歩）成長できた気がする。また旅の途中では「一人でも何とかなるさ」と思っていたが、振り返ると一人じゃなかった。それは人であったり、自然であったり、常に何かに支えられていた。旅を通して様々なものを見て、触れて、感じ考える機会を得ることができたこと、多くの人に出会えたことは、大きな宝だと思う。

これは人生でも同様で、様々な人に出会い、様々な経験・体験をする。その中から様々なことを学び・感じ・選択をし、また一歩前進する。だから急がなくても、寄り道や回り道、立ち止まって休憩しながらのんびり自分の旅を続けていこうと思う。もしかしたら大きな『宝』が転がっているかもしれないし、そしてこれこそが『自分探しの旅』なのだから。

すばらしきスポーツとすばらしき人との出会い！

～これまでの人生を振り返って～



アイシン労働組合

鶴 見 実 男

<プロフィール>

つるみ じつお (34歳)

- 1967年11月 刈谷市生まれ
- 1990年4月 アイシン精機(株)入社
新豊工場配属
- 1998年9月 労働組合専従 現在に至る

<家族> ひとみ (wife)

子供2001年12月出産予定 (son ?)

<趣味> サッカー

一、はじめに

第12期産政塾が終了してしまった。これまで産政塾の安井さんや塾生の皆さんと共に、楽しく勉強する時間を経っていたが、つ・つ・ついに過去に参加された諸先輩方からも聞いていた、とても、とても私には苦手な論文の時間がきてしまったのである。

しかもテーマは自由。自己選択・自己責任の時代にあって仕方がないのか！と自ら言い聞かせ、テーマをどうしよう？、なにを書けばいいのだろうか？、考えているうちに既に期限が過ぎている。どうしよう？。そんなある日、ふむー！と考えると、ふとしたことかと思いついた「いろいろな出会いに通じての自分自身の成長」について、これまでの人生を振り返ることにしよう！と決めたのである。頭にハチマキ、腕まくり、さあ、頑張って書くぞ！

二、「サッカー」との出会い

私の人生を振り返るにあたり、これは必ず書かなければならないだろう！なぜなら、私の人生34年において、サッカー生活は青春を掛けた時代・ストレス解消のためにプレイした時代（現在も細々ながら継続）を含め、なんと27年間かわりあい、これまでのライフスタイルの中心的存在になっているからである。

そんな私の人生を掛けた「サッカー」との出会いは七歳の頃である。私は幼少の頃、とても人見知

りをし、友達と遊ぶより一人で遊ぶことが大好きであった。そんな私を見るに見かねた両親は兄が通う「刈谷サッカースクール」の練習に連れて行き、私に興味を持たせたのである。なぜ、私が「サッカー」に興味を持ったのか私自身、はつきりとは覚えていないが、多分「お兄ちゃんがやっているから・・・」という単純な理由だけではないかと思う。その他といえば、私の生まれ育った「刈谷市」はサッカーの盛んな町であり、自然に出会う環境でもあったのではないかと思う。そんな環境の中、私はサッカーの魅力にどっぷりとつかり、私の人間形成に影響していったのである。

三、サッカーを通じた友人との出会い（成長期・小学校編）

私の通った「刈谷サッカースクール」は小学校一年生から六年生までの、刈谷市内にある学校の生徒の集まりである。そしてサッカーは十一人で行うスポーツであり、チームのみんなとコミュニケーションをとらなければならないのである。そのような環境は当然のごとく私の心を開き、特に同じ小学校に通う友達は練習後の帰宅方向が同じであるため、一緒に家路につき、その途中でよく団子屋さんやスポーツ用品店、サッカーの先生の家でワールドカップのビデオを見るなど寄り道をした。そんな友達と良い行いからいたずらまでいろいろなことを通じ、私は自然にコミュニケーションを図るようになり、「友達と遊ぶことのおもしろさ」を覚え、友人との付き合い方などいろいろな面で人間形成に影響したのである。

四、サッカーを通じた友人との出会い（高度成長期・中学校編）

サッカーに熱中した青春時代に私は自分の能力を大きく引き伸ばす（自分で勝手に思っているだけであるが・・・）ある人物と出会った。（もともと小学校からの友達ではあるが！）その人物はサッカーをすれば日本代表候補選手に選ばれ、中距離、長距離を走れば校内は勿論、市内でもいつも一番さらに勉強ではいつも学年トップクラスという私にとって神童的な存在であったN君である。

私は彼と一緒にサッカーの練習をし、中距離、長距離の走り方などから勉強の仕方までいろいろなことを遊びを通じて教えてもらった。その教え方は私にとって受け入れやすく、今まで好きなスポーツは勿論のこと、大嫌いであった勉強までも大変楽しくなったのである。その結果、私の家族や私自身もびつくりするほど能力が伸びた（自己満足であるが・・・）のである。

サッカーではチーム成績で大会に出場すれば優勝あるいは三位以内をいつも確保し、私個人では愛知県の選抜合宿に選ばれるほどになり、ある高校から特待生として声がかかるほどになった。そして、世間ではたいしたことはないと思うが私の中で特にびつくりしたのは、正直言って決して良くなかった勉強の成績がみるみるうちに上昇し、子供ながら達成感を味わい、またさらなる目標に向かって頑張るといった良い方向でのスパイラルアップをしていったのである。その影響は大学進学から就職まで恩恵を授かることになった。

五、そして現在

サッカーを通じて人間形成された私は現在、私生活では心やさしい奥さんやもうすぐ生まれてくるかわいい子供（二〇〇一年十二月出産予定）にも恵まれ、とても、とても幸せ（ちよつと照れるな！）を感じている。会社生活では、今まで工場のある一部門から労働組合に配属され、会社の考え方や政策制度、一般常識などいろいろな面で視野を大きく広げ、そして、人間的に尊敬し、知識豊富な三役や諸先輩、後輩。また、いつも笑顔で迎えてくれる書記の皆さん、いろいろな遊びや相談までのつてくれる同期との出会いが、これからの人生に大きく影響し、私がさらに成長するきっかけとなるだろうと感じている。私はこの出会いのきっかけ作り、つまり労働組合へ出向を進めていただいた先輩や職場の上司を含め、労働組合の職場の皆さんに感謝したい。

六、最後に

これまでの人生を振り返り、すばらしきスポーツ「サッカー」やすばらしき人との出会いがあったからこそ、十分とはいえないかも知れないが、今の自分の成長があり大変感謝している。そして、新たな出会いの場を作っていたいただいた産政研の安井さんをはじめ、産政塾の皆さんに感謝したいと思う。最後に上部団体の会長さんの挨拶にも出てくる私の好きな言葉で、この論文をしめたいと思う。それでは皆さん「ともにがんばりましょう！」

人生、約半分を生きて



東邦ガス(株)
北部支社都市エネルギー課
寺 西 知 雄

<プロフィール>

てらにし ともお (38歳)

- 1963年 名古屋市生まれ
- 1982年 東邦ガス入社
- 1999年より2年間、東邦ガス労働組合専従
- 2001年7月より現職場

<家族> 妻、長男 9歳、次男 7歳、父母、

<趣味> サイクリング、登山

最近はもっぱら低山ハイク

「参加」は突然に・・・

それは、突然でありました。ある日のうらかな午後、「産政塾」への参加を突然言われたのです。「産政塾」の存在は、昨年2年後輩が参加したので知ってはいますが、本来なら順番に参加者は「若くなる」はずです。それに、募集概要には、「28歳～35歳程度」と記載があり、自分の37歳という年齢（あえて当時としておきます）は、その範囲に入るのか？と少々疑問に悩みつつ、生来のお祭り好きな性格が、何か期待するものを感じ、正直に「はい」と答えてしまいました。

しかし、改めて昨年の資料を見つつ、不思議な団体だな～と感じずにはいられませんでした。「殻の外へ踏み出そう」、「犯罪以外は何でもあり」など、どう見ても「塾」ではない。不安と期待と楽しみという入り混じった中で、第1回目となりました。

第1回目の産政塾に参加して、参加者のその幅の広さに驚きました。独身・新婚・子持ち、茶髪もいれば主婦もいる。自己紹介を聞くとさらに面白い。フフフなんだか楽しそうだ。自己紹介では、「おじさん」の風貌を突っ込まれる前に早めに嘘偽りない年齢を伝えておきました。ほら、やっぱり、最年長だったでしょう。

自己紹介も終わり、グループでの今後の進め方になりました。我班はBグループ。何をしよう、どうしようと考えているうちに時間がたち、テーマは内田さんの「ユニバーサルデザイン」の方向でいくことになりました。そりゃそうだ。事前調査がちゃんとしてあるし（新聞の記事まで持参でした）、

なかなか面白いテーマだから・・・問題は、役割分担。ほら、やっぱり、リーダーになっちゃったでしょう。

第1回目のテーマ「ユニバーサルデザイン」について

我々Bグループは、当初、優柔不断もあって、7月ごろの開催でした（いつやりますとの拳手が遅かったのです）。しかし、武田さんが「ユニバーサルデザイン」についてインターネットで早めに調べていただいたことであおられて、事前調査は割と早くできました（というか、企画案（素案）を1月末までに提出ときつくきつく言われていたので・・・）。

おおむね内容が固まった頃、事務局の安井さんから、「他のグループの進捗が遅く、このままでは第1回のテーマは昨年と同じにならざるを得ない」との連絡があり、急遽、我々のテーマが第1回目として3月に開催することになりました。「殻の外へ踏み出そう」とのテーマで集まったのだから、昨年と同じテーマはできるだけしたくないと安井さんや僕自身はこだわりを持っていたし、何しろ頼まれるといやとはいえないものですから・・・。

結果的には、テーマにしてもタイミングにしても良かったのかなと思います。内容は、同じグループの芳賀さんによる寄稿が、産政研フォーラム50号に掲載されています。そちらのほうがめちゃ面白いので、詳細は割愛します。自分自身が感じたことは、大まかには「ユニバーサルデザイン」は、人が持つ年齢や体力、障害などの特徴を超えた「気配り」であって、ものの作り、人との交流で生活して

いく我々には、「気を配る」ことを考えさせるテーマだったと思います。講師にお願いした清水さんは慶応大学の学生ということで、春休み中の開催も良かったのだと思います。

以降の産政塾

以降の企画も前年とは全く違ったものになりました。それでも、これから我々が身近に考えていかなければならない福祉や環境、仕事に影響されるエンターテイメントなど必要なキーワードは押さえたいかなと思います。すべてに出席と言いたいところですが、残念ながら、第5回の「21世紀における自然との共生」の林さんの講演には参加できませんでした。みなさんのお話では、とてもよかったとのことなので、それが唯一の悔いがあります。しかし、自画自賛をすれば、第1回が今までにない新たな企画ということで、周りの皆さんをおおることができたかな、と思っています。フフフ。

「産政塾」での体験で、仕事にしても生活にしても大きく変わることとはなかなかないと思います。自分自身も今年で38歳になりました。入社20年、人生約半分であります。これからの数年は、おおむね、会社生活の折り返し点であり、人生の折り返し点でもあります。そう言った点でも、今回の「産政塾」への参加は、刺激的なものでありました。そこで聞いたことや出会ったことは何らかの形で影響されるだろうし、個人的にはいい人たちとのつながりは、また続けていきたいと思っています。ということで、「産政塾」第12期生の「同窓会幹事」も、「年長者」と言うことで喜んで引き受けることになりました。

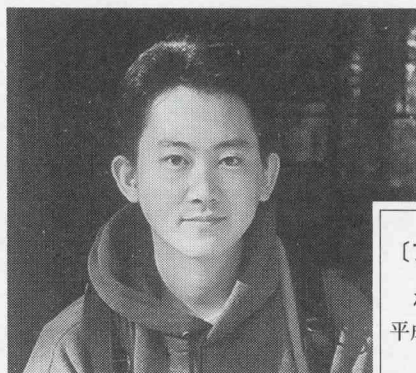
番外編 山登りについて

「産政塾」は、「殻を破る」―自分たちが何か新しいものを感じることがテーマでした。僕自身は、若い皆さんにあおられて、新たな体力作りに目覚め、今年は夏に7年ぶりに北アルプス（針ノ木・鹿島槍・五龍）を縦走しました。7年前は南アルプス・赤石岳に登り下山中、半月板を損傷。泣く泣く下山した後、3000mの登山からは遠ざかっていました。

今回の山は、15年程前から、3回チャレンジして体力不足や天候などにより頂上までいけなかった自分自身の「未踏峰」です。4月頃（ほら、丁度、大府健康プラザで体力測定を行った頃）から体力作りに努め、体力万全で出発。気の早い台風の余波で天候が変わりやすい状態でしたが、予定通りのコースを歩くことができました。途中は北アルプスらしく高山植物も多く見ることができました、何より梯子・鎖の連続で、高度感のある山で達成感のある山登りでした。前後して、子供たちと海上の森（万博会場予定地）、拇池自然公園、猿投山、養老山など、今年は多くの山に登りました。「産政塾」が全てではありませんが、きっかけのひとつとなつて、また、山に登りたいハートを目覚めさせられました。

最後に、産政研の方々、参加者の皆さん、ありがとうございました。そして、今後とも、よろしくお願ひします。

最近感じること～決意



株式会社 UFJ 銀行

中 里 浩 一

〔プロフィール〕

なかざと こういち (32歳)	
平成4年	東海銀行入行中山支店に配属 その後、水道橋支店、京橋支店 勤務後、
平成11年3月	本店営業部に配属。現在、UFJ 銀行名古屋法人営業第5部に 所属。
＜趣 味＞	ドライブ、読書、音楽鑑賞他
＜家族構成＞	妻と子供2人

一、おひめ

作文を書くなんて一体何年ぶりなのだろう。長い文章といえ、大学の論述や卒論で書いた記憶がある。入社してからは、新入直後に今後の抱負を書いたり、研修の前に、自己PRを書いたりした。しかし、今回のように自由に書く作文は、中学生（もしかしたら小学生）以来かもしれない。そんな状況で、いきなり長文を書かなくてはいけなくなってしまった。きっと文章力は、全くないに違いない。何かとても大きな仕事のような気がしてなかなか手がつかなかったが、もう書かなくては・・・切羽詰まってきた。しかし、いい機会でもあるし、もうこうなったら筆の進むまま、指が動くまま、書いてゆこうと思う。

二、うしろ少しへんよ

私もいつの間にか、三十二才になってしまった。世間から見れば、立派にオジサンの仲間入りをしているのだろう。しかし、精神面ではオジサンどころか子供のままだと自分では思う。肉体的に腹のサイズは成長しているが、精神的には、成長しているとは思えない。

年を追うごとに、年月が流れるスピードが加速しているように感じる。特に最近是一年など本当にあっという間だ。小学生の頃は、一ヵ月ですら長く感じた思い出があるのだが、どうしてなのだろう。そんな風に感じているこの頃、変わったことがある。それは、ふと「このまま死んでいくのかな

あ」と思うようになったことだ。少なくとも、十年前、入社した頃は、全く感じなかった。老後の生活まで考えている訳ではないが、就職し、結婚、父親になった今、人生がこのまま終わっていいのかと思う様になった。

人生の時間は、限られている。もちろん、今は仕事があり、仕事に打ち込むのは当然であり、とても良いことだと思う。ただし、退職した後のことも前もって考えておかないと、いざ退職した後、さあ次は何をしようかと考えても、次の何かをすぐに見つけるのは難しいだろう。退職後の自分は、決して若くない。新しく何かをやるうとしても体力的に制約があり、選択可能な範囲が狭まっている上、仲間を見つけるのにも苦勞するだろう。

まずい。何か手を打たなければ……。今は、毎日忙しいだけの生活。仕事以外の活動は本当に限られている。今はいいけど後々のことも考えなくてはいいかん。気づいて良かった。おつ、少しは成長したのかもしれない!?

では、何しようか。あらためて考える。

人生の時間は限られているからといっても、寝ない訳にはいかない。どちらかといえば長く寝る（寝起きが悪い）方だ。当然、残りの人生の時間―睡眠時間―仕事の時間Ⅱ？の時間が、自分で自由に使える時間となる。その自由に使える時間は、生き生きと過ごそう。休日特に何もしないで、家でだらだらしたり、買い物に付き合ったりしがちだが、その時の方が、時間はあつという間なのに、疲れがとれない。きつと、身体は休めているのだが、これといってなものもしないと充実感がなく、気分転換ができず、疲れが残っている感覚だけ残ってしまうのだと思う。

休日だけは、自由なのだから、自分で考えなくては。休日すら考えることができれば、毎日が休日である退職後のことなんかとても考えることはできないだろう。まず、何でもいい、次の休日に何をするかを、前もって考える癖をつけよう。

三、産政塾を通して

産政塾に入る前の自分と今の自分は明らかに違う。産政塾に参加する前、ちょうど一年前頃は、毎日忙しくて、忙しさに流されるだけでなんとなく生きていた。仕事以外は、これといって何をすることもなく過ごしていた。

そんな毎日、半ば成行きで、産政塾に入塾することが決定した。産政塾については、全く知らなかった。前回、前々回の参加者に聞いてはみたが、異業種間の交流の場だとのこと。あまりよく分からず、自分自身のイメージとしては、毎回集まって、あるテーマについて、ボソボソと意見交換でもするのかと思っていた。それでも、外に出て行くのは、嫌いじゃないので、少しは興味があつた。また、私は、東京出身なので、この地区に仕事以外の知り合いはいないし、異業種間の知り合いなんてほとんどいない私にとっては、知り合いをつくる絶好のチャンスだと思った。

開塾式に参加して、塾生の皆さんがとても個性的で、楽しい方々ばかりだったので、とてもよい印象だったのを思い出す。

今期参加した企画を少し思い出してみると、

第一回 ユニバーサルデザイン

（私の属するチームの企画だったが、ほとんど企画には、関わりませんでした。ごめんなさい。）

清水茜さんの言葉は、忘れられない。「バリアフリーというのは差別だ。最初から、誰にでも使えることを前提にしないで」。あの講義は、自分自身にとって、ものすごいインパクトがあった。障害者の立場から、環境や、製品についての意見を聞いたのは初めてだったし、今まで考えもしなかったことが、数多く挙げられた。この分野については、自分の認識が不足していることを思い知らされた。

第二回 あいち健康の森

最近は恐ろしくてできなかった体力測定を強制的にさせられた。自分よりも体力的に優れている年上の方々を目の当たりにして、体力回復しなければと痛感した。講義の中で、健康のために、身体にとって非効率なことを進んで実行しましょうという言葉が印象に残った。これをきっかけとして、緩んだ腹部を元に戻すような心がけるようになった。唯一悔いが残るのは、運動をした後、施設内の風呂に入れなかったこと。

第三回 ユニバーサルスタジオジャパン（USJ）

△二〇〇二年一月十五日東海銀行は三和銀行と合併し、UFJ銀行になりました。―宣伝でした。宜しく願います。▽

本当に行けるとは思わなかった。書くまでのことではない。行くまでの苦勞（社内的な後ろめたさ）とは裏腹に、正直言って、とても楽しかった。最近では、常に子供二人を連れて出かけているので、久しぶりに身軽に楽しめた。

以降のスナメリ、リトルワールド、閉塾式の一、二次会。行きたかったのだが、業務上どうしても時間がとれなかった。ほんとうに残念。

それでも、閉塾式の三次会には参加でき、塾生以外には言えない共通の秘密(?)を持ってしまった。翌朝は、十年ぶりに、テニスラケットを振り、今度、オートテニスにでも行ってみようかなんて気にすらなってしまうた。

△おまけ▽閉塾式解散の後、数名で猿投温泉に行った。(クルマ数台で道に迷いつつ・・・)この後、温泉入浴の快感が癖になってしまい、毎週スーパー銭湯に行くようになった。おかげで、毎週、腹部の観察ができるようになり、食事量に気遣うようになり、体調がよくなった。大きな収穫。

以上、産政塾は、貴重な体験をさせてくれ、自己革新のきっかけとなったことは間違いない。産政塾を経験していなければ、もちろんこの作文は生まれなかった。

自分のカラを破れた!?

四、これから・・・決意

休日なにをするかを考える前に、一体自分はどうなりたいかを考えてみたい。

自分のイヤなところ。周囲に流されやすい。感情的になりやすい。(冷静さが足りない)

自分は、周囲に流されやすい。周囲に流され易いのは、自分の意見がないからだ。自分の意見を持つには、どうすればいいか。それには、よく知り、理解する必要がある、よく調べることが不可欠。

よく理解していれば、冷静に対応できるようになり、感情的になることも少なくなるはず。よって、①わからないことは、決して、うやむやにしない様にしよう。また、②先入観を持たず、何事にも興味を持つ様にしよう。何事にも興味を持つという点は、実は息子から学んだ。なんで？なの？を連発され、時には答えに困ることもあるが、この精神が大事なのだと感じた。（初めて自分の分身から学んでしまった。）なんで？は大切にしよう。息子偉い！これからは、まじめに答えてやらねば・・・。

同時に③臆せず人と接しようと思う。他人に聞くチャンスがあるときや、聞けば早いことも、この歳になると、あれこれ考えてしまい、遠慮がちになってしまう。これも悪い癖だ。聞けることは、聞いてしまおう。

以上の①から③までを実行していくには、実践する時間も必要だ。一回手にしたことを、後でやろうと後回しにする悪い癖もあった。それは、明らかに無駄な時間のはず。その場ですぐに実行し時間を大切にしよう。

時間的に余裕を持つことによつて、焦りや、うっかりがなくなる。よつて、④時間を大切にし、できる限り効率的、計画的な行動を心がけよう。

また、⑤やりたいと思ったことは、すぐやっていこうと思う。最近、アメリカのテロ事件ではないが、なにが起きてもおかしくない世の中。明日は我が身。いざ死ぬときに後悔しないように、興味があつたらすぐにやっていこうと思う。

以上五点を念頭におき、自分の意見をしっかり持ち、何事にも冷静になれることを目標にし、色々

な経験をしていこうと思う。また、引き続き、毎週のスーパー銭湯（サウナ）通いにより、健康維持（腹は出ない様に）していきたい。

時間を捻出できれば、物事に色々とこだわりをもつことができ、楽しみが増え、毎日生き生きと生活ができるだろう。

私が子供だったころ、親父が私に対して使っていた口調や行動を、今の私はそのまま真似していることに気づいた。自分が子供であった頃の親父の印象は強く残っている。その時々場面がフラッシュバックすることが多々ある。子供のことを考えると、生き生きとした自分をみて育って欲しい。生き生きと生活すること——是非実行していこう。休日にな何をするか。現時点では、具体的な答えはないが、一日一日を大切に、色々なことを経験していこうと思う。

もちろん、家族は大切にしていきたい。

本当に気の向くまま、作文にしてみました。やや、まとまりがないが、自分を見直す良い機会になった。これが、今思っていること。数年後、これを読み返し、再度振り返りたい。

五、最後に

安井さんをはじめ、産政塾のスタッフの皆様、それから、同期の塾生の皆様、貴重な体験を有り難うございました。これからも宜しくお願いします。

健康の大切さ



中部電力労働組合
本部執行委員（専従）

中 村 明 史

<プロフィール>

なかむら あきちか（36歳）

- 1965年 10月15日 愛知県豊橋市生まれ
- 1983年 中部電力株式会社入社
（豊橋営業所、豊川営業所、岡崎地方本部、豊橋営業所）
- 2000年 中電労組本部執行委員（専従）現在に至る

<家族> 妻

<趣味> 妻との会話、お酒、映画鑑賞

一 はじめに

一月からスタートした産政塾も半年を終えて今期の課程を終了した。

これまでも当組合から塾生の卒業生がいたこともあり、卒業生からは「色々な人と、色々な所へ行つて、色々な話しをしながら酒が飲めるのが産政塾だよ。」と聞かされて参加したため、プレッシャーのようなものはまったくなく、仕事から一日解放される会合であるという気持ちで臨んだ。

しかし、開塾式は、自己を見つめ直す場として「殻の外に踏み出そう」というテーマを言われ「いったい何をしていくのか」戸惑いがあった。

本来、私は学校や塾と言われる場所は苦手なほうであつたが、同世代の人たちで、「何でもあり」のテーマで自ら何かを得るといふ精神で私にとつての産政塾はスタートした。

そこで、これまでの自分の生い立ち、性格、経験などによつて、自分なりの殻というものが三十六歳にもなるとかなり硬く、厚いものになっているのではないかと反省するところがある。しかし、一方では自分らしさでもあり、様々な体験や人とのつながりの中でできあがつたものであるから「殻の外に踏み出そう」ということは大変なことである。

産政塾は、異業種の方との意見交換やふれあいといった人間関係を通じて、自己研鑽をしていくという目的があり、私のテーマ「健康」と人間関係について、今一度これまでの自分を振りかえつてみたい。

二 学生時代

中学は、毎日がクラブ活動中心の生活であったという記憶しかない。

小学校ではソフトボールをやっていたため、中学校に入学したら「絶対野球部に入って、将来は野球選手になりたい。」と真剣に思っていた。あの時代、多くの子供たちが夢に見ていたように私も同じだった。問題は多くの子供たちが同じ夢を持っていることである。

部員は一年生で一〇〇名が入部し、総勢約一五〇名となり、当然のごとく一年生はランニングと玉拾いという我慢の連続であった。当時は、一つも楽しいとは思わなかったが、今振り返ってみれば「人間関係・体力・精神力」というものがクラブ活動を通じて学ぶことができたのではないかと考える。そして、「野球選手になりたい」という夢をあきらめることにもなってしまったが、毎日八kmのランニングは自分の体を強くし、健康というものが得られた。

さて、高校生になってからは、野球をやめてテニスをはじめた。決して色気づいたわけでもなかったが、野球以外のものがやりたかった。ただ、中学校のような野球部とは少し違っており、練習も二年生になると、毎日行かなくなり、結果として退部してしまう状況になった。実は、友人が一人ひとりと辞めてしまう。どうも担当の先生とのトラブルが原因らしいが、同級生がみんな辞めてしまう状況までになってしまったため、私も自然の流れで退部した。

その後は、仲間四人で、中国語の文化部に入部し、練習場は友人宅を転々とするありさまである。人間関係を大切にした私の体は運動を突然しなくなると、体力は徐々に衰えていったが、自覚はな

かった。

三 社会人ゝ現在

社会人という新しい人間関係の中に入ると、またスポーツをはじめることとなった。

会社のクラブ活動は、「バレーボール」、夏は「ウィンドサーフィン」、冬は「スキー」

二十二歳からは「ゴルフ」と余暇時間はスポーツ漬けの日々であった。同じ職場で一つ先輩の方から声をかけていただいたことがはじまり、また別の先輩が声をかけてくれて仲間に入れてもらう。人間関係とスポーツは、私にとって密接に関係していることがわかった。

その後、現在の奥さんと付き合うようになると、スポーツをする時間が削減されていくようになり、三十歳前後からは、「夜のつきあい」としての人間関係ができるようになると、スポーツという言葉から段々と遠ざかっていくようになった。

それは、会社での毎年の健康診断の際に提出する問診書に「定期的にやっている運動はどれくらいですか」「余暇時間は何をしていますか」という問いかけに対して「運動ゼロ」「余暇は、酒を飲むかテレビ、映画鑑賞」といった回答しかできず、今の余暇時間における人間関係は「飲み仲間」しかないといっても言い過ぎではない状況である。

四 産政塾第三回「三十代からの健康づくり〜自身の健康をかえりみて」

これまでの自分を振り返って判明したことは、私にとって「健康」とか「スポーツ」を始めるきっかけや辞めてしまうきっかけが「人任せ」になっていたことを反省しなければならない。あの野球選手を夢見ていた時の自分を早く取り戻さなければいけないが、あの時のように我武者羅に運動をする必要はないし、定期的にゆったりとペースで持続してやることが大切であると感じた。

このフォーラムでの自己診断チェックでは、「血圧150から98」「体重85kg体力五十歳代」という結果であった。私にはこうした素質を持ち備えていることは自分自身が十分理解しているからさらに始末が悪いことである。

実は、私の父は四十八歳の時に脳梗塞で倒れて以来、不自由な状態となり、五十九歳になった現在では寝たきりである。決して突然倒れたのではなく、高血圧、糖尿病の持病を持っていた。私の祖父も同じ持病を持っていたと、祖母から聞いたことがあり、私にとって、健康とは十分に気をつけすぎても足りないくらいなものである。しかし、三十六歳の今から改善してもまだ間に合うと思い、第一に体重を減らすことからスタートして、食事を制限するようにした。そして、まずは歩くことから始めよう。

五 高齢社会とはつらつ人生

今年元旦の新聞に、「八十三歳の熱血バレーばっちゃん」という記事を見たが、このばっちゃんは四十三歳からバレーボールを始めて、現役レシーバーである。週に二回は顔を出して、練習もきっちりやられている。最近では監督業に専念するため公式戦でコートに立つことはないようだが、親善試合には選手としてプレーを楽しむ。

練習が終わると、もう一つ楽しみがチームメンバーとの会食である。この時はおばちゃんの井戸端会議に花を咲かせるわけであり、娘や孫みたいな方との人間関係である。

私は、このばっちゃんを実にうらやましい人だと思ひ、自分も老いては見習いたい。健康のためと始めたスポーツも団体競技だと、メンバーがお互いをいたわり、それが力となる。個人スポーツだったら、ここまでは長く続かなかつたと感想を述べている。なんとも温かい気持ちにさせられた記事であつた。

二〇一五年には六十五歳以上の方が、日本の人口の25%を超えといわれており、世界に類を見ない、高齢社会を迎える。このような人口の高齢化は経済、社会、医療、年金、福祉等、様々な分野へ深刻な影響を及ぼすと考えており、国や専門機関では調査研究がされて、総合的な対策を講じていく必要がある。しかしながら、高齢社会というのは、マイナスなことではなく、長生きで、はつらつとした人生を送ることができれば喜ぶべきであり、それには個々人が自立して健康で生活できることが

重要である。

これからの高齢者が持つべきものは、①長い時間運動しても疲れない「粘り強さ」②しつかりとした足どりで歩くための「力強さ」③円滑な動作を行うための「柔軟さ」が必要とされている。これら体力保持・増進するために健康意識を高める啓発をした上で、運動を行うこと自身の楽しさを知ることが高齢者の生活の質の向上につながるといわれている。決して一人でやらずに仲間であれば、心より所もでき、さらに良いことになると思う。

しかし、このことは高齢者だけにあてはまることなく、三十代の私にもそっくりそのまま言えることであるという結論に達した。

最後に第十二期の産政塾の皆さんに感謝するとともに、中部産政研の安井さんに大変お世話になり、誠にありがとうございました。

以上

言葉を越えた愛もあるはず



トヨタ車体株式会社

芳 賀 章 弘

〔プロフィール〕

はが あきひろ (34歳)

所属 トヨタ車体人材開発部

経歴 1967年12月 愛知県岡崎市生まれ

1990年4月 トヨタ車体(株)入社

1990年11月 人事部配属

1996年9月 富士松工場工務部異動

2001年2月 いなべ工場人事異動

現在に至る

趣味 絵画・映画鑑賞、タップダンス

好きな言葉 思い立ったが吉日

「手のひらに澄んだ水をすくって お前の喉に流し込む そんな不器用で強くやさしいつながりは
ないものか……」

気が付けば三十三才になっていた。ちょうど三分の一世紀生きたことになる。私は未熟者であり、
なにぶん三十三才になるのは初めてなものだから、今年の目標とか希望とか立派なことは考えていな
い。よしんば考え出したとしても、優柔不断な性格なため、結論が出るまでに短く見積もっても一年
はかかるだろう。賢明な私は無駄なことはしないことにしている。しかし三分の一世紀とは決して短
くはない時間である。

世の中は新世紀ということ盛り上がっていて、やたら何にでも枕詞に「今世紀最初の……」をつけ
たがる。するとさしずめ我々は「今世紀最初の産政塾生」ということになる。「今世紀最初の産政塾
生」などと書く和一見とてもスゴイ人達の集まりであるかのような錯覚を与えることができるが、実
はそうではない。しかしスゴイんだかかわからないという点では、「宇野二世」とか「ポスト
川又」といった表現にも、決して引けを取らない。

ところで世紀を意味する「センチュリー」という英語は知っていても、千年紀を意味する「ミレニ
ウム」という言葉は、初めて耳にしたという人も多かったのではないだろうか。かく言う私もその一
人で、しかも目新しいカタカナを覚えると、すぐ使いたがる性分なものであるから、恥をかくこともしば
しばある。この言葉を覚えてたの時も、ステーキハウスで肉の焼き加減を尋ねられたものだから、
「ミレニウムでお願いします。」と注文してしまった。しかしそのときは店員が「かしこまりました。
」と答えたため、特段恥ずかしい思いをせずにすんだ。サービスの行き届いた店である。出てき

たステーキはミディアムレアの焼き具合であった。

私のみならず、横文字に弱い人は大勢いる。Y A H O O (ヤフー) をヤッホー、携帯電話の A U (エーユー) をアーウーなどと読み、中には「ナスダック」のことを茄子と北京ダックを使った中華料理だと勘違いしている人もいる。私の会社の O L などは「グランパスエイト」はグラランドでパスを八回することだと思ひ込んでいる人もいた。しかし私は心が広いため、いちいち注意したり、正しい知識を教えるようなお節介は決してしないことにしている。

ただ我々一般人が横文字を間違えている分には、笑い話で済まされるが、これが一国の総理ともなると話は違ってくる。ちなみに、M 前首相は I T 革命を「イット革命」と読んでいたらしい。これは笑い話では済まされない。そもそも世の男性はたいてい、政治に対して一家言を持っており、首相の政策や対応に対して「俺ならもっと上手くやれるのに……。」といった類の批判をよく口にする。同様にプロ野球選手のプレーに対しても、自分の運動神経を棚に挙げて、自分勝手な批評を繰り広げる傾向が強い。そういう点では首相やプロ野球選手というのは、損な職業である。つくづく首相やプロ野球選手にならなくて良かったと思っている。

思い起こせば世紀末の日本にもいろいろな出来事があった。景気浮揚策の一環として、二〇〇〇年を記念して二〇〇〇円札が発行されたものの、今ではすっかりレア物と化し、めったにお目にかれない。仮に手に入れたとしても、自販機で使えない紙幣なんて使い勝手が悪すぎる。いっそのこと不景気は続いているのだから今年も二〇〇一円札、来年は二〇〇二円札を発行するというのはどうだろうか。その内コレクターアイテムとなり、三〇〇〇年を迎える頃には二〇〇〇円札からすべてそろつ

ていれば、相当な価値になるはずである。まあその分普通に、一〇〇〇年もの間貯金していても相当な貯蓄額になると思うが…。

現在日本は、先の見えない平成不況の真っ只中で、デフレの悪循環が懸念されている。しかしデフレで物価が下がることは、我々庶民にとつては決して悪いことばかりではない。マクドナルドのハンバーガーが平日半額セールを行い、吉野家の牛丼も値を下げた。しかしこうした値下げも、慣れてくると有り難みが薄くなる。そもそも平日半額となると、半額で売っている日のほうが多いわけだから、休日買うのがバカバカしくなる。感覚的には「休日倍額」と言った方が正しいような気さえしてくるのは、ひょっとして私がセコすぎるのだろうか。ちなみに吉野家では、「つゆだく」以外に、「ねぎだく」という注文の仕方もあるらしいので、玉ねぎ好きの人は一度お試しあれ。

物が売れない不況下にあつても、爆発的に普及した物がある。言わずと知れた携帯電話である。情報通信テクノロジーの進歩には目覚しいものがあるが、中でもここまで携帯電話が小型化し、普及することを何人の人が予想していただろうか。おかげで多くの人が、いつ何時会社から呼び出されるかもしれない、という恐怖にさいなまれることとなつてしまった。仕事熱心な私としては、むしろこの状況を歓迎しており、何か突発の事態が発生した際には、たとえ真夜中に熟睡している時であっても携帯を鳴らして起こすよう、会社の者にはお願いしている。それがたとえ重要な会議中であつても、携帯を鳴らして起こすようをお願いしている。

不況下における携帯電話の普及は、図らずも、我々が消費行動に飽きてしまい、購入したい商品がもうないことを露呈してしまったのではないだろうか。もともと消費行動はそれ自体の楽しさもさる

ことながら、その先にある“誰かとつながる楽しさ”を求めている、という意見がある。例えば洋服を購入する場合、消費そのものの快楽のみならず、その先には、その服を誰に見せるのか、その服を着て誰と旅行に行くのかといった、“誰かとつながる”楽しさがあり、消費活動は商品の所有欲のみならず、大なり小なり、他者とのコミュニケーションを求めているのだと指摘している。もしそうだとすると携帯電話は、そんな他者とながりたいという欲求を、ダイレクトに満たしてくれる究極のアイテムとして、爆発的に受け入れられたと考えられる。

私には小学校にあがったばかりの姪がいるが、あまり物をねだったりはしない。少なくとも私にはねだつてこない。どの人ならおごってくれそうか、瞬時に判断しているとするならば、その眼力は只者ではないと言えよう。しかしそんな姪が、唯一私にもねだつてくる物がある。それがシールなのだ。自分も子供時代に、スーパーカーの消しゴムや野球カードなど、何の役にも立たない物をやたら集めたことがあったが、彼女等がシールをねだる事情は、どうもそれとは少々様子が違うのだ。

私たちが子供の頃は、集めることが楽しみであり、時には友達が持っていないものを自慢し、時には皆で同じ物を購入して遊んでいたが、今の子供は所有したり、集めることにはあまり興味がなくように見える。むしろ買ってもらったシールを友達にあげたり、交換することに楽しみを見出しているように思える。男の子の間でもポケモンやカードを交換する遊びがはやっているらしい。今の子供にとって、カードはコレクションの対象ではなく、トレーディングするものなのだろう。

現代の子供は、一人引きこもってテレビゲームばかりしている、というイメージを想像しがちだが、むしろ旧世代以上に、他者とのつながりを求めているのかもしれない。ただそれが旧世代には理解し

づらい形をとっているだけのだろう。カラオケルームでマイクを握っている者以外は携帯を持ち、メールのチェックに余念がないという光景は既にこの国の日常である。でもメル友とか言っても、しよせん文通のハイテク版じゃないか。ほの暗いカラオケルームで光る携帯のバックライトの明滅は蛍の光にも似ている。熱はないが温かみを感じさせてくれる…。たとえば隣に友達がいっても、いつも遠くの誰かとのつながりを確認している…。

日本の話題はともかく、世紀末の世界もまさに激動と呼ぶにふさわしいものだった。二十年前熱狂的なファンの凶弾に倒れた英国のミュージシャンは、その歌詞の中で「国境のない世界を想像してごらん…」と歌っていたが、ソ連邦が崩壊し、その支配下にあった多くの人々が、自由と権利を求めた結果、地上にはますます国境が増えてしまった。歌詞の通り、やはり彼は夢想家だったのかもしれない。

共産主義が崩壊する一方で、資本主義も飽和点に達してしまった感がある。犯罪の多発、環境問題、教育問題、失業者と自殺者の増加…。いずれも行き過ぎた競争社会が生み落としたゆがみのようにも思える。当たる光が強いほど、できる影は濃い。犠牲者は未来（子供）と自然だ。

しかし「平等」ではダメになり、「自由」でも行き詰まるとするならば、これからの社会は何を規範としていけばいいのだろうか。「自由」と「平等」だけでは欠けてしまうものを、何によって埋めることができるのだろうか。

周知の通り、フランスの国旗は赤、白、青のトリコロールカラーで構成されている。三つの色はフランス革命の三つのスローガン、自由、平等、博愛を表している。ちなみに床屋の前でくるくるまわ

るトリコロールカラーの看板は、赤は動脈、青は静脈、白は包帯を表し、かつて床屋が外科手術をしていた歴史を物語っているらしい。またドイツの著名な作家は、社会を精神・法・経済の三つの機能に分ける考えに立った上で、精神活動では自由を、法活動では平等を、経済活動では博愛を基本理念とすべきであると説いている。では自由、平等について、我々が規範とすべき理念は博愛なのだろうか。だとしたら博愛に基づく経済体制とは、どのようなものなのだろうか。

以前、私の愛読書である、週刊Pボーイ誌に地域通貨に対する取り組みが紹介されていた。地域通貨とは特定の地域内でのみ流通させる通貨で、国が発行する通貨とは換金できず、利子もつかない。その形式、目的も様々だが、ある地域ではこれをボランティアの仲立ちとして利用し、一定の成果を挙げているらしい。

例えば一人暮らしの老人が、電球の取替えを誰かに依頼する。するとその要求に応じ、誰かが取り替えてあげて、代償としてそれに見合う地域通貨を受け取る。地域通貨を受け取った側は、これを貯めていても意味がないので、別の誰かに頼みごとをする。利子がつかないため（マイナスの利子をつける仕組みもある）少量でも流通が促される点も注目しているが、特筆すべきは、地域通貨が人と人とのつながりを形成し、助け合いの仲立ちをし、地域の活性化に一役買っている点だ。

こんなところに博愛経済のヒントが隠されているのかもしれない。全ての通貨がこのような形に替わるとは思えないが、挨拶するのも照れくさいこの国で、こんな形で助け合いが芽生え始めているとしたら面白い。

ニューヨークの同時多発テロがトリガーとなった「今世紀最初の戦争」以後、ジョンレノンの歌詞

が幾度となくマスコミに取り上げられた。死してなお色褪せない彼のメッセージは、いつの時代も平和を願う気持ちには変わらないことを我々に教えてくれる。しかし今回のテロはそれだけでは癒しきれない、底知れぬ恐怖と漠然とした不安の胞子を、世界中の人々の心に撃ち込んでしまった。衝撃的な同時中継の映像は、まるで映画のようだったと比喻されるが、本当にハリウッド映画だったなら、ビルに突入する寸前にブルース・ウィリスがああ事態を救ってくれたはずなのだが…。

一方ヨーロッパではEU諸国が、経済的・政治的な国境を取り除こうという壮大な取り組みを進めている。行き着く先は経済のブロック化なのか、国境の希薄化なのか。遠からぬ将来その答えが出るのかも知れない。その時私は何歳になっているのだろうか。できることならば私がボケておらず、EU（イーユー）を「エーウー」と読んでいない事を願いたい。それと大好きな古い歌謡曲を、忘れず口ずさんでいられたら幸いである。

♪飛び上がってもいだ青いリングを　かわるがわるにかじり合う　そんな飾らない　だけど確かな
つながりは無いものか…。

大切なもの



フタバ産業株式会社

長谷部 知 英

〔プロフィール〕

はせべ ともひで (33歳)

1968年 3月30日 愛知県豊田市生まれ

1986年 4月 フタバ産業株式会社入社

第2製造部組立課配属

現在に至る

(家族) 妻、長男、二男の四人家族

(趣味) ゴルフ、車

【はじめに】

早く書かなければと思っただけで、とうとうこんなにも日が過ぎてしまった。

『明日書けばいい』『この仕事が付いたら書こう』こんな思いを繰返した結果が、このぎまである。あれだけ産政塾の先輩達に言われていたのに、今慌てて書いている自分が情けない次第である。トホホ・・・私は小さい頃から、作文を書くのが苦手だ。（今でも苦手で大嫌い・・・）とにかく文才無し私ですので、書けることを私なりに書きたいと思っています。

【家族】

大切なものというテーマのもとに、書き始めたいと思います。まず最初に家族の事について触れてみたいと思います。

妻と知り合ったきっかけは、今から遡ること約十年前になるだろうか。あるイベントで一緒に食事をしたのがきっかけで（飲み会？コンパ？）知り合いになりました。たまたま年齢も同じで話しが合い、その場で盛り上がった事を記憶しています。その後知り合ってから二年後に結婚して、その翌年に長男、またその翌年には次男に恵まれ現在に至っています。

その家族と生活を始めて長い年月が経過したが、今まで家族に対して何もしてあげてないような気がしている今日この頃です。『このままではいけない』『何かしてやらねば』と思う事は思うのだが、

なかなか行動に移せないのが現実であるのと同時に、いったい何をしてやったらいいのかわからない事も事実です。

私は普段、家の事は妻に任せっきりで仕事の事ばかり考えている。本当に妻には迷惑と苦勞を掛けていると思う。しかし妻は、私に余裕がないと思っているのか、嫌な顔もせずに私の事を優先的に考えていてくれる。(十年も一緒にいると・・・) 本当に妻には感謝の気持ちで一杯である。

しかし、そんな私でも大切にしている事が有ります。それは家族との会話や挨拶です。そのせいか、仕事が忙しくてなかなか会うことが無いこの私にも『パパ一緒に風呂入ろう』『一緒にゲームやろう』などと言い、寄って来てくれる。まさに仕事で疲れ果てた気持ちを解消してくれる一瞬である。本当に我が子はかわいい(超親バカ?)これから先の事を考えると不安な事はたくさん有るが、私の事を支えてくれる家族の事を最優先に考え、大切にしていきたいと思えます。

【両親】

次に大切にしなければと思っている自分の両親の事について書きたいと思います。私の両親は共働きで、父は大工職人(今はやっていない)母は看護婦(今も現役)をしており、幼い頃は父も母も仕事が多忙で、たまにしか一緒に遊ぶ事ができませんでした。

父は職人だったので、朝早くから夜遅くまで働き、しかも休日は不定期だった。母は看護婦という仕事柄夜勤が有り、父と同様に日曜日が必ず休みという訳では有りませんでした。たまにしか相手し

てもらえず、その時は大変不愉快な思いをしましたが、今考えれば兄や私の為に一生懸命働いていたんだと思います。自分が親になった今、その時の両親の気持ちが良い分かります。いろいろと迷惑をかけた事も有りましたが、見捨てる事なく育ててくれた両親には本当に感謝しています。

今は一緒に暮らしている訳ではないが、いつか何か自分で出来る精一杯のことで恩返ししたいと思うし、大切にしたいと思います。

【友 達】

友達といつてもいろんな友達がありますが、何でも話せる友達というのはそう何人もいないのではないだろうか。私はもうすぐ三十四歳になろうとしているが、私の何でも話せる友達というのは、少年時代から付き合いのある友達です。一緒に遊んでいた頃から懐かしい・・・

最近では会える機会も少なくなり少し寂しい気もするが、何故か久しぶりに会った時でもいろいろな事を若い時と同じ様に話す事ができるし、気持ちを分かり合う事ができる。お互いの事を分かり合うというのは簡単そうで難しい。しかし、それが出来てこそ本当の友達だと私は思っている。まさしくコミュニケーションの原点ではないだろうか？

いくつになっても友達という関係を崩すことなく、いつまでも若い頃と同じ様に付き合って行きたいと思うし、大切に行きたいと考えています。

【会社の仲間】

私は現在の会社に入社して、早いもので十五年が経過しようとしている。率直な気持ちを言うと、よく辞めないでここまで来れたと思っています。誰でも一度は有ると思いますが、入社二・三年目くらいに本当に辞めたいと思った事が有りました。

私が入社した当時はバブルの絶頂期だったこともあり、心が揺れ動きました。今考えると、辞めず頑張つて来て良かったと痛感していますし、ここまで来れたのは、会社の中で自分を支えてくれる上司であり、同僚であり、また部下のおかげではないかと思っています。

毎日顔を会わせる中で、人間関係というのは本当に大切なものだと思う。そう思うのは私だけでなく、みんなそう思っているのではないだろうか。へたをすれば、家族と会っている時間よりも会社の人と顔を会わせる時間のほうが長い様な気がする。これからまだ先の長い社会生活を送って行くに当たって、仲間との関係を大切にし、お互いに助け合いながら、難局を乗り越えて行けたらと思います。

【健康】

私は小さい頃本当に体の弱い子でした。小学生の頃はよく熱を出し学校を休む事がしばしば有り、食べ物も好き嫌が多く、よく母親に叱られていました。母親は看護婦をしていた事もあり、健康には人一倍気を使う人でした。今思えば、自分の子供達の健康に気を使うのは、当たり前だと自分が親になってみると気付くものですね。

そんな体の弱かった私ですが、中学生になった頃から体が強いとまでは言えないが、熱を出して学校を休んだりする事は無くなり、まあごく普通の体調を維持する様になりました。それ以降大きく体調を崩す事は無くなり、食べ物の好き嫌いもかなり少なくなりました。(今でも牛乳は大嫌い！)

今現在、『健康の為に何かしている事はありますか』と聞かれたら、気を付けている事は有りますが、正直言つて胸を張つて答えられるものは有りません。まだまだ若いという気持ちが強いついかな、健康的な事をしなければという気持ちが薄いのが現実です。これからというか今ぐらいの年齢から無理が利かなくなってくるだろうし、健康の為に何かこれだというものを見つけ、家族を含めて健康というものを大切に考えていかなければと思います。

【これからの人生】

これから先いつたいつたになつてしまふんだろう？家庭の事や会社の事など、いろいろな事を考えていると、きりが無くなつてしまふが現実的には考えざるを得ない。

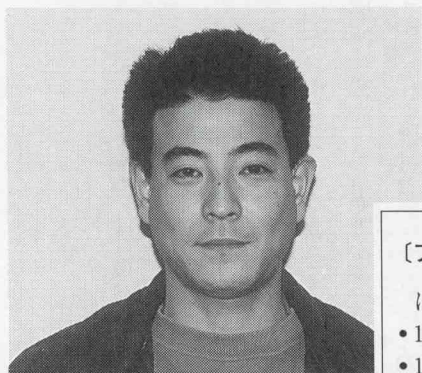
世の中暗いニュースが飛び交っているだけになおさらだ。しかし何があつても前向きに考えなければ事は進まない。人生を決めるのは自分であるし、自分で決めなければならぬ。とにかく自分を信じ、常に自分の役割を果たし、そして目標に向かって進むしかないのでは無いだろうか。根性！根性！

【最後に】

『大切なもの』をテーマに書かせていただきましたが、何せ文才の無い私ですから、自分でも何を書いているのかよく分からないままになってしまった事は勘弁して頂きたいと思います。

今回、産政塾に参加させて頂きいろんな人と会話をし、そして貴重な体験をさせて頂き見聞を深める事が出来ました。今回の貴重な体験を大切にし、今後の自分の活動に活かして行きたいと思います。最後に、お世話になった事務局の安井さん、第十二期生のみなさん、いろんな話を聞かせてくれた講師の方々、本当にありがとうございました。みなさんと再会出来る事を、楽しみにしています。

祭りと私



アラコ株式会社

羽根章人

〔プロフィール〕

はね ふみひと (34歳)

- 1967年 3 月 愛知県豊田市生まれ
- 1985年 4 月 荒川車体工業(株) (現アラコ(株))

家族 独身

趣味 パチンコ お酒 お祭り

△産政塾？▽

ある日突然上司が私の所へ来て、「羽根君、今度産政塾という集まりがあるから行ってくれないか。室長が一押しで羽根君を推薦しているから。」と言われ、パンフレットと申込書を渡された。

産政塾？「殻の外へ踏み出そう」？自分がそんな塾に参加してやって行けるのか、ある話を聞くまでは不安でいっぱいでした。第十一期産政塾に参加した中村君に会うことが出来、「実は僕、今度産政塾に参加しろと言われたのだけど、どんな事をする塾なの？」と聞くと（中村君）「自分達で自由に企画を組んで、いろんな場所へ行つて、講師から話を聞いて、いろいろな体験が出来て面白いですよ。」（自分）「へえーそうなんだ。」（中村君）「それに、羽根さんにぴったりなことが。」（自分）「フム？」（中村君）「その後に飲み会が毎回あるんですよ！」と中村君の話を聞いて、「なかなか面白い塾かも！」と、そんな安易な気持ちで第十二期産政塾に参加を決意した。

第一回産政塾開塾では、大勢の人前で話す機会がほとんど無い私は、自己紹介をするときに、緊張のあまり何を話していたのかもあまり覚えてなく、他の塾生の自己紹介もあまり覚えていなかった。その後の懇親会になり、アルコールが入り他の塾生たちと話しているうちに緊張も解れ、「産政塾が始まったんだ」と思ったこともついこの間のような気がする。回をおうごとに面白さが増してきた産政塾だが、もう研修も終わり、私の大好きなお祭りも終わってしまい、寂しさと、仕事の忙しさと、この産政塾誌のレポートが残ってしまった。私が今まで生きてきた中で、切つても切れない「拳母祭り」を題材に、このレポートを書こうと思います。

△ 挙母祭り V

私がこよなく愛する「挙母祭り」は、およそ三〇〇年ほど前から引き継がれてきた伝統ある祭りで、その昔、挙母のお殿様が、その年の豊作を祝い、庶民に山車（だし）を持たせ、町内を引き回し町を盛り上げ、五穀豊穡を祈願させ、挙母神社に奉納させたのが由来です。

昔の絵巻を見ると、その時代には、三台しか山車が描かれていないが、年代と共に人も増え豊になり、山車を持つていない町も山車を持つようになり、現在では上町三台（東町・本町・南町）下町五台（喜多町・中町・竹生町・神明町・西町）の計八台の山車があります。昔は八町すべての山車は、挙母神社周辺に山車蔵があつたが、台風や大雨になるたびに矢作川が決壊するため、東町・本町・南町の三町の氏子は、山車と共に高台の樹木町に移り住み、上町・下町に分かれたそうです。

祭りの初日は、各町の町内を引き回り、その後上町三町は、樹木町周辺を三台揃って回る三町引きと、下町五町は、豊田市駅前通り周辺を五台揃って回る五町引きが行われます。

夜になると、挙母神社に集まり、提灯を持った若い衆達が、各町のシンボルの提灯を中心に採み合いながら、神社の境内を七周回る「七度参り」という神事を行い、初日が終わります。

二日目の本祭りは、各町の山車蔵から出発し挙母神社の前に集まり、朝九時の花火が上がると、花車（その年、八町の先頭の山車で、毎年入れ替わる）を先頭に、鳥居を潜り神社の境内に引き込み、八台の山車を奉納します。

午後四時の花火上がり、花車から動き出し、神社の大銀杏の木（神社の御神木）を回る時や、曲

がり角で、各町色の違った紙吹雪を撒きながら挙母神社から引き出し、各町の山車蔵に帰り「挙母祭り」が終ります。

十五年ほど前までは、「挙母祭り」が十月の十八・十九日に行われていた為、祭りを見物に来る人も少なかったが、今では十月の第三土・日曜日に変わった事や、各町の色違った紙吹雪を撒きながら曲がり角を豪快に曲がって行く様や、山車の彫刻・飾りつけ・大幕など、昔の文化・芸術性のすばらしさを観に見物客も年々増え、「挙母祭り」も盛り上がり、祭りに携わっている私たちの気持ちが、楽しむ祭りから、見せるお祭りへと変化しています。

△祭りと私▽

私は、豊田に生まれてもう三十五年になる。物心付いたところから、毎年十月になると、心がわくわくし、血が騒ぐのである。

小学生時代は、「挙母祭り」の当日になると朝からそわそわしながら学校へ登校し、二時間目の授業が終ると急いで家へ帰り、ハッピーに着替え山車を引きに行っていました。

祭りに参加している子供達は、二時間目の授業まで受ければ下校出来たが、その他の子供達は、平常の授業を受けなくてはならない為、「かわいそうだなー」とも思わず、ただ自分が「学校が早く終わる、祭りが出来て、ウレシー！」などと、祭りが出来る喜びだけしか、頭の中に無かったのであろう。小学校低学年の頃は、綱の先頭を引くことが楽しみであったが、高学年になると、山車に近い綱元の方が、スリルがあり、山車を自分で動かしているような気分でした。

その頃から、山車の綱を引くだけでは物足りなくなり、「早く若い衆に入って、お囃子も覚え、山車の上山に乗りたい」と、強く思うようになり、その思いも中学二年の時に叶い、東町の若い衆に入る事ができました。

一年目の新参がやる事といえば、お茶くみはもちろんのこと、お囃子の練習まえに道具の準備と、後片付けに掃除など普段するはずも無い私だが、「祭りをやっているんだ」という気持ちがあり、苦にもならずこなし、もう一つ新参が最もやらなければならない事は、囃子を覚えることで、私は、横笛を吹くように言われました。

大鼓・小鼓・鼓・オオカワラなどの叩き物（打楽器）は、横笛にくらべ、撥や手で叩くと音が出るし、楽譜（テン テン ドン ドン スー テン テン の横に○・●が書いてある）もあるが、横笛は、音を出すのも難しく楽譜も無く、曲のメロディーを聴き先輩の指を見ながら覚えなければならなく、とても難しい楽器である。

お囃子の練習が始まり、最初に言われたことが「三曲完璧に、お囃子が出来なければ、山車に乗せないからな」と言われ、まずは音だしからと横笛を吹いてみると、以前トランペットを吹いていたせいか、音がそこそこ出たのである。後は曲を覚え、指の動かし方をマスターしようと必死に（学校でそれほど熱中して勉強をしたことは無い）練習し、一年目に、二十四曲（八町の中で一曲曲数が多い）ある中で、十曲くらい横笛が吹けるようになり、一層祭りを好きになっていきました。

若い衆に入り、私より年下の新参が数年入ってこなく、一番年下の私は、よく叱られながら色々な事を学んで来た。

お囃子の練習期間中には、私も少し笛が吹けるようになり、みんなに合わせて笛を吹いているつもりだが、曲が終るごとに「お前がこの所で、鼓の音を聞いてから次に入っていかんから、だんだん曲が速くなっていくんだ」と、先輩からよく注意され、曲ごとにテンポが異なり、曲の途中からテンポがだんだん速くなる曲や、大鼓・小鼓・鼓の音に合わせて、空ボセ（右手の中指で空打ちをし、タイミングを合わすこと）を入れなければ、曲が変わってしまうなど、こうして先輩から後輩に、後輩からその後輩へと、昔から人によって受け継がれてきた「挙母祭り」の文化と伝統の重さを痛感し、祭りに没頭しました。

毎年八月の暑い時期になると、山車の彫刻・柱・幕などを蔵から出し、虫干を行い、若い衆になって初めての虫干のときは、朝五時に山車蔵へ行き、蔵の中に入ると、八月の暑い時期にもかかわらずひんやりとして、「昔の土蔵作りのお蔵は、すごいなあ」と感心する間もなく、「この箱を運んでいけ、落とすなよ」と言われ、箱を前の家に運び中を見ると、雲の間から鋭い目つきでこちらを睨む、金箔で塗られた龍の彫り物でした。「そりゃー落としたら殴られるぞ」と、慎重に箱を運び終え、部屋の中を見ると、龍・獅子・火龍などの彫り物や、黒檀で作られた直径十五センチ程の、大屋根を支える九本柱が置いてあり、壁には、金糸などで麒麟が刺繍された霞幕や、一枚が六畳程ある布に、龍などの刺繍がされている本幕が掛けてあり、その素晴らしさに感動し、心の中で血が騒いでいました。彫り物や幕をしまおうと、箱に入れながら蓋の裏を見ると、昔の人の名前が書かれてあり、その中に私の大じいさんの名前も書いてあり、「大じいさんもお祭りが好きだったんだなあ」と、昔から今まで受け継がれてきた素晴らしい東町の山車と、お祭りを私も受け継ぎ、後世に残していかなければと、

感じました。

虫干が終るとすぐにお囃子の練習が始まり、お祭りの一週間前に山車組みを行ないます。若い衆に入り二・三年は、山車組みといっても何もわからず、渡された物を運んでいるうちに先輩達が組み立てているのを見て、「虫干の時に見たあの龍の彫り物を組付けてから、この柱を立てるんだ」と、少しずつ山車の部品や組付け手順を覚えて行きます。

山車が組み上がると、気分は祭り一色で、毎日そわそわして何も手に付かない状態です。

試楽の朝になると、山車の本幕・日よけ・霞幕など最後の飾りつけを行い、拳母神社本殿の中で御祓いを受け、いよいよ山車が動き出します。動いている山車の中である囃子は、練習の時とはくらべものにならないくらい良く、柱の軋む音と調和しているように聞こえ、山車のタイヤは、木の周りに鉄板が巻いてあり、道路の凸凹や、曲がる時の振動が直に伝わり、心地良く感じます。

若い衆に入り一年目の試楽でお囃子をしていた時、先輩に呼ばれ高欄へ上がって行くと、「もうすぐお前の家の前を通るから上山に乗っていいぞ」と言われ、動いている山車の上山に乗る事が出来ました。上山は、家の二階の屋根とほぼ同じ高さで、周りの景色がよく見渡せ、爽快な気分になります。東町は昔、拳母神社の前に山車蔵があり、神社を守る宮前の町で、試楽の午後から下町へ下り、旧東町の町内を引き回し、神社の近くに山車を留めます。

本楽の朝は、宮前である東町が神社入り口の東通りに山車を止め、花車を先頭に西通りから来る七町の山車を迎え、九時に花火が上がると、花車から順に紙吹雪を撒きながら豪快に境内へ引き込んで行くのを見て、東町の順番を待ちます。ある年には、ものすごい速さで曲がつて行く為、ドリフトし

て高欄が御神燈に当たり、大堤燈を落としながら引き込んで行く町もあり、自分たちも負けずと、紙吹雪を撒き、旗を振りながら威勢良く境内に引き込みます。

「拳母祭り」で最も盛り上がる時間になり、山車の上から下を見ると、ものすごい数の見物客の中、気分も頂点に達し引き出しが始まります。「オイサ・オイサ」と声を出し山車の上で騒ぎながら、大銀杏を回る時と、神社を出る時に、山車が見えなくなる程の黄色い紙吹雪を撒きながら曲がって行く、見物客から「おー」と言う歓声があり、神社から引き出しを終え山車蔵へ帰ります。

次の日には、騒ぎすぎで喉が潰れて声も出せず、山おろし（山車をばらしてお蔵にしまう）を行って「拳母祭り」が終わり、また次の年の祭りが来るまで抜け殻になった様に、日常生活を送ります。

若い衆に入り数年後、後輩が毎年入って来るようになり、私が今まで学んできた祭りでの礼儀作法・お囃子・山車に関する事や、上下関係の厳しさ等を教え込み、後輩達だけでしっかりと祭りをやって行けるように育ち、一九九九年の祭りを最後に、十九年間やってきた若い衆から、山車を動かす綱棍へ降り、また新たな事を学びこれからも「拳母祭り」に携わって行きます。

△最後に▽

第十二期塾生として、いろんな場所へ行き講師の方々から話を聞き、私にとって良い影響になり、産政塾に参加できたこと自体が、私の中で最も殻の外へ踏み出せたように思います。塾生の皆さん、安井さん、事務局の皆さん、ありがとうございました。何かの機会にお会いできる事を楽しみにしています。

無線に対しては パワフルになれる自分



アイシン精機株式会社

本田 隆 英

〔プロフィール〕

ほんだ たかひで (33歳)

- 1968年 4月2日 愛知県名古屋市生まれ
- 1991年 アイシン精機㈱入社
半田工場 原価課配属
- 1999年 人材開発部 (現人材・安全衛生部)
へ転属 現在に至る

＜家族＞ 妻、長女 (6歳) 二女 (4歳)
長男 (0歳)

＜趣味＞ アマチュア無線

◇承 前

同世代の仲間と共に楽しい時間を過ごした産政塾が終了してからずいぶんと長い月日が経ってしまったような気がする。最近朝晩の冷え込みも大変厳しくなり、なかなか布団の中から起き出せず会社で遅刻しそうになったことも何度かある。また先日などは我が家の三人の子供のもとにサンタクロースがプレゼントを運んできてくれたりもする、そんな季節である。あのうだるような暑さのなか開催された産政塾閉塾式を思い起こすと、季節の移ろいの速さに驚愕するばかりである。

なんて言って和んでいる場合じゃないですね。現在二〇〇一年十二月二十六日午後二時五十一分。産政塾事務局である安井さんからのEメールで二回・FAXで一回に及ぶ再三の塾誌原稿の請求に対して、心の中では「産政塾の皆さんに迷惑をかけてはいけません。早く原稿を書かなければ・・・」と思いつつ、元々筆（キーボード）不精の性格からか、結局FAXにて最後通牒された原稿締切日の前日である今日を迎えてしまった。

第十二期産政塾テーマ『殻の外へ踏み出そう』。どんなテーマにするべきか、何を書くべきか、頭の中の整理がつかないままだが、悩んでいてもしかたがないので思いつくまま書き綴っていくことにしたい。

◇入塾にあたって

『殻の外に踏み出そう』、産政塾のテーマである。二〇〇一年一月から八月までの全七回に渡って開催された産政塾だが、果たして自分は殻の外に踏み出せたのであろうか？そもそも自分にとって「殻」とは何であつたのであろうか？とりあえずこのあたりから考えていきたい。

ところで私の会社、組織変更・定期異動が毎年一月一日あり、昨日それにあわせた職場内のレイアウト変更&大掃除がありました。その際、机の引出しの中から業務上の書類にまぎれて産政塾への入塾申込書がひょっこり出てきたので読み返してみたところ、入塾動機として一年前の自分はこんなことを書いていた。

『十二月末に、この産政塾のOBでもある上司から、入塾してみてはどうかという打診があつた。上司に産政塾での内容を聞いてみたところ、「他社の同世代の方々と共に一つのテーマに沿って勉強していくものだ」ということだった。私は今年で入社十年目になるがこれまでの担当業務は予算管理、要員管理といったどちらかというと社内に視点を置いた業務であり、社外の方とはあまり接触がなかった。今回の入塾により社外の風を受け自らの視野を広げ、今後の業務をより充実したものにできればと考え応募した』

確かこの文章も入塾申込み締切日にあわてて書いたものののだが、思い起こしてみると「社外の風を受け自らの視野を広げ」というフレーズに、同年代の方々との利害関係のない業務外の場における交流を通じて自らの「殻」をぶち破ろうという意気込みを込めていたのだと思う。この当時の私にとって、「殻」＝不安・悩みの中で最も大きなウェイトを占めていたのは、「新年から初めて職場のチームリーダーとして部下を持つことになる。私にチーム内のメンバー全員の力を結集し職場全体を

まとめることが、上手くできるであろうか」「今までは、職場の一員として自分の仕事・業務にのみに集中していれば良かったが、人との付き合いが苦手な自分にチームリーダーとしての役割が果たせるであろうか」というものであった。

この問題は、産政塾により解決するものかどうかはわからなかったが、少なくともヒント・手がかりの一端がえられれば、という期待を抱いて参加を決めたのである。

◇産政塾について

そして産政塾。果たして私の「殻」を踏み越えられたのだろうか。

全七回に渡って開催された産政塾。そのそれぞれの会合の中で、これまで全く興味も関心もなかったことを見聞、実体験させていただいた。その中でも特に印象的だったのが、以下のお二人のお話を聞きにいった回である。お二人のお話される際に見せる、本当に生き生きとした顔は今でも忘れられない。

「ユニバーサルデザイン」。そんな言葉があること自体全く知らなかった私に、清水茜さんは、ユニバーサルデザインの理念、バリアフリーとの違いなど初歩中の初歩からわかりやすい説明で教えていただいた。最も印象に残っている話は、私たちの生活に密着した製品でもある「シャンプー」と「リンス」の見分け方、容器にギザギザがある方がシャンプーでこの識別法はシャンプー製造メーカー各社の統一規格になりつつある。清水茜さんのお話を聞いて以来、街を歩くとき、乗り物に乗る

とき、商品を見るときの視点がガラリと変わった。

「フォルクローレ」の木下尊惇さんのお話も大変感銘を受けた。自分が愛するフォルクローレを通して経験された、様々な人たち―父親、姉夫婦、一緒に演奏をしている仲間たち―との出会いを語られる姿に、高校卒業後単身ボリビアに乗り込んだというその行動力に、本物だけが持つ情熱・パワーを感じることができた。

◇趣味（アマチュア無線）について

では、自分が本当に生き生きとした顔をしている時はどんなときなのだろう。やはり趣味であるアマチュア無線に取り組んでいるときであろうか。

深夜二時、愛知県蒲郡市五井山山頂。車内に設置した無線機から繋がるヘッドフォンからのモールス信号を聞きつつ、電鍵を軽やかに操っている自分がいる。車の脇には、縦六m横六m、TVのアンテナを五倍くらいの大きさにしたアンテナが地上高十mの高さに設置されている。「おっと、ニューマルチ（未交信地域）の局だ。絶対に交信してやる。」と、深夜の山頂で独り言を大声で叫ぶのも問題なので、頭の中で叫んでいる。前日の早朝四時起きにもかかわらず眠気は全く気にならない、山頂から眺望できる蒲郡市の夜景を見にきた二十代前半と思われるカップルが私に対して放つ冷やかな視線も気にならない。無線機器一式持ち出し、アウトドアでのコンテスト（無線の競技会：交信局数×交信地域数の総得点で順位を決める）参加、これが私の最近のアマチュア無線運用スタイルである。

アマチュア無線ができればいい、コンテストは参加することに意義があると考えていたころは、自宅からの小規模な無線設備からの運用で満足できていただが、コンテストで優勝・上位入賞を目指し始めたときから徐々に運用スタイルを変化させていった。

無線で使用する周波数は色々あり電波の伝わり方も様々だが、私の好んで使用している周波数での電波の伝わりかたは基本的に見通し範囲内に届くというものである。当然、自宅がある平地の住宅密集地よりは三六〇度見晴らしの効く山の上の方が電波がよく飛ぶはずだ、ということでも無線機器一式を持ち出し山の上で運用を行う移動運用を始めた。屋外での無線運用をするには、自宅からの運用では全く意識もしていなかったいくつかの問題を解決しなければいけなかった。電源をどうするか、食事をどうするか、アンテナはどうやって設置するのか（強風によりアンテナが倒れたことも何度かあった）、無線設備トラブルへの対応、天候の変化への対応などなど。

また、より強力な電波を出すことが許可され、かつモールス符号での無線運用が許可される上級資格免許取得を目指し勉強しまくった時期もある。

更に、電波の出入り口であるアンテナをより効率よく働かせるための様々な改善（大型化、より高所への設置、アンテナと無線機との間のケーブルの変更）、交信状況管理を効率化するパソコン導入など「より多くの交信数、より遠くの交信地域」を目指し、できることは何でも試してみた。

おっと、ついつい熱くなってかなりマニアックなことまで書き始めてしまった。やはり自分の「興味」や「関心」がある事柄については筆の滑り（キーボード叩き）も快調になってしまふ。

◇「殻」について

アマチュア無線、中学生時代に始めたこの趣味に対しては常に「興味」「関心」を持ち続け、自分の持ちうる時間・労力・頭脳・金といった資源を惜しげもなくつぎ込み（お金に関しては、結婚後も妻にバレたら相当ヤバイ金額をつぎ込んでいる）、多くの「壁」を乗り越えてきたし、乗り越える行為自体が楽しみでもあった。

また「興味」「関心」を持ち続けることで、現状の自分に満足してしまい自分の狭い世界」「殻」に閉じこもってしまうのではなく、常に新たなことに挑戦し続けることができたのである。

一年前、産政塾入塾当時抱いていた不安は「チームリーダーとして職場全体をまとめることが、上手でできるであろうか」ということだった。それは、これまでの自分の業務にのみ「興味」「関心」を集中していて、職場全体の人々とのコミュニケーションへの「興味」「関心」が薄かった自分自身の行動パターンへの不安であったのであろう。

幸いなことにこの一年間は、産政塾を始めとして多くの研修に参加する機会を得、「社外の風を受け自らの視野を広げ」ることができ、そして視野を広げる＝「興味」「関心」の対象を広げることの大切さを学ばせていただくことができた。

また、この学んだことを生かし、職場内メンバーの行動や考え方にできるだけ「興味」「関心」を

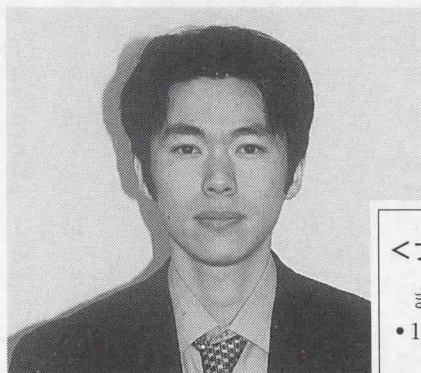
持つように努め無我夢中で行動したことで、一年前に抱いていた不安を「閉じこもってしまう殻」にしてしまうことなく、「乗り越えるべき壁」とすることができたのであろう。

◇おわりに

第十二期生としてこの産政塾に参加でき、塾生のみなさん、それぞれの会合での講師のみなさん、そして事務局の安井さんと出会えたことは貴重な体験であった。この場を借りてお礼を申しあげたい。また、この塾誌原稿についても納期を無視し続けたあげく、特にテーマや構想があるでもなく駄文を粗製濫造してしまい大変申し訳なく思っている。安井さん、本当にゴメンなさい。

最後に、第八回産政塾（飲み会）でみなさんと再会できる日を楽しみにしています。

美 し い も の



株式会社デンソー

松 尾 正 樹

<プロフィール>

まつお まさき (30歳)

- 1994年 日本電装(株) (現(株)デンソー) に入社
冷暖房企画部に配属
- 1997年 人事部に異動 現在に至る

<家族構成>妻1人

<趣味>ドライブ&おいしいカフェ

<モットー>Don't put off till tomorrow what
you can do today!

「あなたにとって美しいものは何ですか」と聞かれたら、皆さんは何を思い浮かべますか？

ある人は花と言うかもしれないし、ある人は富士山と言うかもしれない。またある人は自分の奥さんと言うかもしれない。

世の中には様々な物があり、様々な景色があり、様々な人がいる。人それぞれ美しいと感じる価値観も異なる。

それでは私にとって美しいものとは何か。もちろん花も美しいし、富士山も美しい、もちろん自分の奥さんもとて美しいと思う（ことにしておく）。しかし私はこの場を借りて皆さんに是非ご紹介したい「美しいもの」がある。それは「セミの羽化（うか）」である。羽化というのは、セミが幼虫から成虫になることを指す。私はこの「セミの羽化」がとても美しく、また極めて神秘的なものであると思う。そのセミの一生と羽化の様子をご紹介します。

羽化の紹介の前に、まずセミの種類について簡単に説明したい。セミといっても日本にはいくつかの種類、セミが生息している。中部地方ではニイニイゼミやクマゼミ、ツクツクボウシの鳴き声をよく耳にするが、なんといっても代表的なものはアブラゼミであろう。クマゼミやツクツクボウシといった透明な羽を持つセミに対し、アブラゼミの羽は濃い緑色がまだらになっており、お世辞にも決して美しい羽とは言えない。また鳴き声もうるさいだけで、秋の訪れを知らせるツクツクボウシのような儚さや趣き等は微塵も感じさせない。しかしそのアブラゼミの羽化こそがまさに美しく、かつ神秘的であるのだ。

木の幹に産卵された卵は、数日の後に孵化（ふか）し、小さな幼虫として誕生する。幼虫は幹をつたつて地上へ降り立ち、そして地中へともぐつていく。その地中で木の根から汁を吸い、なんと7年もの間地中で暮らすのだ。真っ暗な地中で、誰かと会話するでもなく、ただ孤独で寂しい幼虫生活を七年間ひたすらと続ける。成虫後の素晴らしい世界を夢見て。

そして七年後のある日、一回りも二回りも大きくなった幼虫は地上を目指し進出を開始する。一掘り、そしてまた一掘りと、土を掻き分け掻き分けし、そしてようやく地上へと到達する。七年ぶりの光だ。待ちに待った光との再会であるわけだが、残念ながら七年もの間の地中生活によつて光を受けつけない眼や身体へとなつてしまつていた。もし地上へ到達した時間が昼間の時間帯であれば、すぐには地上へとは這い上がらない。夜になるまで地中でじつと待つのだ。七年に比べればたつた数時間待つなんてことはなんでもないことだ。そして辺りもすっかり暗くなつた夜になつてようやく地上へ這い上がり、そして自分が羽化するにふさわしい場所を探し始める。それは木の幹であつたり、枝の先であつたり、草や葉であつたり、建物の壁であつたりする。そしてここだという場所を探し当て、そこで羽化すると決めた瞬間、動きが止まる。その場のすべてのものが凍りついたかのようにぴくりとも動かなくなる。

どれだけ長い時間待つのだろうか、いや本当はものの五分もたつていないかもしれないし、実は数時間以上たつているのかもしれない。その時、ある一瞬の変化——その静寂し凜と張り詰めた空気を打ち破るがごとく——、一瞬の変化が生じる。

「ぴりっ」。

幼虫の背中の殻が破れた。「ぱりっ」という表現がふさわしいかどうか分からない。「ぱりっ」かもしれないし、「べりっ」かもしれない。しかしそんな擬音語がどうこうという問題ではない。ただ一つ言えることは、幼虫の背中の殻が破れ、辺り一面の空気に劇的な変化が生じたということだ。その一瞬から神秘なるセミの羽化が始まる。殻の破れた部分から少しずつまた一生懸命に自ら身体を震わせ、新たな世界へ一歩ずつまた一歩ずつ確かめるように真つ白な背中をせりあげる。この時点で、あのアブラゼミは驚くことに雪のように真つ白な色をしているのだ。

頭の部分が現れた後は体のあちこちの部分が次々に登場してくる。小さく黒くつぶらな純真無垢な眼が現れ、これからの飛行に備え丁寧に折りたたまれた羽が現れ、今にも折れそうな細い糸のような脚が現れてくる。そして前脚、中脚を完全に殻から抜くために一旦ひっくり返り、落ちんばかりに反り返る。そして脚が完全に抜けたのを確認すると今度は自らの腹筋を使って起き上がり、殻にしがみつこうように上体を起こす。最後に残りの部分、後脚やお尻の部分をゆっくりと殻から抜いていく。完全に身体を抜けさせた後は、今度は折りたたまれていた羽を伸ばす番だ。コンパクトに折りたたまれ、しわくちやになっていた羽を、そのしわの一本一本を伸ばすかのようにゆっくりと広げていく。しばらくするとまるでアイロンをかけたてのYシャツの襟のようなしわ一つないピンと張った羽ができあがる。

ここまでで殻からの脱出は終了であるが、この瞬間こそ私はもっとも美しく、神秘的な光景だと思う。その真つ白な身体は、まるでこれから結婚式を迎える白無垢の花嫁のように美しい。羽化は、七年間耐え忍んだ地中での生活から解放され、これから自由な素晴らしい世界へと飛び立つ為の儀式な

のかもしれない。この羽化の様子、そして伸びきった真つ白な羽をたたえた様子こそ、正に生きるものの美しさの象徴ではないかと思う。

殻から完全に出きった後は、しばらくすると全身が徐々に色づき始める。朝になる頃にはすっかりよく見かけるアブラゼミの姿になっている。そして待ちに待った大空へと旅立っていくのだ。今まで七年もの間、共に時を過ごし、さつきまでしがみついていた「殻」に別れの挨拶を告げて。

以上がアブラゼミの羽化の様子である。電柱や建物の壁にとまり、やかましいくらい的大声で鳴き、縦横無尽に空を飛び、そして時には自分を捕まえようとする小学生におしっこをひっかける、小汚い色をしたあのアブラゼミの姿からは想像もできないくらい美しい姿だ。

しかしそんなアブラゼミも、地上での命はわずか一週間しかない。せっかく苦勞して地上に出てきたにもかかわらず、自由に空を飛びまわることができるのも、ほんのわずかの期間なのだ。そしてセミは鳴き続ける。大声で鳴き続ける。朝から夕方まで、そして夜中さえも時間を惜しむかのように鳴き続ける。他のどのセミにも負けないくらい大きな声で。そうそれは結婚相手を探す為。短い寿命の間にその青春を謳歌するがごとく、セミはせいっぱい歌い続ける。

だからこそ羽化は美しいのかもしれない。そう思えるのかもしれない。

ここまで唐突に始め、また非常に長々と書いてしまったが、私が本当に伝えたかったのはアブラゼミの羽化の様子ではない。それは、この産政塾の目的「殻を破る」ことの意味、すなわち「殻を破

「この美しさなのである。殻は自分の力で破るものであり、決して誰かが破ってくれるものではない。破らないでおうと思えば破らずに済む。しかし殻を破った後には、見違えるような素晴らしい世界があり、その世界に足を踏み入れるためにも、殻を破らなければならない時がある。そしてその殻を破った姿は、とても美しい。人生には様々な場面があり、様々な殻があると思う。その殻を自らの意思で一つ一つ破ったとすれば、そこにはとても魅力ある人生が待っていると思う。」

さらにセミと人間との違いは、セミが殻を破るチャンスが一度きりしかなく失敗が許されないことに対し、人間には本当に数多くの殻を破るチャンスや破らなければならない場面がある。そして何度でもトライでき、トライしなければならぬ。殻によっては一度しかチャンスがないかもしれない。しかし失敗したらまた別の殻にトライすればいい。そして私が声を大にして伝えたいのは、「殻を破った姿は誰しも美しい」ということなのである。

私は今回の産政塾への参加を通じ、殻を破れたのであろうか。美しくなったのであろうか。今は分からぬ。なんとなく美しくなったような気もするし、そうではない気もある。しかし今回の参加が、美しくなるための一助になっていることは紛れもない事実である。今破れていなくても、きっと近いうちに自分の力で殻を破る時期が来るのではないだろうか。

最後にひと言述べて終わりにしたいと思う。

「私には産政塾の他のメンバーがとても美しく見える」

今考えること



全トヨタ労働組合連合会

水 野 勝 博

<プロフィール>

みずのかつひろ (32歳)

- 1991年4月 アラコ(株)入社
- 1994年4月 アラコ労働組合執行委員
- 2000年9月 全トヨタ労働組合連合会へ派遣
現在に至る

<家族> 妻・長男

<趣味> 野球・釣り

今回、第十二期産政塾のメンバーに選ばれ、参加することによって色々考える機会があった。身の回りのことも含め、少しこの場を借りて自分なりに表現してみたいと思う。

今回産政塾への参加は、正直なことをいうと「上司の命令」というのが本音であったが、ここで思い知らされた現実がある。それはこの会に参加してはじめて「出会うこと」「考えること」「生きる」との人生観と遭遇したこと。しかし、それは何もこの産政塾にはじまったことではなく、今まで歩んで来た三十二年間という過程の中で、誕生から就職までの間、よく思い出せないくらいの数の人との出会い、別れ、その度に色々なことに遭遇してきたという、知らず知らずのうちに体験してきた自分の生き様をこの機会に振り返らせられたということである。何も私にとって当時は「良い」と思われる人ばかりではなかったが、今振り返れば、私の人生形成の中で全てが必要な出会いであった、そんな気がする。大袈裟に言うことではないが、一つの財産が形成されてくる過程ではないかと思う。そこで、私なりにこの会合を通じて知り得た「財産」と呼べるものに気づいた点について紹介したいと思う。

その一つが「普通」と思っていたことが人それぞれ違うと言うことだ。価値観が多様化する時代と言われ、そうした時代に生きてきた自分にとって「人生を過ぐす」ということと「認識して生きる」ということの違いを思い知らされたことである。言い換えれば、理解していたつもりが、今回のような新たな出会いによって「認識不足」ということを考えさせられたということである。

例えば、ユニバーサルデザイン。会合に出席する前は雑誌などで言葉は知っていたつもりであり、或程度のことは認識しているつもりであった。しかし、実際に話を聞いてみるとその奥の深いこと。

何事も一つのことに集中すれば物事奥が深いことは理解できる。しかし「知らない」ということに気づくには十分な出会いであったと思う。価値観や立場の違いなどで片付けられない程感銘を受けた出会いであった。

もう一つは「ものづくり」に対する自分の認識の甘さである。今まで「ものづくり」は自分の目に見える形である「物」を見て判断していた気がする。しかし本当の「ものづくり」とはそこに至るまでのプロセスを含めた結果であり、そこに携わる多くの人によって成り立っているという「見えない価値」に本当の意味が存在していることを気付かされた。よく考えてみると実は私達の人生も同じであるように思う。人生の中で関わり、関わってゆく多くの人によって作り上げられる結果が人の人生であり、「ものづくり」と変わりないことに気づかされたのである。

今回の会合も含め色々な人を通じて考えさせられた。それは「何事においても、その道のりはハンパでなく、その延長線上に自分の殻を破ることができる要素がいくつも、何時でも含まれている」ということであり、そしてそれを選択するかしないかは「認識して人生を生きる」姿勢があつてこそなせることではないかと思う。フォルクローレ音楽家である方にお会いして、その方の半生を振り返りながら、音楽を通じた家族感・国際感を聞かせて頂いた。私とは全然違う生き方であるし、感性も違うと思うが、自分の経験したことを通じた話の中には、違うからこそ惹かれる物があつたことも事実である。よく「夢」という言葉を使うし、若かりし頃（まだ若いと自分では思うのだが）は友人と話し合ったこともある。しかし、私と明らかに違うのはその夢を現実勝ち取り、自分らしさを追求した方の話の重みといたら、自信に溢れ、楽しそうにも見える。この人は自分の「夢」を追い続け、

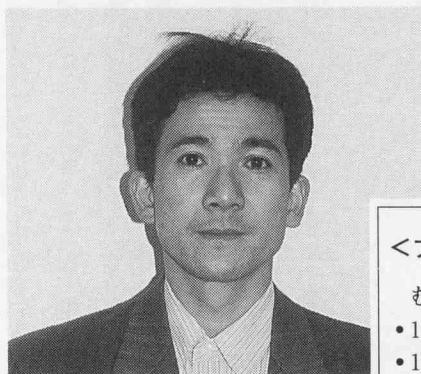
その度に巡り来る「殻」を打ち破る手段を自ら選択し、認識して生きてきた方であるのは間違いない！そう考えさせられる出会いであった。

最後に、私の人生は冒頭でもお話したが、三十二年間という短い道にはあるが、色々な事があったことはたしかである。ただ、その道のりには「今の自分」ではない「違う自分」への願望があることも事実であるし、その機会も今にして思えばあったように思う。（今回の産政塾への参加もそうであるし、今の職場へ来たのもそうであるように。）何も今の自分が「イヤ」というわけではない。反対に満足している部分もあることは否めない。ただ、何かを打ち破りたくてしょうがない「もう一人の自分」が横にいることも事実である。このもう一人の存在は、自ら選択し「認識して生きる」ためには重要な存在である。人は誰でも「心の弱さ」を持っている。

しかし、私が最終的に思う人生とは「自分自身に勝ち続けるよう日々努力し続けることではないか！」と思う。だからこそ、目に見えない様々な人々との関わりによって完成されていく我が人生において、決して後ろ向きな発想は持たず、自分の「殻」を常に破りつづける努力をしたいと思う。周りの方々が示してくれる「選択できる様々な可能性」を見落とさず、自分で努力して新たな自分を創り上げていく。そこには計り知れない可能性を秘めた自分が立っているはずである。私はそう信じている。

最後に、今回お会いした先生方、このような機会を与えて頂いた、中部産政研の皆様や職場の上司・同僚に大変感謝し、一年間のお礼とさせていただきます。本当に有難うございました。

リーダー達の言葉



トヨタ自動車株式会社

村瀬 政彦

<プロフィール>

- むらせ まさひこ (37歳)
- 1963年 名古屋市生まれ
 - 1982年 トヨタ自動車(株)入社 教育部配属
 - 2000年 人事部 現在に至る

<家族> 妻、長女、長男、次女

<趣味> スキー、野菜作り

ここに一冊の本がある。『プロジェクトX リーダー達の言葉』

NHKのテレビ放送を集約した本である。この番組では毎回多くの感動とリーダー達の名言に会うことが出来る。私と同様に毎回欠かさず見ている方々も多いことと思う。産政塾の卒業原稿をこのプロジェクトX調で書き綴る。(なお、敬称は省略させて頂く)

これは、第十二回産政塾に挑んだ、男女二十二名の物語である。

(テーマソングの中島みゆき「地上の星」を口ずさみながら読んで欲しい。♪♪♪風の中の昴、砂の中の銀河♪♪♪)

甘えと挫折

二〇〇一年三月二十九日(木)産政塾の第二会合が、静岡市の「静岡県コンベンションセンターグランドシップ」で開催された。テーマイベントとしては実質一回目の産政塾であり、東邦ガス労組の寺西をリーダーとするBグループの企画で「ユニバーサルデザイン」をメインテーマに催された。その格調高さと、テーマ性に二十三名のメンバーは度肝を抜かれた。

懇親会の席で酒が進むにつれ、各グループとも今後進めるべき自らのテーマについて必然と話し合った。我が、Eグループはアラコ(株)水野を頭に、サプリーダーはトヨタ自動車(株)村瀬、アイシン精機(株)本田、トヨタ車体(株)加藤のメンバーで、次回の四月開催予定であった。

テーマは「フリースタイラー」を命題に、フリースタイルスキーの角皆優人氏を迎え、現地長野県の白馬で開催する計画を第一会合で検討し決定していた。一昨年、昨年と産政塾で行われてきた既存のテーマだったが、事務局もその場で了承していたはずだった。しかし、今回の産政塾の案内と同時期に、四月開催は他のグループで行いたいとの連絡が入っていた。メンバーには寝耳に水であった。事務局への不信任がうなりを上げて立ち昇り、メンバーは事務局の安井に詰め寄った。安井はメンバーの問いかけに冷静にこう言った「テーマを積極的に進めていくくれるグループがある。四月はそのテーマで開催したい」この言葉を聞きメンバーは少し後ろめたかった。産政塾のメンバーは会社の人事、組合関係者が多く、折しも二月、三月春闘関係で超繁忙であった。第一会合でテーマさえ決めれば後は事務局が何とかしてくれるだろう。安易な甘い考えだった。

決意と求心力

以外にもリーダーの水野は事務局の安井から打診が入っていた事を皆に告げた。そしてこう言った。以外に破るのが産政塾の理念。前と同じテーマは相応しくないのではないか。」

皆は産政塾の理念を改めて噛みしめ、リーダーの言葉を深く受け止めた。そして新たなテーマ選定に没頭した。長い時間が過ぎたが良い案が浮かばなかった。酒がまずく感じていた。メンバーが焦り始めていたその時、サブリーダーの村瀬がとんでもないことを話し始めた。「今回がユニバーサルデザインなら、次の我々のテーマは「ユニバーサルスタジオ」にしよう」翌日の三月三十日は大阪に

「ユニバーサルスタジオジャパン（USJ）」がオープンする日であった。巨大なテーマパークで世間の話題をさらっていた。「現代人のリラクゼーション、エンターテイメントを主題にUSJへ行こう!!」その言葉にメンバーは諸手を挙げ賛成した。皆の気持ちが一つになっていた。皆、USJが見たかった。事務局の安井も同じ気持ちだった。（きつと）賛成してくれた。

必然的にサプリーダーの村瀬がUSJへの企画を担当した。しかし、村瀬に勝算は無かった。唯一あったのはトヨタ自動車(株)がUSJに出資しているとの情報だけであった。帰りの新幹線の中で村瀬は途方に暮れていた。翌日から早速企画に取り掛かったが、予想通り上手くいかなかった。USJとプロジェクトが社内のどこかの部署で進められているはずだが、それが分からなかった。大企業がゆえの壁であった。

USJへ向けて

四月十九日木曜日は産政塾の第三会合日であった。健康をテーマに「愛知健康プラザ」で開催された。サプリーダーの村瀬は複雑な心境であった。何とか社内の部署を割り出し、東京本社宣伝部の協力を取り付け、USJ(株)業務部課長の大林と話を進めていた。USJの感触は良かった。が、二週間を経過しても返事が無いままこの日を迎えてしまっていたからだ。会合後、産政塾のメンバーに経緯を含め開催したい主旨を説明した。USJという楽し過ぎそうなテーマ名からか、少し及び腰のメンバーもいたが事務局の安井はじめ全員が賛成してくれた。楽しみにすると言ってくれた。うれしかっ

た。しかし、企画倒れの可能性もはらんでいた。やはり、村瀬の心境は複雑であった。

その翌日、驚きのメールが飛び込んできた。USJ(株)業務部課長、大林からの快諾の返事であった。パネリストに「マーケティング本部長ノーマン・エルダー」をスケジューリングしてくれていた。彼はプレスなどしか話をしない大物だった。やったと思った。Eグループ全員が喜んだ。

五月十七日木曜日、抜けるような五月晴れの日だった。大阪市のJRユニバーサルシティ駅は平日にもかかわらず駅は物凄い人ごみであった。到着する電車全てが満車であった。その満員電車で次々と産政塾のメンバーが集合した。皆、晴れやかな顔をしていた。とりわけEグループ員は輝いた顔付きをしていた。この日までに、アイシン精機(株)本田はインターネットなどを通じUSJを調査し三〇ページを超える資料にまとめ上げていた。トヨタ車体(株)加藤は交通機関の乗り継ぎを調べ上げ参加者に連絡していた。

「21世紀型エンターテイメントを学ぶ」これがテーマだった。メンバーはパーク内を隈なく探索した。凄い人出だった。トヨタ自動車(株)が協賛している「バックトゥーザフューチャーライド」にも既に長蛇の列が出来ていた。九十分待ちだった。「ジュラシックパークライド」「ターミネーター2」も同様であった。メンバーはテーマを念頭において?、施設、キャスト(係員)、レストラン、食事、そして観客達の表情を注意深く探った。非常に高いレベルで完成されていると思った。観客は皆楽しそうであった。探索者も同じだった。

マーケティング本部長ノーマンエルダーの講演を迎えた。当然だが、英語のスピーチだった。パーク内の探索の疲れも忘れ聞き入った。なぜ大阪だったのか?、パークのポリシー、商業圏設定、ディ

ズニールランドとのコンセプトの違い、そして今後の展開までも話題に上った。質疑にも熱が入った。予定時間を過ぎても質問が止まらなかった。

（このあとは、エンディングテーマソングの中島みゆき「ヘッドライト・テールライト」を口ずさみながら読んで欲しい。♪♪♪語り継ぐ人も無く、吹きすさむ風の中に♪♪♪。）

夜の懇親会も盛り上がりを呈し、昼間見たパーク内の話題で話が尽きなかった。会社生活だけでは得られない大きな経験をし、知らず知らずのうちに視界が広がっていた。産政塾全員が満足そうであった。更にEグループ全員が満足そうだった。企画が成功した充実感で満ち溢れていた。懇親会後もパーク内を回った。皆が十歳若返った様だった。この盛り上がりは、場所を変え深夜まで及んだ。産政塾を通じ全員の心が繋がっていた。

最 後 に

私は現在、家庭に帰れば三人の子供がおり最近は多少成長したものの、まだ赤ちゃんに毛が生えた程度の子ばかりで育児パパに専念している日々です。（結構、平日もです）

会社では技能系の人材育成の一翼を担っており日々多くの主として二十歳前後の若年層を相手に格闘しています。最近は部下を持つ立場でもあり、自身としては視野を広めよう、物事に関心や興味を

持つて行動しているつもりでしたが、仕事柄社外との付き合いが少ないこともあってか、以外に身に付いて無かった事に産政塾を通じ改めて思い知らされました。色々な研修が受けられ、外に出掛けられる今回の産政塾はそんな私にとって本当に楽しい、そして新鮮な会でした

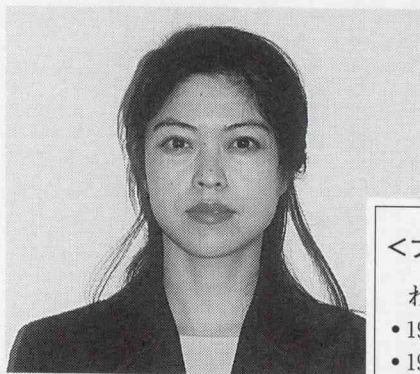
この産政塾で色々な事を得ることが出来ましたが、まず思い知らされた事としては、やはり会社の力でした。初回の会合ではこんな私ごときに、皆がこぞって名刺交換に現れる。職位が三階級ほど上になったと錯覚するほどでした。そして「USJ」からの快諾の返事。何れも私個人の力では為し得る事が出来ないはずのことが出来てしまったのです。ゆえに、もっと私個人々人を鍛えて大きく成らなければならぬことを痛感しています。

次にはやはり、産政塾のメンバーと知り合えたことです。異業種の方の話は何を聞いても面白い。松坂屋の方とは、豊田そごうの跡地出店計画。東海銀行の方とは、UFJ統合の裏話。意外にも保育園の保母さんもおられ、保育園に置いていく親たちの荒れた生活や（暴露してごめんね）、小憎たらしいが憎めない口達者な小悪魔ちゃん（我が家と同じだった）の話、etc……。二十二人のメンバーと知り合えたことは大きな財産に成っていく事と思っています。

卒業するに当たりこれらの知り得た事や財産を通じ、「二皮剥けた！」と自らが感じ取れるよう日々格闘して行こうと思います。

産政塾のみんな事務局的安井さん、ありがとう！。そして職場の皆さん、いい思いをしてチョットごめんなさい。

殻をはみ出る



全ユニー労働組合

若松真理

<プロフィール>

わかまつ まり (36歳)

- 1965年 熊本県生まれ
- 1987年 ユニー(株)入社
(子供・ベビー売場配属)
以降愛知県内6店舗を異動
- 1999年 労働組合専従
現在に至る

<家族> 独身

<趣味> 音楽鑑賞、最近では掃除・・十分な時間がとれないのが残念!

最初に

単組の広報担当として三期目に入る。しかし通常書くテーマは労組の活動内容・主に委員長挨拶なので『自由に書く』ことが非常に不自由な状態である。そのように自由に書いたことがない状況の中、テーマにある程度沿って『殻の外へ出る』ことについて書きたいと思う。

周りからどう見られるかはともかくとして、私は石橋を叩いて叩いて『安全』の確信がつかめてからやっと渡る性格である。よって結果的に、傍目からは殻をぶち破ったことをよく仕出かすのだが、あくまでそれは結果論であり本人が意識してやったことではないことを最初に記したい。

十代の頃の私にとって『殻を破る』『新しい世界に飛び出す』などは労力の無駄にすぎず、十代のいわゆる悪いことをしたい盛りに全く悪いことをしたいとは考えたことがなかった。悪いことばかりが殻を破ることではないのだが、学校から帰って家にずっといることに対して窮屈だと思ったことが一度もなかった。なぜ周りの友人達は親に怒られてまでいろいろ仕出かすのだろうと思った。しかし別に引きこもりだったわけではなく中学・高校とずっと運動部だったし、忙しく過ごしていたので他のことをしたいと思わなかったのかもしれない。

流れに身を任せているうちにいつのまにか

只、今思うとこの時期についても『出来るかどうかはともかくとして、自分がやってみたいこと』

については本能のまま行動していた気がする。なぜなら先程中学・高校で運動部だったと書いたが、私の小学校時代の体育の成績はずっと「2」で本来なら運動なんて授業以外は真つ平ご免だと考えていた。それなのに今も不思議なのだが小学校五年の時、週一時間のクラブ活動を選ぶ際に私は文化系にするつもりでいた。しかし「サッカー」に目を留めたとき後ろから「サッカークラブって大変で脱落者が多いって・」の言葉で「それならば私が残ってやろうじゃないの」と自分の運動能力も省みずその「サッカークラブ」に決め手を挙げた。担当教師は「サッカークラブ」に女子が手を挙げるとは思ってもみなかったためうろたえていたが、まだ新しい学校でクラブに男女の区別をしていなかったこともあって、私を含めて三人の女子が入った。結果的には週一回では私の運動能力は向上しなかったのだが、面白いことにその時その女子の行動に影響されたか「手芸クラブ」に男子が二人入った。

中学でバスケット部に入ったのは込み入った（感情的な）事情があり、意地と根性でやっていたにすぎないが、評価「5」のメンバー中で耐え抜いたおかげで私の評価も「3」になり、その後の陸上部での基礎に繋がることになった。

そのように好きで運動部に所属していたわけではないから、高校に入った時は「運動部には絶対に入らない」と決めていた。昔から本を読むことが好きだったので（最近では仕事関連しか読まないが）新聞部かそれに近い部を希望したが、新設校で興味の持てる部が無く、それでもどこかの文化部に妥協して入り、すぐに帰宅部になるつもりだった。しかしそのときに中学が一緒の話したことがある程度の女性から「私は短距離をやりたいので、若松は長距離が得意そうだから、一緒に入るには良

い組み合わせだ」と誘われた。すぐに帰宅部になるつもりでいた私は、お付き合いのつもりで陸上部に入った。

ところが入部すぐの健康診断で彼女の心臓が弱いことがわかり、あっけなく彼女は辞めざるを得なくなった。残された私と言えば部の先輩が親切でついついそのまま続けることになった。当時、長距離と言っても一般高校女子は800mの種目しかなく、中距離でも短い距離しかなかった。私の中学は公立だが進学校のこともあり、1000mを一度しか走ったことがなかった。しかも中学で「3」にしたものの鍛えた拳句の「3」であつたし、短距離ではどべかどべ2（ブービーとも言う）の実績しかない状況で、中学時代一度走った1000mもなぜかクラスで二番になったが、一度きりであつたので、自分が速いかどうかの確信はなかった。しかし引きずられるまま陸上をやり、帰宅部にもならず、結果、三年生の頃から導入された3000mではそこその成績を残した。成績は「4」になり、自分に対して何一つ自信のなかった私は陸上で注目をされることによりコンプレックスの固まりから少し解放された。

殻を飛び出てみる

しかし世の中うまくいくことばかりではない。二度の大学受験を失敗し結果専門学校に行くことになったが、特に理数系が嫌いだったので選択肢がなく英語の専門学校に行くことになった。英語の学校に通うくらいだから皆欧米（特にアメリカ）好きであり、毎夏、学校主催の「西海岸ホームステ

イ」に多くの学生が参加していた。それを見て旅行嫌いの私も一度外国に行ってみようかと思った。しかし天邪鬼なので皆と同じ所には行きたくはないと思い、唯一の趣味として小学校高学年からロック（特にブリティッシュ）が好きなので、人生で一度きりの海外旅行をイギリスに決めた。すでに八十年代後半に入りかけた時期だったのでパンクの残骸もなく景気が少し上向きかけたイギリスがそこにあった。私としてはあくまで今回を最後の海外旅行にするつもりでいた。しかし一ヶ月の滞在中、最初はずっとイギリスにいるつもりだったのだが、イギリスに行ってから仲良くなった二人がそれぞれ



大陸へ渡るといので「最後だから渡つてみよう」という安易な気持ちでロンドン・パリ往復キップを買った。

このホームステイツアーは一人で参加したのだが、私は国内も一人で旅行した経験がまったくない（旅行嫌いであるから）なかでパリに渡った。駅でホテルを何とか取ったのは良いが方向オンチときているので迷っているうちに暗くなった。色々迷ったが最終的には駅で一泊することになった。しかし、翌朝目覚めたとき「こういうのも楽しいなあ」と感じた。一泊駅で寝ただけで何か一人でもやっていける自信がついて、しかも一人旅が面白くなった。それ以降会社の研修を含めると海外は二十回を越すこととなる。

今でこそ一人で海外に行くことは珍しくないが、当時は特に女性の一人旅はまだ珍しいイメージがあった。最初の頃は帰国して半年経つと「そぞろ神つきても心狂わせ・」次の旅行へと駆り立てられた。しかしそれは段々只の楽しみではなくある意味義務的な要素が出てきた。なぜなら自分の知っている世界の狭さや自分自身の小ささについて、外国を旅行する度に思い知らされることになったからである。知らされる度にもっと多くの世界を知りたいと感じたし、普段自分が悩んでいるようなことや醜い感情などは大きな世界から見れば本当に小さなことだということを、常に意識していかなくてはならないとも感じた。だからこそ旅行は楽しみでもあるのだが自分自身を見直し、考え方を整理することでもあった。

それぞれの国で良い経験をしたが、そのなかで特に「インド」と「イスラエル」については強い影響を受けた。インドでは日本とはあまりにも時間の流れや考え方の違い。富裕な人々もいるのだが貧

しい人々や、それが当たり前とさえ思い逞しく生きる人々に対して、当時総中産階級意識でいる日本人について考えた。今考えると恥ずかしいことだが、私はインドで物乞いを一度やってみようと思っていたのだが本物（憐れみを得るためわざと不具になるというような、まさしく本職である）の中ではとてもやる勇気がなかった。

イスラエルではオールドエルサレムの大きくは全く異なる三つの宗教が背中併せて共存している状態に（常に解決することのない問題を抱えていることは言うまでもない）頭の中がかき回される思いをした。しかしそこで宗教の重さと宗教の縛りが弱い人間が知ったようなことは決して言えないと感じた。（当時某日本人ジャーナリストは『ホロコーストはなかった』という記事を雑誌に出しそれが元か？その雑誌はその後廃刊）決してこの状況は時代が変わろうと解決することがない、とユダヤの嘆きの壁からアラブの人々がひれ伏すモスクを見ながら思った。他にもヨーロッパの文化の深さやアジアの人々の逞しさを感じ、国によつては人が売買されるような貧しい国などにも行つた。偶然に日本という場所に生まれたことで多くの国々に行き、自由に生きることが出来ることがどれほど幸せなことかと思う。今はとても行く暇がないが、これらは旅をしなければ決して肌で思うことはなかっただろうと感じる。

TO BE CONTINUE

会社に入つた数年は全く労組活動に関わりを持たなかつたし興味もなかつた。きつかけは入社五年

目のときに女性委員をやっていた友人から組合活動でゴルフの打ちっぱなしをしている、ということを知り、聞いてその頃ゴルフをやっていたので「丁度いい、変わって」と女性委員をしたのが最初である。参加したら前の店の知り合いがいたことや、仕事に対して色々考えていた時期に語り合える場があったということで一気に入り込むことになった。そしていつの間にか地区の女性委員リーダーとなり試行錯誤しながら活動をした。しかし入社十年が経った頃、今一度本腰を入れて仕事をやろうと思い暫くは組合を止めることにした。しかし異動した先では様々なことがあり、又分会（店）の役員をやるしかないと考えていた矢先、「専従の中央執行委員にならないか」という話しが来た。正直、仕事において非常にやりがいを感じていた頃なので現場は離れたくないという思いが強かった。しかし組合OGの「組合をやるのだったら最後の機会」という言葉と母の「違う環境に身を置いて、世界を広げることが必要」の言葉に後押しをされてこれで三期目に入る。

以上のように私は保守的で冒険心はないが、結果的にはたまに「殻の外に」出ているのかな、と考える。これから年を取りますます保守的になっていくのだろうが、これからもたまには殻の外に出て自分自身を考え直してみたいと思う。

今回産政塾に参加し、普段話す機会のない色々な業種の方々と話す機会と、業務では難しい（楽しい）活動に参加させて頂き感謝しています。そして何よりも黒子（と言うには大きすぎるけれど）となって活動を盛り上げてくれた安井さんには、活動時間以降も本当にお世話になりました。

時 の 彩 り

中部産政研 主任研究員

安 井 孝 一

塾誌への寄稿を事務局も行っていた事を忘れていたわけではないが、期限を間近に控え、塾生からの原稿提出が捗々しくないので、なかなか書くことが浮んでこないだろうな、大変だろうなと他人事のように心配していたが、自らも書かなければと思いついてからこれがなかなか進まない。何について書こうかと思いをめぐらせてみても、もの書きの経験を積んでいない素人にはすぐには浮んでこない。恥ずかしい限りである。

人の記憶というものは本当に不思議なものだと思う。「想い出は美しいもの」といい、過去の記憶というものは、思い出す側の脳の操作で美しく化学変化を起こさせるというものだ。その当時はどんなに嫌で辛いものだったとしても、そのことが月日を経ることにより色をセピア色に変え、なんだかふんわりとやわらかなものに変えて「あんなこともあったな」と、「あれも良かったんだろう」と思わせてくれる。そうやって思えるのは今の状態がそれなりに良かったと思えるからだろう。今が納得のいかない状態だったとしたらいつまでも昔を悔やんでやりきれないということもあるかもしれない。ということでは、自分は今をそれなりに良いと思っているのか。そう思おうと脳が操作しているのだということも言えるかもしれないが。

なんだかわけがわからないことを書いてしまった。昔、人の記憶や夢のメカニズムについて無性に興味が湧いた時期があったことを思い出した。宇宙の謎や未だ解明されない科学の世界もあるが、人の脳の働きはもっと身近なものなのにまるで神秘の世界である。なぜ恋をし、悩むのか。そんなこと

が当時の僕には大命題であつた。突き詰めていくと哲学の分野に行き着いていくのかもしれない。

さらにわけがわからないことになってきた。そう、わけがわからないついでに時間についても書いてみよう。

「時間」とは本当に不思議なものである。時間だけは誰にも止めることはできないし、それを短くしたり伸ばしたりすることも不可能である。ある人にとっての一秒は他の誰にとつても一秒であり、一年の長さも人によつて異なるというものではない。そんな万人に与えられた時間、いつのまにか過ぎていく時間はとてもはかないものに感じるが、それがあつた味付けで、まぶしいほどの光を帯びてくる。それが人との「出会い」ではないだろうか。人との出会いはときに時間を忘れさせ、愛する人とのひと時はそれを永遠にも感じさせる。感銘を受けた人、やさしい声をかけてくれた人、叱り飛ばしてくれた人、さまざまな人との出会いが人生という時間に彩りを付け加えてくれた。そんな出会つた人たちすべてに感謝しながら、これからの「時間——人生——」にまた新たな彩りを加えていきたい。自分も人の人生に彩りを加えられたらと思う。それがどんな色かはわからないが、それは気にしない。いろんな色があつて人生という絵は美しくなると思えるから。

産政塾で出会つた人たちに感謝したい。みんなと出会い、過ごしたあの時間に感謝したい。ありがとう。

中村さん

大きな身体、大きな声、大きな腹回り？、そして大きな度量。スケールの大きさは参加回数不足を補って余りあるものでした。

近藤さん

静かな雰囲気の中にきらりと光る知性。あの落ち着きぶりには感嘆いたします。でも興奮すると声が高くなる？一面も。

若松さん

リトルワールドでのインド民族衣装にはのけぞった。似合いすぎる。産政塾に花を添えてくれた姐御に感謝。

梶川さん

「Takuya&Yoshio」のデビュー、産政塾では果たせませんでした、いつの日か。メガネの奥の垂れ下がったやさしい目が印象的でした。

高橋さん

硬派、だけどスケベっぽい？メガネの奥のまなざしの鋭さ・たるみ具合でオン・オフのけじめを感じさせる方でした。

寺西さん

みんなのお兄ちゃん的存在でした。みんなと年齢差を埋めるどころか、はるかにしのぐ体力を第3回では立証してくれました。

中里さん

かわいい、と言っではいけないでしょうか、すごく楽しそうに笑う笑顔が大好きでした。銀行マンの印象を変えてくれました。

内田さん

最年少、女性、保母さん、どれも産政塾には大きな刺激でした。あのちっちゃくて細い体は守ってあげたいと思わせますが、どっこい、しっかりしたお母さんでもあるのです。

芳賀さん

面白い人だなあ、と思わせた第二回の産政塾報告。みんな楽しく読んだことでしょう。遠い三重からの参加ありがとうございました。

武田さん

物腰のやわらかいしゃべり口、知的印象を植え付けておきながらのあの飲みっぷり、バイタリティを存分に感じさせられました。

竹中さん

サービス業のお手本。相手を不愉快にさせない魔法を僕にも教えて。アルコールが入った後の赤ら顔の竹中さんも大好きでした。

江尾さん

背が高く、凛々しいマスク。加えてやさしい微笑み。あこがれます。リトルワールドではお世話になりました。みんなリトルワールドにもっとどんどん行こう。

松尾さん

最年少組。ケラケラと笑う松尾さんの笑顔は100万ドル。第五回の産政塾報告は塾生みんなのバブルになったことでしょう。

長谷部さん

飲みに行きましようよ、と笑うと目がなくなる屈託のない笑顔が印象的な、誠実さを感じさせる方でした。ゴルフも一緒にしたいですね。

柏谷さん

最長身。バレーボールで鍛えたやさしい大男。現役を引退してからの増加しつづける体重との戦いは僕と同じ。いつか会うときはスリムになってビックリさせますよ!?

羽根さん

お祭り男。法被に鉢巻姿を一度見たかったです。さぞかしお似合いでしょう。口数の少ない中にやさしさが漂ういい男でした。

後藤さん

語ることが大好き。夜がふけるのも忘れて語り合うことができるのは素晴らしいことですよね。またゆつくりとやりましょう。

鶴見さん

サッカー選手の片鱗を覗かせた第三回、あのあのビールは最高でしたね。産政塾報告に書かれたエピソードのほかにもう一つ重大なミスを事務局は犯していたのです。使用料を支払わずに懇親会場

へ移動してしまい、電話連絡を受けて慌てて戻ったのでした。

水野さん

笑いながら、目が泣いたり怒ったりしているのを何度も見かけました。でもきつと良かったはずだよ、産政塾は。

村瀬さん

第四回の功労者にみんなで感謝。甲高い声で産政塾の盛り上げ役でした。その声のおかげでどこに居るのかすぐわかる楽しい方でした。

本田さん

首を振りながらの独特のしゃべり口調。ギロリとした目で笑いかけられるとドキッとしますが、やさしいんですね。アマチュア無線の裏話でも今度聞かせてください。

加藤さん

底抜けに明るい、ウィットに富んだ語り口に毎回大笑いさせていただきました。うらやましいくらい面白い方でした。

みなさん、本当にありがとう。時というのは瞬時に終わっていくものではあるけれど、その瞬間から始まっていくものでもあるのだと思います。「出会ひ」もまた始まり。

產政塾活動記錄

《第 1 回会合》

期日：2001 年 1 月 16 日（火）

場所：全労済豊田会館、ツインピークス

内容：第 12 期産政塾開塾式、
塾長挨拶、塾生自己紹介、
グループディスカッション
懇親会



植本塾長を囲んで記念撮影



◀ グループ
ディスカッションは
活発に



懇親会では▶
賑やかに



◀ 楽しい塾の
幕開けと
なりました

《第2回会合》

期日：2001年3月29日（木）

場所：グランシップ（静岡市）

内容：清水茜さんを招いて

「ユニバーサルデザインについて」

討論、懇親会



講師の清水茜さん



◀ グランシップの
バリアフリー対策の
話を伺いました

グランシップの中の▶
レストランにて
懇親会



◀ 「ユニバーサルデザイン」
目からウロコの
一日でした

《第3回会合》

期日：2001年4月19日（木）

場所：あいち健康の森、健康プラザ（大府市）

内容：「30代からの健康づくり

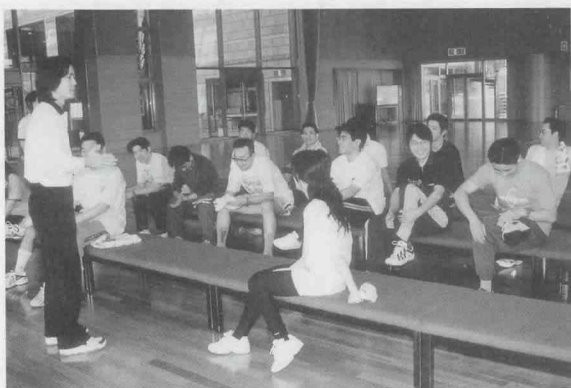
～自身の健康をかえりみて～」

体力測定、健康レクチャー、

懇親会



神妙な面持ちで測定に臨む



◀ インストラクターから
レクチャーを
受けました

うなる腹筋！ ▶



◀ 運動の大切さ、
ビールのうまさ
身にしみた
一日でした

《第4回会合》

期日：2001年5月17日(日)～18(月)

場所：ユニバーサルスタジオジャパン (大阪市)

内容：「21世紀型エンタテインメントの真髄に触れる」

アトラクション視察

マーケティング本部長講演

討論、懇親会

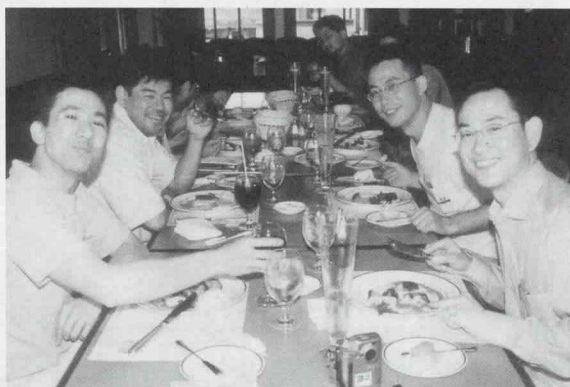


いざUSJへ！



◀ マーケティング
本部長
ノーマン・
エルダー氏

「満喫した！」▶
の笑顔



◀ 童心に帰った
一日でした

《第5回会合》

期日：2001年6月21日（木）

場所：名古屋港水族館、名古屋港ポートビル（名古屋市）

内容：海洋生物学者 林正道さんを招いて

「21世紀における自然との共生

～スナメリの住む海からの声～」

討論、懇親会



生命を熱く語ってくれた林正道さん



◀ 前日の晩に
アカウミガメの
産卵が
あったんです

卵に触わってみる ▶
ことができました



◀ シーフードを
いただき
海の恵みに
感謝した
懇親会でした。

《第6回会合》

期日：2001年7月19日（木）

場所：野外民族博物館リトルワールド（犬山市）

内容：フォルクローレ奏者 木下尊惇さんを招いて
「世界の中の日本～人と人を結ぶ音楽の力～」
討論、懇親会



リトルワールドの展示説明を聞く塾生たち



◀ アルマジロの
甲羅でできた
チャランゴを
見せてくれました



木下さんの弾き語り ▶



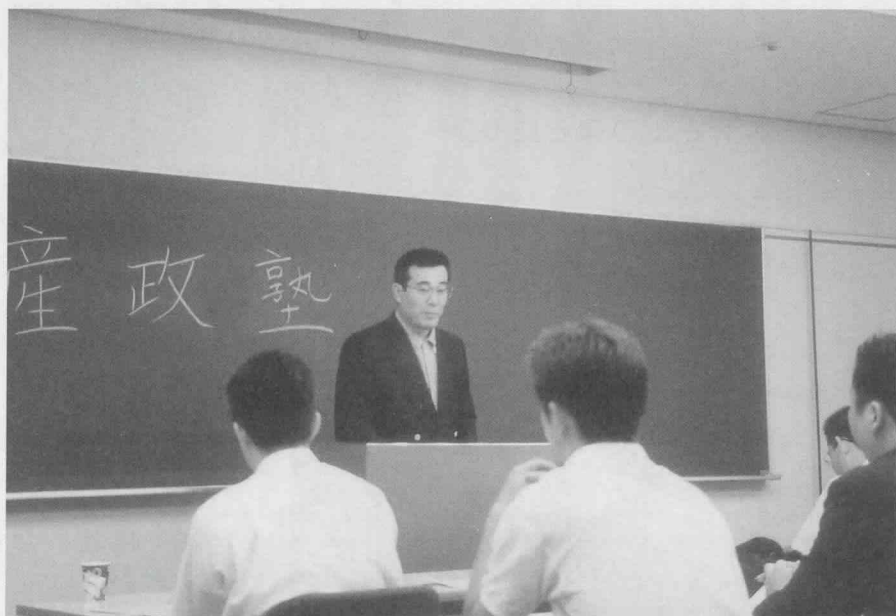
◀ 全員でにこやかに
記念撮影

《第7回会合》

期日：2001年8月24日（金）～25日（土）

場所：つどいの丘（愛知県藤岡町）

内容：第12期産政塾閉塾式、
「産政塾を振り返って」討論
打ち上げ懇親会

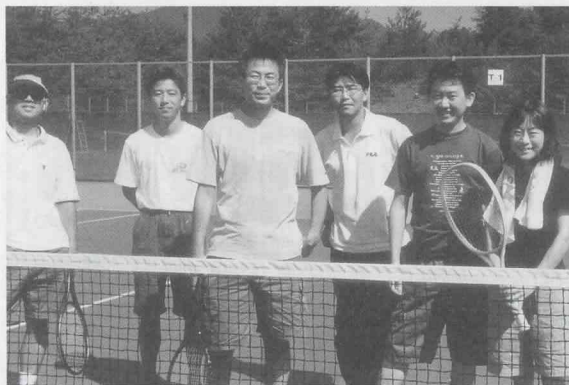


植本塾長よりはなむけの言葉



◀ 産政塾を振り返る
なごやかな討論

締めくくりの宴会 ▶



◀ 二日目は
お疲れモードですが、
テニスをやりました

産 政 塾

2002年4月1日 第3刷発行

編 者 財団法人 中部産業・労働政策研究会

住 所 〒471-0833

愛知県豊田市山之手8丁目131番地

全労済豊田会館3F

T E L 0565-27-2731

印刷所 (有)第一プリント社

製本所 山 本 製 本

塾 政 産

塾 長 植本 俊一

塾 生

豊 田 市 役 所	内田 幸代
名古屋鉄道株式会社	江尾 国博
中部電力株式会社	梶川 拓也
豊田合成株式会社	柏谷 幸彦
トヨタ車体労働組合	加藤 秀人
丸 栄 労 働 組 合	後藤 泰司
株式会社豊田自動織機	近藤 雅人
デンソー労働組合	高橋 正典
トヨタ自動車労働組合	武田 純康
松坂屋労働組合	竹中 隆志
アイシン労働組合	鶴見 実男
東邦ガス株式会社	寺西 知雄
株式会社 UFJ 銀行	中里 浩一
中部電力労働組合	中村 明史
トヨタ車体株式会社	芳賀 章弘
フタバ産業株式会社	長谷部 知英
アラコ株式会社	羽根 章人
アイシン精機株式会社	本田 隆英
株式会社デンソー	松尾 正樹
全 ト ヨ タ 労 連	水野 勝博
トヨタ自動車株式会社	村瀬 政彦
全ユニー労働組合	若松 真理

中 部 産 政 研 安井 孝一